

人 の 一 生

はじめに

村の略々中央を東西に国道一四五号線、南北に旧三国街道が走る。この国道に沿つて名久田川が流れ、その南北には山が迫つてゐる。従つて部落は概ねこれらの道路に沿つて位置している。南には子持山、小野子山が大きくそびえ、中腹には著名な子持牧場がある。

東方が沼田市、旧川田村、西方は中之条町、旧名久田村、南方は山を越えて北群馬郡小野上村と子持村、北方は利根郡新治村に接するが、小野上村との接触は、山塊にさえぎられてあまりなかつたようである。これらの地理的原因は、民俗にも影響を与える。この山あいの村との人間の交流が、当然のよう、民俗の交流をみせているわけである。その中で行政的に村の中央的役割をもつてゐる利根郡の中でも、本宿、中山方面更にこれを越えて旧川田村との交流が強かつたようである。尻高地域はむしろ中之条地域との交流が強かつたようである。吾妻郡とはいながら、このように表現は適切でないが利根郡的なものと、中之条的なものと両者がこの村にはみられるといえよう。もとは行政上この村が北群馬郡であつたからか、「吾妻」といえば中之条方面をさす場合さえあつた。これらが通過儀礼のなかにも散見する。

この地方のお産の神様は、利根郡新治村赤谷の十二様の信仰圏で、本宿ではその謙があつた。一部では春神の信仰もみられた。ただ現在の若い夫婦にはこうした信仰もうすれでいるし、代つて塩釜様が信仰されている。これは多分大正年間に宮城県の塩釜神社から勧請されたもので、これがこの村全般にひろまつたものと思われる。

出産にあたつて特別な産室は造らないまでも、赤不淨として神棚から離れた部屋（コデエ、ナンドなど）でおこなわれるのが一般で、老いの若い頃はやはり坐産であった。「シビの上から育てあげる」といわれ、敷物は藁、ボロ布などで、布団、藁束、こたつやぐらなどに置かれて、いきんだのである。このお産のケガレはウブアケまで続く。従つて「神」に関することは一切避ける。オテンントサン（太陽にさえ当つてはいけない）。しかも神様は子供を早く見たがるものだが、母親はケガレを持つ者として避けるという。ケガレに対する忌みは、今までこそ忘れられているが、昔はこのようにしつかり守つていた。

への縁を女児は鍵で男児は鍵で切るというが、これは将来の夫々のつとめを意識し、その生業の成就を祈つてあやかろうとしているのである。

産婦に与えられる食物には、他の地域同様厳しい制限があつた。県下ほとんど一樣にいわれてゐることで、それがしつかりと守られてゐるところに意味がある。栄養を十分とらねばならぬ時に、栄養の少ないものばかり与えられる。しかも忌むことにそれぞれ説明がつけられてゐるだけに、何とも致し方のない時代であつた。何かそこには産婦や生児に対するもの以外に、信仰的なものを伴う意味があつたのではないかとさえ思われる程である。一方間引きは明治初期まであつたといふ。かつて旧勢多郡城南村で、間引きの経験ある老婆に会つたことがあつたが、ここでは既に語り伝える話として聞かれている。

命名は生後七日目にするのが多いが、ここでは全般に三日目つまり

ミツメにする。この日産土様、屋敷神、安産神である十二様、菩提寺などに赤飯を供えて詣り、また近所三軒のオヒガミ（便所神）にトリアゲバアサンが抱いて詣りオサゴを供える。このとき橋を渡らないで廻るということが共通しているが、本宿では橋を渡るまでは掃き出さないとされている。掃き出すことは葬儀の折の出棺のあとと、嫁入りで実家を離れるときである。これは縁切りをあらわす。つまり人生の一つの区切りである。このオヒガミマドリのときに橋を渡ることが、この世に生を享けての初めの一つの区切りを意識しているともみられる。従つて「橋を渡らない近所三軒」というのもこれに対応して考えられるのではないか。

トトクイケはオボアケの日に髪を剃ったとき残し、剃った毛はオヒガミ様に供えたり、稻荷様の屋敷に埋めるが、一方トトクイケは七つ坊主、呑龍信仰と関連がある。七つ坊主はトトゲを残して剃り呑龍様にお詣りする。ここでは太田市の呑龍様を勧請した沼田の呑龍様にお詣りに行つた。

歯が生えることは、初誕生ほどでないにしても、幼児の生長過程での一つの節といえる。この場合異常な状態には凶を意識する。五月から歯が生えると位牌歯、十月目に生えると塔歯という。何れも人の死に関連づけて意識し忌んだ。その子を糞に入れて三本辻に捨てたり、塔婆を立てて凶から逃れようとする。幼児を捨てるのは弱い子、親が厄年に生れた子である。この習俗は他の地区と同様であるが、ここでは拾い親の子と義理の兄弟となる。そして結婚式の一見に参加し、暮の年取りには拾い親の許に行つて食事をするなど、義務堅いものであった。また弱い子に「千とこ着物」か「百三十三とこ着物」を縫つて着せるのは、多くの人の力でその子を丈夫にしようとする念願のあらわれである。

若衆組については本宿と役原で調査された。役原の方が本宿で聞かれたのよりやや古い形式を残しているようだ。本宿のものが名称も新

しく運営方法も新しい。この組織だった若衆組の活動とは別に、若者は夜遊びもよくした。相撲、石かつぎの力くらべ、棒押などをして、遠くに行つても村内の隣の部落か隣村に行く程度で、帰つてくれば昼間は為すべき仕事を引きとどいた。また古くはヨバイもあった。概ね事前に通じてあつたり、ヨバイに入つてもよいという印を示すものもあつた。特別に遊戯、娛樂のない頃は、こうしたことも格別とがめられないのが社会通念であつたようである。厄年として男二十五歳、四十二歳のほかに十五歳、女十九歳、三十歳のほかに十三歳があげられている。

結婚は家同志のもの、従つて家柄などを考慮して親が話を決め、恋愛は許されなかつた。もし恋愛結婚（クツツキ）をする場合は、一応逃げ出していた。そして嫁は、よく働く、それも山仕事のできることが一つの条件ともされた。また結婚圃は過半数が村内で、村外の場合、ここでいう吾妻つまり高山村より西方の中之条地域よりも、むしろ東方の利根郡方面、あるいは同一行政区域であつたからか北群馬郡小野上、子持村との組合せが多かつた。子持村でも旧長尾村つまり旧三国街道筋による洪川方面との往来がそうさせたものとみられる。

仲人札はトンビノハネといつ。今では金銭ですませているが、以前は酒、オコワを一ホケエ里帰りの日に持つて行き、受けた仲人はそれを近所に配つた。この仲人札はおおげさのものではなく、極く軽いものとされている。従つてこの地域全般に量の少ないことをトンビノハネにたとえる程である。なおこの仲人札を「トンビノハネ」というのは中、西毛地域で、東毛地域ではあまり聞かれないとされる。

婚約、婚入れを「酒買い」という。祝樽の酒が必ず用いられるからである。この婚約の日、あるいは結納をすませて、ともかく結婚式以前に、嫁が婿の家に来て一夜泊るのを、トマリゾメ、カリブンという。その翌日嫁は婿方の父親に連れられて実家に帰る。これをするかしないかは双方の話合いで決めることであるが、一夜泊るだけでなく、そ

のまま式をあけずに居付く場合もあった。婚約と結婚式の間に日数の

少ない場合にはトマリゾメはないし、こうしたことは家庭の事情、農作業との関連、経済的理由によるなどいろいろにいわれている。他の地域でいう足入れに相当するのであろうが、足入れという言葉は聞かれない。

葬礼と結婚式にはいくつかの共通した儀礼があるが、ここでも婚方の朝一見が帰ったあと嫁が出発するとき、デハノメシをたべ、嫁が婿の家に着いて庭から座敷に入るとき、あるいは嫁が実家の茶の間から出るとき、オガラで作った鳥居をくぐる。別記のようにこれが縁切りを意味する一つの区切りであった。

古くは婚礼に終始若衆が大きな役割りをもつっていたものであるが、特にトリムスピは若衆頭の仕事である。若衆頭は別待遇を受ける。一見衆の脇でごちそうになるし、式がすむとお相伴がついた。権限も大きいが責任も重く、それに応じた待遇を受けるのである。式の翌日はカネツケ祝い、そして嫁方からアトタズネの女一見が来る。三日目は婿方の女衆が婿、嫁を連れて里帰り、四日目はカネツケブルマイで夜はゴテイグアルマイとなる。これがこの地方一般の経過であった。

誰しも厭う人間の死には、何かしらの前兆があつた。理窟でなしに人の心に通じるものであろうか。鳥なき、寺を訪れる人の魂など共通したもののがみられる。これに対して、死の迫った人をよみがえらせようとしたもののがみられる。これに対して、死から逃れようとすると相互の魂の往来、神への祈願に加えて、着物に在るとみられる死の前兆を取り去ろうとする念の入った行為があつた。またこの着物をしまって、そこで水を病人に飲ませるなどは、単なる水ではない靈水であつて、それと祈願する人の魂を病人の身体に入れることによって、蘇生させよう

とする必死のものであつたに違いない。

枕団子、枕飯は忌みをもつ。従つて普通の煮方はしない。玄米を臼を左回りにひいて作った粉、とがない米、イロリやカマドではなく台所に繩をさげ、これに鍋をつるして別火で煮る。このことは固く守る。

湯灌の湯も同様にして沸かすのである。そして湯灌する人の支度も繩帶という尋常でないものである。

葬儀に際しては、嫁に行った者、分家した者を含めて兄弟姉妹の数だけ帳場が設けられる。この嫁に行った者、分家した者は、後見人だけ帳場が設けられる。この嫁に行った者、分家した者は、後見人がついてきて帳場を預かった。従つてこれに香典を出す人は、各帳場に出さねばならなかつた。そしてこの帳場を出した兄弟姉妹に位牌が渡されるのである。このときろうそく、線香と油揚、米と一緒に渡され、位牌は背中に逆さまにさして帰る。ろうそく、線香は自宅に持ち帰つてからの供養用のもの、油揚、米は持ち帰ると近所の人が仏様を迎えるカエリドキに用いるものである。なお位牌を受取つた者は必ずその夜帰らねばならない。遠方で帰れない者は、一度家から出て橋を渡り街道に出で帰つたこととし、再び戻つて泊ることになつてゐる。

従つて兄弟姉妹の多い程帳場、施主はこれらのことが終るまで大変であった。この帳場への香典とは別に、親しい人はオンシン米三升を持つていった。これは香典の古い形、つまり古くは香典は金銭ではなく穀物であったことの左證とみてよいのであって、それが吾妻郡の一部に残っているものである。これらの習俗は、本県では利根郡、吾妻郡その他の二、三點在してみられるもので、特徴的なものとして注目される。穴掘り役が大役（シンヤク）であることは、施主が葬儀を手伝う多くの人々の中でも特に気を使うことで知られ、それも労力的についへんであるというだけではない。一部の地域で特別の決つた人がこの役を受持つてゐる例、また一部地域で隣組以外の人が受持つこと、ここでも隣組の人が交代で受持つものの、その人は他の仕事は分担しないということなども考え合せることが必要であろう。

枕石は部落によって棺の下に入れたり、棺の上に置いている。位置は異なつても意識に相違はない。またデハノメシについては、熊野では僧侶とお相伴に出す一杯の盛りつけ飯、本宿では位牌わけのときの膳の飯、尻高では出棺前に参列の人が一本箸に一・二粒づけてたべる飯、五領ではデハノメシがないというように部落によつて相違がみられる。

竹を割つて墓上の土盛りの周囲に曲げてさし魔除けとする。これをメハジキといい、山犬などの動物が掘り起こして死体を喰おうとする竹がビーンとはね返るという。戸室ではこのメハジキをモガリといい、熊野では竹を弓なりに曲げてさし、垣根のよう仕切つてモガリという、火の口ではカシヤを払う為に出棺のとき屋根に向つて射る弓の弦を取つて墓上に石をしばつてつるのをモガリといい、本宿ではこの石を搔すると墓参に来たことを死者は知るのだという。役原「モガリを上手にしておこう。今の若い人はメハジキをませておこう」といつたといふ。これらを総合すると竹を曲げて墓上にさしたのをメハジキといい、垣根のよう周間に仕切つたのをモガリといつて、前者は後者の略式のように認識しているようである。そして竹に石をつるした魔除けと三つの形式がこの地にあることになる。この点では吾妻郡郷恋村の場合とほとんど同様である。然し本来のモガリの意識は既になく、他の地域にみられる山犬、狼除けとしてのメハジキの意識に近いものであつた。

次にこの村には県内でも例の少ないイキヅエ、イキヌキダケがみられた。中山一本宿では竹の節抜いて棺箱に届くようにさす。そして七日毎の墓参のときこの竹の根元に水をかける。中山では下の仏に水が通じるのだといふ。本宿では「水が届かない」と死者が生き返った時に困る」といって、この息抜き竹のもつ本来の趣旨をうかがわせてゐる。

埋葬後帰宅してのオキヨメはどの部落でも確実に行なつていた。並

の葉で家の神々をきよめ、家の火所の灰（あるいはわずかに火のついた灰）を三本辻に送り出して、死のケガレを祓いきよめる。火をあらためる神聖な儀式である。

門牌は死後一七日の間は立てておく。今回の調査では本宿でのみ聞かれたが、以前はおそらく全村でみられたものであろう。そして四十九日はメハジキその他墓上のものを整理して燃してのハナオシ、オタナアゲなどの儀式と共に餅をつき、これをランダギ餅という。本宿では大正頃までやつた習俗だという。また利根郡の一部でみられるカゲ見舞が五領でみられたのは、この習俗の分布をみるとうえで注目される。

全般に行政上の利根、吾妻両郡にみられるものがこの村にも存在しており、地理的な面との関連から意義あるものといえよう。

（池田秀夫）

一、誕生

(一) 妊娠・出産

妊娠と世間いまの若いものは、公然とおおてがらをたてたようにならぬが、そのひとに話すが、昔は、子どもを産むまで、妊娠をかくしておかなければ常識だった。つまりなどいうのは、夫にいうのもはずかしくはばかられた。（新田）

背ばらみ おながが前に大きくならない人のことをあの人には背ばらみだといつた。背ばらみは背中がいたくなってしまう。（戸室）

あいばらみ 勝ち敗があるとて姑と嫁が妊娠している場合には姑が自宅で、嫁が実家で生むよつにした。（戸室）

腹帯 留を六尺位に切つて自分で巻いた。イヌの日を見て自分でし

腹帯は妊娠五ヵ月目のイヌの日にした。さらしの帯をしめた。最初は、産婆さんがまいてくれた。(中山字原)

安産祈願 オガシショを予めかけておき、生れると主人が赤谷の十二様にお詣りした。オサゴ、お賽錢を進せ、お札をもらつてくる。

塩釜様が石宮に分祀してあり、赤白の旗を進せる。白い旗をもらつてきて腹帯にするとお産は軽い。

産泰様はない。(利形)

お産がはじまるとき、赤谷のお十二様を拝めとい、でかいろうそくをつけて拝んだ。この辺には、赤谷の十二様の講があった。十二様は十二人で、その筆頭が大山祇の神で、中にカヤノヒメというのがあるが、それを赤谷で祭っている。(本宿)

赤谷の十二様(新治村)に行く人もあるが、ごく稀で、このあたりの人は信仰が薄い。寺オホの墓にお産で死んだ人の像があり、お腹の大きい人がオガシショウする例はある。(中山字原)

お産のとき、お産のときを洗つて床の間に立てて、うそくをあげて祈る。とくに何も供えないと、うそく生れるといふ。また、十二様にうそくをあげて祈る。柄杓に水を汲んで逆さに飲むと早く生れるといふ。

(中山字原)
公民館のわきに、石宮の塩釜様がある。大正の頃仙台の塩釜様を勧請した分社である。その他に安産の神様としては、浜島様がある。(五領)

お産の神様として、信仰をあつめているのは、塩釜様、産泰様、赤谷の十二様などである。赤谷の十二様へは、直接お参りに行く。塩釜様については、お産が始まると床の間にうそくをあげ(塩釜様にあげます)といつて、うそくに火がよくともれば安産だといわれた。

(新田)
この辺で、むかしは、安産のためには、塩釜様のお札をいただくと、お産がかるくできるといった。お札はおまいりに行つたときにうけて

来た。お札まいりはとくになかった。

安産の祈願は、赤谷(利根郡新治村)の十二様へお願いをかけた。

お願いをかけるのは、いつでもよい。お札をうけて来た。

お願い生ばたしには、丈夫になつてから行く。

おまいりに行つて、おさいせんをあげて来た。(中山字原)

お産のとき、一番はじめに来てくれるのが、お十二様という。お十

二様のほんもとは、赤谷(新治村)のお十二様。(中山)

安産の神様は一夜様、塩釜様。(中山字原)

お産 初めての子は、母親の実家に帰つて出産するのが多かつた。

(新田)
初子を生む時は、実家へ帰つて生む。うみ月になると姑が実家に送つて行く。生んでから二十一日目に帰つて、オボヤケの報をする。この

時は実家の親が送つて行く。(役原)
よくよく腹が痛くなるまで働いた。働いている方が楽にお産ができる、と言つた。

便所掃除をよくすると軽くできると言う。(熊野)

ナンドで生む。脛をひべがえして薬をしき、その上で産む。膝には、薬をすぐたしたシビを入れた。(本宿)

お産は、陽のさきぬ部屋。ナンドでするものとされていた。脛をは

いで、ワラやぼろ布団を敷いた。

別棟に産屋を設けるということはない。それでは、とうていやりきれぬ。(新田)

お産は、赤不淨なので、神様や神棚から離れた暗い部屋が選ばれた。ふつうは、コデエとよばれる部屋である。(五領)

ふつうのふとんの上に油紙をすいて(數いて)その上に腰巻きをすく。腰にふとんを疊んで当てて半身は起きてて産んだ。子は前の方から取上げた。

ふとんを前へ重ねて置き、それに寄りかかって産んだ人もいる。(北

之谷)

昔は藁をすいて、その上にムシロを敷いてコタツやグラにつかまつて産んだ。(熊野)

藁を敷いてその上で産んだ。「シビの上から育てあげる」といった。

産むときは赤谷の十二様にこのろうそくがおわらぬうちに生まれますようにとおがんだ。ろうそくは神棚にあげておく。(戸室)

畳を引つたって、灰をとって、その上にワラを敷き、フトン皮の古だの、捨てるようなボロを敷いて産んだ。フトンを巻いてそれによりかかって「おつくみさん」で産んだ。(火の口)

表のザシキの奥のコザシキ、人の目のかららない場所で産んだ。畳に布団を敷き、「その上に悪い布団を敷き、うつ伏せになり、一束の藁にしがみついて力んだ。おばあさんと二人で産み、主人は山に行つてない。男などこうした場にくるものではない。(判形)

出産は坐り産。わらやかますなどにおつかかって産んだ。生まれてすぐするには、ノチノモンの処理。今は墓に埋めるが、昔はエンノシタやトボウロのしきいの下に埋めた。(中山字原)

坐産といって、うつぶせの姿勢で産むのがふつうだった。女衆の長い髪は、お産のとき、両手でもつて、ふんばるためのものだ、といふともいいる。覚えてからは、畳を裏がえすことなく、ふつうは、畳の上に、わらやふとん、また、洗濯のきくものなどを敷いた。(五領)

安産したら、つぐ年のお祭に男の子は白い旗、女の子は赤い旗を上げ、お庭草を踏ましてもらう。

九七才のおひめさんによく安産の願をかけてもらったものだ。(熊野)

お産と夫 初子のとき夫が家にいるとパンキに(その都度)いなければなかなか生れないからといって、お産のとき夫は家にいないのが普通である。お産が始まると、夫はけ出してゆく。(中山字原)

お産の時、旦那は産部屋へ入らない。くせになつて旦那が居ないと

生まれなくなるから。

姑や取上げばあさんが世話をしてくれる。

医者を頼んで、産部屋へ入りさえすれば五円とられた。五円あれば正月の買ものが出来た。(北之谷)

産のけがれ 産婦は、出産後、うぶやあけまで神事を避けなければならぬ。これは、産婦の体力によつても異なるが、だいたいうぶやあけまで、きつい労働を避けることにもなるので、合理的なようだ。この時期を大事にしないと、あとでこたえる。(五領)

臍の縫 一握り半で切る。切れる鉄で切り、麻繩でしばる。臍の縫はとつておいて、大病の時に煎して飲めばよいという。兵隊にいく時に持たしてやった。(本宿)

臍の縫はとつておき、子供が虫で病んでいるときに臍の縫をなめさせてやると治る。(戸室)

臍の縫は、こぶしにぎりか。二にぎりのところで、麻のヒモで縛つて、女の子なら鉄、男の子なら鍼で切る。切ったものは、紙に包んで、あとで、ちゃんとミズヒキでもかけて、墓場へ持っていくおさめめる。

残った臍の縫は、一週間もたてば、もげる。もげたものは、紙に包んで、箪笥の抽出にでも入れておく。古い農家の箪笥の抽出を探せば、三つや四つの臍の縫は、たいていみつかるはずだ。

また、この臍の縫を、腹のひどく痛めるとき、けずつて飲ませるといいともいう。(五領)

臍の縫はカミソリで切る。姑さまが取り上げてくれた。(熊野)

臍の縫はしまつておいて、その子が虫をやんだ時にけずつて飲ませる。(中山字原)

臍の縫はうまれて一週間ぐらいはくつついでいた。臍の縫は、きちんととつておいて、本人が虫やみをしたときにこれをなめさせるとよ

いといった。(中山)

後の物 お墓に埋める。お寺で一年に一回イ(エ)十祭りをしてくれる。(本宿)

人にふまれる所に埋めた。今は墓にいる。(判形)

エナは墓へいた。(中山)

後のものは、台所のとば口に捨てたり、墓地に捨てたりする。(新田)

後のものは、ひとに踏まれるほどといつて家の入り口、土間などに埋めた。

現在は、墓地が多いようだ。(五領)

ケサツ子 繩の緒が首に巻いたりして生まれ子を葬る子といつて、坊さんに名前をつけさせてもらつよといつて。(本宿)

産婦の食事 油物、酸いもの、甘いもの、辛いものはいけない。甘いものとスイものは乳がでなくなるといわれた。山イモをやいて食べると産後のアトバラが病めない。またキビダンゴを食べても同じ効目がある。(役原)

産後はこはんに鰹節、味噌ぐらいを食べてた。コンニヤク油ものは百日の毒と言つた。

魅のおつむなんか上等。味噌を煮立てただけの実の入らないからつもんのん。青菜の汁を食うと子どもが青いウンコをすると言つた。(火の口)

麦飯に味噌汁、鰹節、みじめな食事であった。油物はいけない。これを守つていると乳が出てしまうがない。しまいには毛穴からも洩れるという。(判形)

さんぶにんは百日ぐらいい油もんを食べない。食べると目を悪くする。一週間はおかしいに鰹節味噌。干びようのおつゆで過す。実母散ものがされた。(熊野)

産後は油の臭を嗅いではいけない。生物もいけない。昆布もいけないで、おかげは鰹節味噌、汁の具は干びようであった。昆布は、知ら

ずに食べるといけないので、味噌づけにも入れなかつた。青物は子供が青い糞をするから駄目であつた。乳の足らない人は、麦飯の煮えたつた重湯をしづつて、砂糖を入れて子供に飲ませた。

豚の孕んだには、セリをくれないようにしている。そばのうで湯は、家畜の妊娠しているのにくれない。(本宿)

里の米 産婦には、里から米が届けられる。この米をおかゆにして、味噌がいいといつて、鰹節を入れた味噌汁をして、三日間ほど食べさせた。(中山宇原)

妊娠の禁忌 妊婦が葬式に出席すると、青アザ、火事をみると赤アザの子ができるといつて。鏡を持つたり、針を体につけていれば大丈夫だ

といつて。鏡を持っていろといわれた。(本宿)

妊娠産婦は兎の肉を食うと三口の子ができるとか、四足を食うなとか

いわれた。セリを食うとあれど流産する」という。

火事を見ると赤アザの子ができる。葬式を見ると黒いアザの子ができるから帶に鏡を入れとけって言つた。

兎の肉を食べるとミツロウの子が生れる。コンニヤクは骨なしの子ができる。サンショウウを食うとめくらっ子ができる。サンショウウの木のスリコギ棒も使うな。

酸づべえもんも悪い。油も砂糖も梅干しも乳が上る。(トウナヌも悪い)さんぶにんがくる時は油なべもよく洗つて使つた。(北之谷)

月のみちかけ 月のみちる時は、さしじおで、血が出るから、安産だ。(本宿)

産後の仕事 五日目で桑はやしに行つて働いたし、しめえの一人の時はお産のつぐ日から働いた。(火の口)

お産と馬 死んだ馬を夫が、かつぐと妻のお産が重くなるといつた。

(五領) 十二つき 馬の子は十二つき腹にいる。そなつては困るので氣をつける。

馬のたて」をまたぐと十二「つきができる。

旦那が死んだ馬をかづくと十二「つきになる。

腹の中で十二「つきいて産氣^{うぶき}いた人がいた。肥え過ぎて足をふんが

けて引張り出したそなが、ビシンと骨が折れる音がして、母子共に

死んだ話がある。(北之谷)

馬の葬礼や馬のこいだしする時立合^{立ちあ}ちやなんねえ。十二「つきにな

る。(熊野)

道ならぬ子 道ならぬ子として、生をうけた子どもについては、そ

の母の親の子、あるいは兄弟の子として届けることが多かった。(新

田)

くびる 間引きのことは、くびる、くびつたといつた。とりあげはあさんが、子どもをとりあげるとすぐ、男か女かをつけて、くびるかくびるまいかと、問うたという。また、なれたものは、自らくびる気丈な産婦もあつた。明治初年になつて、政府が禁止した。(新田)

死んだ子 世の中では子を亡くす程切ない事はない。毎日毎日墓へ行つて泣いていた。だが昔は医学がおくれていたから回りを見ると皆が子を亡くしているのを知つて、「ああ私だけじゃない。みんな辛い思いをしてる」と知つたらそれから涙になつて墓詣りをやめた。あきらめられるようになつた。(北之谷)

(二) 生児儀礼

初産湯 初産湯につかつた湯は、縁の下など、陽の当らぬ所へ捨てる。普通の産湯は、どこに捨てもよい。つば山へ捨てるということ

は、きかない。(五領)

昔はとりあげ婆さんあるいは近所か家の母親が、釜で湯をわかしてくれた。(利形)

一七夜くらいは、とりあげ婆さんが通つて、産湯をつかわしてくれた。(新田)

とりあげ婆さんや近所の上手な人に入れてもらう。(中山字原)

初産湯につかつた湯は、陽の当らぬ場所に捨てる。産室の床板をは

いで、縁の下に捨てたり、桑原に捨てる。(新田)

アキの方に捨てるとか、日陰に捨てるとかいう。(本宿)

蘿着 麻の葉の模様で男は藍、女は赤のを着せる。生れる前に縫うもんじやなかつた。縫い紋は、松葉のぶつちがい、菱形、柿のようなのがあつた。襟から八分下つた所に付ける。

生れた年ぐらいは、単物はいらない。夏でも薄く綿の入つた物を着せた。(本宿)

ふだん着は、実家から麻の葉模様の五尺ギモンが届けられるが、そうでない場合は、自分で麻の葉をつくる。うこんの方はうるさく言わない。男は青、女は赤。これに対して晴着は、ヒッカケギモンなどといい、ねんねこの上にかける。だいじん様はそういうもの羽二重か袖縮でつくる。(中山字原)

麻の葉の着物は男の子は藍、女の子は赤く染めたものを使って作る。これを着ると丈夫に育つといわれる。ただし、生まれる前に縫うものではないといふ。

子供の着物の襟から八分くらい下がつたところに、菱形や松葉のぶつちがえのような形のものなどをつけるが、これはお守りだと聞いている。(本宿)

麻の葉の着物は男の子は青とかきいろ。女の子はある。

ウブの飯 ウブの飯は、先ずウブの神様に進ぜてから、産衆に食べさせる。また、大勢でいっしょに食うほどよいという。長い夫婦のつき合いの中、夫の給仕は、このときだけだ。(五領)

オボタテ 白飯。一生いっぱい食えるように白米一升をなるべく多勢の人間に食べてもらう。オボの神様にオゼンダテする。稻荷様にはしんぜる。(中山字原)

子供が生まれると、ご飯をたいて十二様にあげた。
ご飯をたいて、おつゆ、おかずも供えてお膳だけをして、神棚の前にあげた。

ウブタテのご飯は、うちのものが食べた。

なお、お十二様は、オボの神様(お産の神様)といふ。判形の溝口

というところに十二様の石宮がまつてある。(中山字判形)
ウブの神様 子供がうまれるとすぐに、ご飯をたく。うちのしゅうとさまとか、近所の人がたいてくれた。うちの米を煮た。これをウブタテのご飯といつた。

そのご飯を、ウブの神様にあげるといって、茶碗に盛って、ゴマメとかおかしらつきと一緒に、お膳にのせて(汁なし)、床の間にしんぜる。これは、産婦には食べさせない。すぐさげて、ほかの人が食べた。この理由はわからない。

ウブタテのご飯は、大勢の人に食べてもらうよいという。将来、大人數ぐらしが出来るといった。(中山字原)

子供が生まれるとすぐに、ごはん(ウブタテノゴハン)をたいて、茶碗にもつて、神様(大神宮様)にしんせた。屋敷の稻荷様にも「はんをしんせた。(中山字原)

孫だき 嫁の実家や親類などはマゾダキといふ。実家からは米一重箱かお鉢にひとつ、それにかづおぶしに着物などを届ける。そのほかの人は米とかツギ(布)衣類などを見舞とする。(中山字原)
近親者は「力米」といって三升持つて見舞に行つた。そうすると「ひだちが早い」といわれた。おぼやがあく二十日までに行つた。(五領)
子供が生まれると、産婦の里から母親が、あかんばうを見に来る。これは、いつと日はきまつていなかつた。これを、マゾダキといつた。

(中山字原)

お産見舞 子供が生まれて、二十日がうちにお産見舞を持って来た。

お産見舞は、近所の人とか、親戚の人が持つて来てくれた。
近所の人は、米を重箱に入れてその上に布を一丈ほどのせて持つて来てくれた。親戚の人は、米一重箱と、いい布を一反ぐらい持つて来てくれた。里からは、米を三升とか五升と、布のいいのを一反ぐらい持つて来てくれた。

米は、産婦に煮てやつてくれといつて持つて来た。(中山字原)

子供が生まれると、オボヤがあくまでに、近所の人とか親戚の人が、

お祝いに来てくれた。お金を持つて来る人もあるし、きれを持って来てくれた人もあつた。近所の人は、きれ(木綿)を一丈(これで子供の物事が一枚できる)くらい持つて来てくれた。親戚の人はすこし余

計もつて来てくれた。(中山字判形)

ミツメ 名前は物知りに依頼してつけてもらう。三つくらい用意してもらい、それらを紙に書いて、幼いものにひかせるのが、よいといふ。長子ならば、母親の里方で迎えた誕生二日めに、命名する。(新田)

生まれて三日目 小豆飯。オゼンダテして床の間と稻荷様にシンセル。この日名前をつける。名前を三つつくつてカンジンヨリにして、欲のない子にそれをひかせて、当たった名をつけた。

この日またオヒカミメイリに行く。オサゴをおひねりにして橋を渡らない近所三軒のオヒガミ(便所)さまにお詣りする。これはトリアゲバサンなどがつれでゆく。便所神様の絵は昔は売りに来た。七日

みつめには、とりあげ婆さんが抱いて、産土様、稻荷様、十二様などへ初参りする。かたい家では、死んでから、お寺へ行く道を知ら

ないでは困るといつて、お寺さんにもお参りする。(新田)
オヒガミサママイリ 生れて三日目に、便所に御幣をさして祭る。橋を渡らないで三軒廻り、オサゴをあげる。(本宿)

生まれて三日目にオヒガミまいりをする。西向きの馬屋を三軒まわり、馬屋にオサゴを持って行つてしんぜる。橋を渡つてはいけない。姑が連れていってくれる。(戸室)

生まれて三日目、オサゴを持って便所参りをした。(役原)

生後三日目、赤坊つれて近所の家三軒を、橋を渡らざりに回り、オサゴを供えてくる。オヒガミ様は女の絵が描いてあって、便所にはつてある。翌日は橋のこちら側の家を三軒廻つた。

夜小便をしたり便所に起きると、この神に祈るとよく当つて夜起き

ないようになる。(判形)

みづめには、とりあげ婆さんが、赤ん坊を抱いて、自分の家のものを含めて、三軒のオヒガミ様參りをする。その際、橋を渡つてはならない。それぞれのオヒガミ様には、半紙にくるんだオサゴを進ぜる。

(新田)

生まれて三日目に、近所の人に頼み、子どもを連れ、オサゴを持つて西向きの家を三軒回つた。この時、橋を渡つてはいけなかった。(戸室)

ミツメ(生後三日目)にやる。橋を渡らずに、三軒歩けという。住宅の便所と橋のない両隣りの便所に、オサゴのオヒナリを持ってお参りする。

通りあればあさんのが抱いて連れていく。額には何も書かない。

橋を渡るまでは掃き出すなどといつて、帚を持ってはいけないとされた。

しかし、棺箱が出た時と、嫁が出た時には早く掃けという。(本宿)

正月おかざりをしたり、まゆ玉を供える。子どもが生まれて三日目に橋を渡らないで近所の便所を三軒借りる。交際がつましくよく。に

家(橋をわたらすに)の便所を三軒かりる。(五領)

三日目に行う。自分の家を入れて近所の便所を三軒廻つた。このときオサゴをおひねりにして持つていく。ほかのものは別に持つていかない。(関田)

ない。(関田)

オヒガミ様は手がないからいつでも口でものが食えるよう、便所はきれいにしておけという。昭和のはじめの頃、利根の方から「初詣」といって、オヒガミ様の絵も幕れに売りに来た。(関田)

子供が生まれて、三日目(ミツメ)に、便所へおまいりした。これを、オボの神様におまいりするという(オヒマイリ)。

子供は、ふつうはうちのおばあさんがつれて行つた。

着物は麻の葉のもの(男はきいろか青、女はあか)を着せていた。

この日、あずきめしをたいして、便所と稻荷様へしんぜ、おまいりして來た。かたくするうちでは、うちと両隣、合せて三軒の便所へおま

りした。(中山山原)

三日目に、あずきのごはんをたいて床の間にあげる。また、便所へも持つて行つてあげる。

この日、オヒガミマイリといつて、便所へおまいりする。橋を渡らずに、子供をつれてうちの便所と近所の便所(合せて三軒)へおまいりした。うちのおばあさんがつれて、オサゴをもつて行つてあげて来

た。(中山山原)

名付け、生れた児の名を付ける時、三つぐらいの名を紙に書いて、

屋敷稻荷様の前に置いて、家の子でも近所の子でも字の読めない

子に拾わせて、その紙の名を授かつた名として決める。名付け親とは付き合いはない。(火の口)

名はミツメにつける。一升マスに三つ名前を書いて入れ、まだ字のわからない子にひかせる。名前は十二支ならなんでもよいというし、

また季節の名がよいともいう。坊さんや神主さんにつけてもらう人も多い。(本宿)

三つ位名前を考え、紙にそれぞれ書きお稲荷様に上げておがみ子どもに引かせたのをつける。(熊野)

三日目までに名前をつける。

候補の名前を三つほど書いて、星敷の稻荷様にあげて、それをうちの子供にひかせた。

名前がきまると、半紙四分の一に書いて、床柱にはりだした。(中山判形)

名前は七日目(お七夜)につける。

本などをつけて、年長者がつけてくれた。

候補の名を三つつくつて、稻荷様にあげておいて、そこから、子供にひかせた。

名前がきまと、半紙に名前を書いて、ひとつきり、表座敷の柱にはつておいた。

投場へは、一番よくかけたのを届けた。(中山字原)

ごくむかしは、三日目に名前をつけたが、今はお七夜につける。

三つ名前をつけてこよりにして、星敷稻荷様へあげて子供にひかせた。こうして名前をきめると、稻荷様のおさづけで、子供が丈夫に育つといつた。

名前がつくと、男の子なら茶の間の床柱にはりだした。女の子なら台所の柱にはつた。むかしは、男の子が生まれると、千両もつけだといつた。女の子は五百両といつた。(中山字原)

もう子供は欲しくないと思っている時に余分にできてしまった子には与分次などつけることもあつた。長男を一郎、次男を二郎という風につけたりした。名付けは半紙に気に入った名を三つほど書き、かんじによりにして星敷稻荷においておき幼児にひいてもらつて名をつけた。(戸室)

オボヤキ 男は二十一日目、女は二十日目。赤飯を炊きマゴダキなど貰つた家に配る。これに対するお返しは(イレモノノミ)という。マメに育つように大豆。子どもは、しゅうとが抱いて中山神社にお詣り

する。母親は百日間お詣りしない。神様は子どもはすぐ見たがるが、

母ちゃんは汚れているからみたくないという。大工さんや職人は、死んだ場合よりも血の汚れを忌む。(中山字原)

女が十九日か二十日。男が二十一日である。男がどうしてもオクである。(本宿)

男の子は二十一日目、女児は二十日にオボアキをした。この時は近所や親類に赤飯をふかして配つた。なお、赤飯の上に南天の葉をのせる

男は二十一日。女は二十日。女はいやしんばうなので早いという。

(戸室) 二十一日目に赤飯ふかして重箱に入れゴマをふって、南天の葉をのせて贈つた。(新田)

男は二十一日目、女は二十日。返しはマメで育つよう豆か小豆を入れる。この時は絶対マチ子を返さない。こまかいから。

お宮参りに紋付けた重ね着をかけて行くのはお大尽様だ。にんにん(各人)でない。

昔は家のお稻荷様をおがむくらい。特別お宮まいりなどしない家もあつた。(熊野)

男は二十一日目、女は二十日目。男は「いやしんばう」だから一日長いという。この日、トトックビの毛だけ残して、あとはグルグルボーズに髪の毛を刷る。刷った毛は紙にくるんでオヒガミ様に供える。(戸室)

オブアケは、女の子は二十日、男の子は二十一日になる。赤飯を炊いて祝う。また、お産見舞いに来てくれたひとたちにも食べてもらう。

(新田) 男児二十一日、女児二十日、赤飯をふかし、お見舞いに来た人に配る。産後は日向に出るときは笠をかぶる。オボヤガあけないいうちは、他家に行くな、神様に御飯を進せてはいけないという。穢れしているからオテントサンに当つてはいけない。オビヤがあけると神様に参るべ

きだが、普通は、冬に生れると四月一日の春祭り、春生れると九月一日の秋祭りに明神様の祭りのとき参る。（判形）

ウブヤがあかなくうちに、夜外に子供を出さなければならない時は、額に犬という字を書いていく。犬がいれば、犬を連れていく。狐がひつかないためである。（本宿）

男の子は二十一日目、女の子は二十日目がオボヤキ。

お産見舞をもって来たところへ、赤飯をおくぱりした。

いれもんがえしとして、豆に育つようにと豆を入れてよこした。

この日、お宮まいりをした。屋敷稻荷へおまいりしたあと、神社へもおまいりした。また、水神様へおまいりした。お宮まいりのとき、家紋のついたウブギをひっかけていった。これをヒッカケギモンといつた。

この日、近所とか、親戚の人をよんでお祝いをした。それを孫祝いといった。（中山字原）

オボヤキの日は、男は二十一日目、女は十八日目。

子供をうちのおばあさんなどがつれてうちの稻荷さまへ先におまいりしてから、うちと両隣の便所へ米をすこし持つておまいりした。

ムラの神社へは、おまつりのときなどに、おまいりにつれて行つた。このときオサゴを持って行ってあげて來た。（中山字原）



ヒッカケギモン（本宿）
(上野 勇 撮影)



ヒッカケギモン（本宿）
(上野 勇 撮影)



ヒッカケギモン（本宿）
(上野 勇 撮影)

オボヤは、男の子は二十二日目、女の子は二十一日目、赤飯をふくして、いろいろ心配してくれたところへ、おかえしとしてくばつた。この日、うちの屋敷稻荷と明神様（ムラの鎮守様）へおまいり行った。あかんぼうをつれて行くのは、うちのおばあさんなど（着物はふくうの着物）。いい着物を着せていく家がふつう。（中山）

ヒッカケギモン 女は十九日、男は二十一日に、ヒッカケギモン着せてお参りをした。（本宿）

トトックイグ 産毛は盆のくばをのこしておいた。トトックイグといつた。（戸室）

オボヤケの日に髪をそる。トトックビを少し残して他はすべてそつてしまふ。そつた毛は半紙に包んでオヒガミサマに供える。トトック

イグはキツネやタヌキにまやかされないようにと残しておく。（戸室）

初生毛 生毛は紙に包んでお稲荷さんの屋敷に埋けた。（中山字原）

赤ん坊の産ぶ毛は、初宮参りに行くとき刺る。不浄のものというこ

とだろうか。（新田）

ウブケは七日におとした。

そつたウブケは、屋敷稻荷のところにおさめた。そるのはだれでもよい。（中山）

うぶげをそるとき、トトクイゲは残しておけという。トトクイゲのことはチングともいう。

子供がころんだときに、神様が、チングをひばつておこしてくれ

るといつた。(中山)

百日目。小豆飯でオゼンダテして床の間や子どもの枕も

クイゾメ。百日目。小豆飯でオゼンダテして床の間や子どもの枕も

と供える。(中山字原)

百日目、御飯にお頭付きをくわせる真似する。(判形)

男女とも百十日にする。小豆飯を食わせる。(本宿)

生れて百十日、小豆飯を噛ませろ、そのあとは何をくれても当らな

い。(本宿)

幼いうちは、一般に女の子の方がわせなので、食い初めも、女の子

が百日め、男の子は百一日めになる。新しいお碗に、きれいな小石を

拾つて来て、洗つて盛つてやり、食べる真似をさせる。丈夫な歯にな

るようなど、親の願いがこめられている。実際には、この段階の子に、

米の飯を食べさせれば、歎らかめのものならば、丈夫な子は、けっこ

う食べるが、弱い子ははきだしてしまう。(五領)

生まれて百十日。御飯を子どもにくれた。特別に膳碗は用意しなかつ

た。(役原)

男女とも百十日目にクイゾメをする。

長いもの(うどんなど)をこしらえてくれれば、長生きするといつ

た。(中山字判形)

男女とも百日目。

茶わんとか箸をかっててくれた。このとき、あかんぼうに、ご飯を食

べさせる真似をした。(中山)

クイゾメは男女とも百十日目。

このとき、あかんぼうに、なにか食べさせるまねをした。(中山字原)

カナババ 生後最初の糞、カナツクソという。(判形)

夜泣き 子どもの夜泣きがひどいときは、太という字を書いた紙を

稲荷様に上げ、また初御飯を供えておがむ。(役原)

夜泣きする子がいると、夜泣きの神様(夜泣き石あり)へ、七色の

お菓子をあつめてしんぜますといってお願い生かけると、夜泣きがなくなるといった。

おむつななど、外へ干しておくと、あかんぼうが心配で、夜泣きする

といった。だから、夜、干物はとりこむものだといった。(中山字原)

堂山に石の地藏様がまつてある。夜泣きの子がいるときには、そこへ行っておがんで線香をあげてくれば夜泣きがなくなるといった。

子供を親がつれて、おまいりした。

そこには、夜泣き石があつて、それをおがんで来た。

夜泣きするのは、日からがたないうち(生後三日ぐらい)に、お

むつを夜、外へほしづなにしたためといわれている。あかんぼう

のものは、夜干しするなど。(中山)

ゆながし ほうそうをうつて十二日目に、あさがら(おがら)で棚

をつくつて、それに赤い紙でおんべろべろをこしらえてたてて、赤飯

をあげて、三本辻へ持つて行った。これは、ほうそうが軽くすむよう

にということであった。

そうすると、風呂に入れるといった。(中山字原)

一夜様 原の堂山にまつられている。女の神様という。

一夜様には、腰が痛いときとか、子供が丈夫に育つようにと、お願

生をかけた。(中山字原)

するい 米をほとばしといで、すり鉢ですって煮立て、さとうを入れたするいで十人の子を育てた人もいた。(火の口)

いい歯 五ヶ月で歯がはえると「いい歯」と言い、子を糞に入

れて捨てた。(新田)

トウバッ子 十月目に歯が生えると、塔婆っ子という。その場合に

は、ここでは三本辻に捨てるのではなく、塔婆をたてるとよいといつた。(本宿)

十カ月で歯がはえると「塔齒」と言い、子を糞に入れて捨てた。(新田)

生れて十カ月で歯が生えるとトウバって言つて悪い。三本辻へ捨てて捨つてもうう。(北之谷)

初誕生 餅をつき、これを風呂敷に包んでその子どもに背負わせる。産見舞をもらったような家には餅をくばる。イレモノノミ(お返し)は靴下、ズボンなどのはきものが多い。(中山字原)

初誕生の日に、餅をついて祝う。この日、餅をついた。これを誕生餅といった。

小判なりにして、誕生餅を風呂敷に包んで子供にしよわせた。

この餅は、親戚などにくばつた。

誕生餅のおかえしに、足が丈夫になるようとに、靴下、靴、足袋とかズボンなどをよこした。(中山字原)

一年たった生まれた日に誕生祝いとして、餅をついて祝つた。

親戚とか近所へは、のし餅をくばつた。

子供の足が達者になるようとに、誕生餅をしよわせた。切り餅を五枚ほど、風呂敷に包んでしよわせた。

誕生祝いのとき、親戚などから、履物をよこした。誕生祝いは、足の祝いといった。(中山)

誕生祝いには餅をついて祝つた。

あかんばうには、のし餅を五枚ほど風呂敷に包んでしよわせた。

(中山字判形)

誕生餅はあんびん。近所とか近親者など、お祝いをもらつたところへくばつた。数はとくにきまつていない。あんは、あまくみられないようにと、塩あんであった。(中山字新田)

初正月 掛軸を贈るが、お返しはほとんどない。(中山字原)

子供の初正月のとき、祖父母が、孫にお祝いとして、男の子には弓を、女の子には羽子板を贈ってくれた。これに正月前に贈つた。

弓や羽子板のかわりに、弓、羽子板の絵の書いてある掛軸を贈る場合もある。

初正月のお祝いの場合には、おかえしはしなかつた。(中山字新田)

初節供 男児には縄、女児には縄を贈る。これに対しても貰つた家からは、女の節供は自家製のすし、端午の節供には柏餅を配つた。(中山字原)

七つ坊主 昭和二十年頃まではやっていた。ボンノクドのトト毛を

残して、あとは剃つてしまつ。女の子もした。法信寺と太田の春龍が懇意であったので、ここから春龍様までお参りにいく人もあつた。行けない人は、沼田の正覺寺(法信寺はその末寺)までお参りにいった。

(本宿)

生まれつき弱い子供は、太田の春龍様にお願いして、丈夫に育つようになると、七つまで坊主にしておいた。これを七つ坊主といつた。学校へ出る前に髪をのばした。七歳になると、太田の春龍様へおまいりに行つた。

ボンノクドのトトケイゲはのこしておいた。この毛は、鼻血が出たときひき抜くと、血がとまるといった。(中山字原)

むかしは、男の子も女の子も、七つ坊主といつて、ぐりぐり坊主にした。女の子は、そのあとおけしをなしてた。

トトケイゲだけは残しておいた。鼻血が出たとき、これを三本ぬけといった。(中山字原)

子どもが丈夫に育つよう沼田の寺にまつり込んである太田の春龍様に、七才までおがんしょをかけた。トトケイゲを残して頭をすつた。鼻血がでたときその毛を三本ぬくと止まるといわれた。(役原)

ボンノクドの所にトトケイゲを残しておいた。小野里留吉さんは、

もつとはやく太田の呑龍様へ行く予定だったが十一歳の時行つた。(五
領)

弱い子は頭の毛をそつて坊主にした。呑龍様にお願生したのである。ただその場合でもチンケは伸していた。鼻血が出たときこれを抜くとなおる。いろいろに落ちたときこれでひっぱり上げてくる(神様が)といふ。(中山字原)

育児 子どもが弱い場合、弘法様(お不動様)へ行つて旗をしんぜ

たり、木刀を供えてきた。(中山字原)

七つ前 七つ前は神様だ。悪いことをしてもしようがない。子ども

は七つの年を越すか境だ。(中山字原)

捨い親 親が厄年に生れた子、十月目に歎が生えた子は十月トウバ

として忌む。二〜三歳になつても子どもが弱い場合、これらの場合はシノミ(糞)に入れて三本辻に捨てる。

それを、近所の子どもを育てるのが上手な人に捨つてもらう。その

子と義理の兄弟となる。そうした例が話者の近くにも二例あり、その

人は、結婚式のイチゲンにもいってもらっている。(中山字原)

身体の弱い子がいると、三本辻に捨てるまねをして、捨い親を付け

て捨つてもらう。捨い親との付き合いは、暮の年取り(大晦日)に一

家そろつて夕飯食べる時、何か持つて捨い親の所へ、毎年夕飯食べに行つた。(次の口)

捨子 むかしは、弱い子とか、厄年の子は捨子をして、近所の人な

どに捨つてもらった。母親が三十三歳のときに生まれた子供は、ヤクドシッコといつて、

三本辻にシノミ(糞)の中に入れてぶちやつた。前もつておねがいしておいた人にひろつて来てもらつた。捨てる日はとくにきまつていなかつたが、暦を見て日取りをきめたようだ。

弱い子どもの場合も同じように捨てた。子供を沢山生んで、丈夫に育てた人にたのんで捨つてもらつた。

捨子をするのは、乳のみのうち、子供が泣きださないうちに捨つてもらつた。

捨い親のところへは、お正月前にせんの餅を持って行つた。また捨い親とは、「おつかあ、おつかあ」といつてつきあつた。本当の親どちらがうところは、捨い親がなくなつたときに、位牌をもらわないのである。(中山字原)

弱い子はお寺の子にしてもらう。

また三本辻にうちやつて丈夫な子を育てた人に捨つてもらい、その

家の子にしてもらう。

貰う方は結納に単衣もんなんか持つてつて貰つてくる。(北之谷)

百三十三とこぎもんを縫つて着せる。「三三軒から少しずつ布きれ

を貰い集めて着ものを縫つて着せる。(北之谷、熊野)

千とこ集めぎもんを作つてきせた。千軒集めなくとも多ければいい。

(熊野)

厄年の子 男が四十二、または女が三十三の時生まれた子は、シノミ(糞のこと)に入れて三本辻に捨て、近所の親しい人に捨つてもらつた。(本宿)

厄年の人の子はやく子といい三本辻へ捨てて来る。体の弱い子も捨てた。(五領)

四十二歳の厄年で生まれた人の子は三本辻に捨ててくる。捨てた子を返りに捨つてもらう人を捨い親という。(新田)

厄年の子は道の三本辻に蘿糞を入れて捨てた。近所のオバサンがひろつてくれる。これは捨い親といった。ひろい親とは結婚する前はつきあいかづく。(役原)

親が四十二歳のときの子供は、捨子した。(中山字原)

三十三とこあつめ 子供が生まれても育たない場合には、親が三十三軒からきれをもらひあるいて、それで着物を縫つて着せた。

その着物をおまもりみたいに着せていた。

これを、三十三とこあつめといった。(中山字原)

とうばあかんぱうに、十月目に幽がはえると、とうば(塔婆)になるといって、其の中へ入れて三本辻へ捨てる。

知りあいの人などに頼んでおいてひろってもらつた。たのんでおいた人が、すぐ拾つてつれて来てくれた。(中山字原)

名替え 昭和の初めに姓名判断をするようなんがムラにやつてきて名を替える人が居た。身体が病弱だからというのではなかつた。小屋の金井幸右衛門氏は「ヒサチヤン」という呼び名で、関田の割田源太郎氏は「マサアキ」と名をかえた。(戸室)

子供が弱い場合には、名前をかえた。ふだん、ムラの人はその名をよんだ。戸籍の名前はそのままにしておいた。(中山字原)

男の子が育たないような場合(弱いこと)には、男の子に女の子の名前をつけた(改名した)。子供のうちに名前を変えて、一生その名でよんだ。これは、男の子の場合のほうが、丁寧にやつたようである。(中山字原)

女の子が育たない時は男の子の名前をつけた。兵隊検査によばれた

ら女の子だった。(新田)

子育て 山の畑から帰ってきて、子どもが泣いてると「生きてらあ」と思った。たいていひもを長くして柱にしばりつけ、「柱子守り」で畑へ出た。

昔は子守りを頼んだ。お富園には着もの、三尺、げたなど買つてやつた。(北之谷)

「てめえの産んだ子は重あねえ、背負つてしまつ」って言われた。年中しょつて仕事をした。天秤かづぐ時は子の頭を天秤をかづがねえ方へ向けといて、かついたものだつた。山からおそく帰るとおこられたものだ。(火の口)

おちに出す 乳がでない場合には、おちに出した。乳の出る人にた

のんで乳をもらった。(中山字原)

イジメ わら製。つくるのに二日かかる。なんねえといつて一日でつくる。これに入れるのは六ヶ月ぐらいたつておもちゃでも持つようになり、はうようになると入れる。それから誕生までぐらいである。

子守り 学校から帰ると、あわさんが、待つていましたとばかり、赤ん坊を、背中にくくりつけるので、背などのびようがない。

余裕のある家では、ムラうちの子に、子守りをたのむこともできた。(新田)

二、年 祝

七五三 三歳、五歳、七歳の祝ともない。七五三の祝もほんの僅かな家でやる程度で一般にはない。お富士詣りの習慣もない。(原)

フンドシ祝い 子どもが七つになったとき、男にはフンドシを、女には腰巻を母がこしらえてやつた。(役原)

年祝い 六十歳を還暦というが特に祝いはやらなかつた。七十七歳を喜寿というがこれも特に祝わなかつた。八十八歳は米寿で火吹竹をくばる。この火吹竹は隣近所に火事があつた時に火の方にむかって吹くと自分の家には火がつかぬというもので普段は水ひきをかけて神棚に飾つておく。祝いをするとすぐ死ぬといつてあまり年祝いはやつてないようである。(役原)

厄年 男十五、二十五、四十二歳、女十三、十九、三十三歳である。道祖神焼きの時に厄年の人が厄落としてミカンや酒などを出した。(中)

男は十五、二十五、四十二歳。女は十三、十九、三十三歳。男四十と女三十三が大厄(役原)

おちに出す 女は十三、十九、三十三、これを三やくといい一九、三十三が本やく

という。

男は十五、二十五、四十一を三やくといい二十五、四十二が本やく。

(野野)

厄年は子供の場合は、男女とも四歳。そのあとが、男十五歳、女十

三歳。

成人の厄年は、男二十五歳と四十二歳。

女は十九歳と三十三歳。

厄おとしは一月十四日のどんどんやきのとき、菓子とかミカンを持

つて行って、くばつた。(中山)

厄年は、子供は四歳。男の子は十五歳、女の子は十三歳を厄年とした。

大人は、男性が二十五歳と四十二歳、女性は十九歳と三十三歳。

厄年の者は、一月十八日には、尻高の厄除観音へお参りに行つた。

また、一月十四日の道祖神焼きのときに、厄落しをした。厄年の者は、

道祖神焼きのところへ行って、火の中に、自分の年令の数だけのお金

を投げた。そのあと、参加者へミカンをくばつたりした。(中山字原)

厄年は、女子が十三、十九、三十三歳。男性は、十五、二十五、四

十二歳。

厄おとしとして、ドンドンヤキの場で、ミカンなどを買って来て投げた。(中山字原)

子供の厄年は四つ。これは男女とも。一月四日の二縁

日に、反町の薬師様へおまいりに行つた。行けない場合には、本人の

着物を持って行って、おがんでもらつた。

男十五歳、女十三歳も厄年という。(中山)

子供の厄年は男の子は十五歳、女の子は十三歳。一月十四日のどん

どんやきのとき、やくおとしをした。

お金を火のもえるところへ、自分の年だけ投げた。(中山字原)

四歳のときには、腹を病むというので、四歳の子供には、四歳とい

わせず、五歳だとしておいた。このときは、一度、本人を神社へおま

りにつれて行った。日はいつでもよかった。餅をつくとか、赤飯を

ふかすとかして、それを神社へ供えてきた。

七歳までの子供については、七つの餅を越すようにと、お正月を二回し

て、としあげをした。(中山字原)

七歳までは丈夫に育つようになると、七つの坊主にしたこともあった。男

の子も、女の子も、髪の毛を剃つておいた。(中山字原)

厄除け 四歳のとき、反町(新田郡新田町)の薬師様へ厄除けに行つた。(中山字原)

としあげ 子供の年令がわるいときにはとしあげをした。これは大

人の場合にはやらなかつた。

子供の年令が、四歳とか七歳の場合に、としあげをすればといつて、

その年にお正月を二回した。ふつうのお正月をしてからもう一度餅を

ついて、おそなえをつくて、としがみさまに供えた。(二月頃のこと

で、うちうちだけのお祝いで、この日には、あつたかいご飯でも炊いて、神様にしんせたりした。

四歳のときは、四歳に悪い年だといって、五つにした。お正月を二

回して、四つの年をさけた。

七つの餅を無事すごせるようにと、七つになるまでは、神社へおま

りに行つた。(中山字原)

病気などして年回りが悪いときには餅をついて、年上げを行なつた。

時期はいつでもよかつた。(新田)

三、青年集団

原一同盟会、本宿一同志会、新田一交友会、五領一共和会、判形一通常会と五つの字に別れて存在する。各組には、それぞれ若い衆頭がおり、その中の一人が会長になる。

会長の下には平役員がおり、会計はおかないと。七戸が一組になり、ミキ幹事が一人つおり、戸アレ役をし、毎戸から金を貰つて、その金で会を運営する。(本宿)

若いしょ 役原には明治末年まで若いしょがあつた。学校卒業から三十歳くらいまで。結婚しても脱けなかつた。入会は若いしょ頭の家でやつた。夜行などは若いしょ頭が沙汰をした。ドンドン焼きは若いしょが中心になつてやつた。(一月一日には若いしょ頭の家で若いしょケイヤクをした。トリムスピの時は若いしょがめんどうをみてくれた。(役原)

若い衆 四十二歳までの人をいう。(新田)

夜遊び 夕飯を食べると夜遊びに出かける。五一六人の仲間が集まつて、道祖神の石仏をかついで力くらべをした。(判形) 百番供養塔

は二十三貫あつたが、これを乗々かつづける者は、幾人もいなかつた。石かつぎのほかに棒押しなどもやつた。覗きこみといふのをよくやつた。年頃の娘のいる家へ出かけて行つて、障子に穴を開けて、中を覗きこんだ。ご祝儀のある家などは、障子を閉めておくと、すたすたに破かれてしまう。覗きこみをして娘の寝ている位置をたしかめておいて、夜道(夜道)に入ることもある。そつと戸を開けて、娘の寝床に入りこむわけだが、時には親に気づかれて、とつかまつてしまい、あやまり証文を書かせられる者もある。そうすると、仲間でその親に仕返しをする。夜その家の墓石をかついで行つて、庭の真中に何個も置いてくる。これには、たいがいのインゴおやじもまいるようだ。夜遊びをして腹をすかして帰つてくる。仲間をつれて来て、トウナスを煮て食う。仲間の者が、近所の畠からカッパラつて来たと言つたが、翌朝見ると、それは自分の家の畠のものであつた。(判形)

母親が早く死んだんで学校へ四年でると十一の時から人足に出て働いた。女子なんなか口へらしに学校へも出ないで子守りに出される子もいた。だんだん夜遊びを覚えたが始めはタナ(店)へ行って菓子でも食うぐらいだ。そのうち名久田の方へも歩いて行くようになつた。昼間仕事をして夕飯を食べてから行く。長着を着てひっばしりして行く。わしが二十四、五の時好きな娘ができるて夫婦約束もした。相手の娘ははたちだつた。そうなると早く遠いたくつて気がどうかしてからとぶように早く歩ける。その娘とは三年ぐらいつづいた。或る晩、或る人に呼び出された。

娘に懇談話があるがお前が好きだら連れてつちやどうだつて言われた。だがわしの家の方に事情があつて縁をとる状態じやなかつた。そ

うこつするうち娘は嫁に行つちつた。カリブンで連れてくるやり方もある。夜遊びするのは観音開きをさせるのが目的だ。(火の口)

名久田、中山の方へ夜遊びに行つた。

夜遊びして帰つたら明けがた近くなり、寝ないで草刈りに行つた話がある。

娘が入り口近くに坐つて、帯をたらしておく。それを引つぱつて合図にするなど工夫した。(北之谷)

ヨバイ 不意に女の許に行くこともあつた。戸を少しあけておくのは来てもよい印である。普通鍵はかかっていないから入れる。特別に騒がれることもなかつた。その男と結ばれることを期待する場合、親が目認しているものもあつた。利根郡品川越本で聞いたのでは「東入りよい」と女によい、男後生樂ねてまちろ」といつたが、「原よいとこ……」「判形よいとこ……」とお互いに云つてもいた。(判形)お互いに知り合つているので娘は戸を少しあけておいてやる。(戸

力じまん 昔は若い衆がよつて相撲をとつたり、重い石をかついで

力じまんをした。三十二貫のノボウトウをよくかつた。(戸室)

四、結婚

(一) 結婚の条件

結婚 話を仲人が持つてきて、親が決めた。見合いはない。(本宿)

いとこ合せ いとこ合せは、親類がふえなくていい。(本宿)

縁組の条件 嫁は家柄など見合って親同志で決めるのが多かった。

中位以上上層の家では、家族、財産、血統(先祖からの流れ、系団、肺病、難病、精神病、キツネソキなど)、つきあいを考えて選んだ。(判形)

よい嫁とはよく働く娘。馬を引いて田畠の仕事だけでなく山仕事のできる女。女もアサクサカリに行き、一駄は刈つてくる。(判形)

ヨメはダイドコロからもらえという。(役原) 一つ上の姉さん女房が一番よい。金のワラジをはいてもみつけるものだ。(役原・五領)

方がわるい場合には、一旦親戚の家にもられた形をとつてから、嫁入りさせるようにした。(中山市原)

結婚年令 昔は二十歳前、十六、七歳が多かった。二十歳になると、エビス講になつたといわれた。エビス講が二十日だつたからである。

(判形)
恋愛 いつもいきあつたりしているうちに愛し合う。然し恋愛結婚は認められず、逃げ出すこともあった。許されるのを持つ。北海道の親戚まで逃げた人もいる。普通は親戚の者が迎えに行き、最後は認めようである。(判形)

恋愛は親が認めないのが普通であった。そうした場合、夜逃げをする。どれだけでも逃げればよいとされた。(本宿)
二人がよくなつてしまい一緒になることをクツツキといった。ヨメ

の家でくれない時などはクツツキになつた。(役原)

婚姻 地主は村中が多く六〇・七〇パーセントを占めていた。今は利根・吾妻もある。一般には吾妻とは大塚より向うの中之条方面をい

う。高山村は北群馬郡中山村であつた。遠方では吾妻より利根郡からが多かつた。結婚はマネゴトといわれ、一人新治村から来ると、その

人の世話を続いてその村から来る傾向があるものという。(判形)
沼田・月夜野・新治・小野上・子持などである。中之条からも嫁にきているが、利根郡の方が多い。(本宿)

(二) 婚約

仲人 仲人は良いことばかりいうので「仲人の七うそ」などといわれる。(役原)

仲人 七嘘という。「一定法ともいいう。堅いような人は、仲人が上手ではない。仲人は腹切り道具といって、うまくいかないと、「スリコギで腹を切れ」という。(本宿)

仲人礼 兩方の男が話し合いで決めるが、貰い方で多くだす。仲人には、両方から同時に、金と酒とオコワを一ホケイ持つていく。仲人礼をする日は、里帰りの時に決める。

仲人は、仲人親というので、三、四年始にいく場合もあるが、仲人としてもあまり堅くされると困る時もある。昔より今の方が堅くなつた。(本宿)

貰つた方が余計に出す。四分六もあるし、話合いで決める。おこわを一ほけえ(三升ぐらい)持つて行く。仲人は、「どんびのはね貰つたから、ちつとんべえ」といつて、近所に配る。足りなければ、仲人が足して配る。仲人親には、二三年ぐらゐ御年始に行く。今の方があるから固くなつた。(本宿)
トンビのハネ 仲人は、仲人礼としてもらつた赤飯を、近所の人々に少しづつ配る。仲人がそれに足して配つてもよい。

なんでも、物が少ない時には、トンビのハネのようだという。(本宿)

サトガエリをする日の午前中、仲人の家の赤飯をオハチに入れ、酒は二升、お札の金銭はもろい方の方が多くなるよう與れ方と話合って持っていく。仲人は近所の人二、三人を呼んでこれを披露し、祝酒を飲む。(判形)

仲人礼のことは、トンビノハネという。仲人礼をもらった仲人は、近所の人を呼んで、仲人礼の披露をして、「ちそく」をした。(中山字梅沢)

樽入れ この辺では酒を買うともいう。仲人は当日、まず貰い方にいき、「酒を買つてきますから」と挨拶して、仲人は自分の懐で一升を貰い、與れ方にいく。一升は一生に通するからである。與れ方に近所の親戚が集まっている。酒を出してかためてから、仲人は近所回りをする。その際手拭を一本だして挨拶する。その後、仲人は與れ方で酒をよばれて帰る。貰い方では仲人の煙りを待っている。仲人は、貰い方で、一部始終を報告する。

酒の好きな人には、貰い方でもまた酒をだす。樽立ての日に、式の日取りや結納について決める場合がある。しかし、樽立ての前に、日取りや結納について決めてもよい。(本宿)

婚約することをサケカイともいう。仲人がオントル一荷(祝樽一升)買い、嫁方に行つて結婚式の日取りを決める。そして嫁方の父親は仲人を連れて隣組を廻る。クミマワリといいこのとき仲人は手拭をもち、「A家の娘B子をC村のD家に世話をするからよろしく」と挨拶する。家に帰ると隣組代表、イツケ、親戚を呼び出したことを見知らせ酒を飲む。(判形)

縁談が決まるとき、仲人が娘を連れて手ぶらでその組うちを挨拶して回る。娘を貰った時には父親(男)が連れて回る。(火の口)

結納 式の前日にする人やそれよりも前にする人とか色々である。結納の返しをするか、しないかなど仲人が決める。

結納目録には、スルメ、コンブ、トモ白髪、末広は、必ず入っています。(本宿)

式の前日、二、三日前より一ヶ月位前にする。金でするのが多く、大人の日当八十百円位)五千円位が相場であった。(判形)

トマリソメ 結納をしてから結婚式をあげるまでの間にヨメがムコの家に来て一晩泊まっていくのをトマリソメといった。トマリソメをしてそのまますと住んでしまうこともあった。六、七十年前までは

やっていた。(役原)

年内多忙で、式が著しく先にいつたときなどは、一晩だけの泊り初めをする。(五領)

仲人が嫁を連れてきて、嫁は泊って、仲人は帰る。翌日は貰い方の父親が送つていく。トマリソメで、あと式をしない人もあつたし、それがだけでためになつた話もある。トマリソメはカリブンともいって、主に経済的理由によつた。(本宿)

トマリソメはサケカイの日にすることもあり、そのあとのこともある。婚約して式までの間に日が近い場合はトマリソメはやらないし、その間半年以上あるときにする。するかしないかは両家同志で話合いをする。(判形)

酒買いがすむと、仲人が嫁になる者を、その晩のうちに、もろい方へつれて行った。このとき一晩か二晩、嫁を先方に泊めて来る。それほど長くは泊らなかつた。あまり長くいると、「ご祝儀」になつてしまふ。

このとき、立合人は、親、近親者、隣組の人など。これをトマリソメという。

戦前の場合、この形は三人に一人ぐらいの割合であった。

トマリゾメをするのは、酒買いから式までのあいだが長い（半年も先になるようなとき）場合にトマリゾメをした。（中山字原）

トマリゾメはそんなに例はなかつた。最近のほうが例が多い。タルイレの日に、嫁をつれて来る場合もあるし、べつの日につれて来る場合もある。

これは、いろいろの理由による。まず、年まわりによる事もあつた。遅くなると、としまわりが悪くなるからというので、早く嫁をつれて来ることもあつた。

身上の都合による事もあつた。費用の調達がなかなか出来ないのを待つていられないで、嫁を早く連れて来ておくという場合もあつた。

働き手（人手）がすくないので、嫁を早く連れて来ることもあつた。この場合は嫁を借りて行くといった。式をあげないで、そのままになつた例もあつた。子どもができるまゝになつたという話もある。

手がたりないときには、式の前に嫁をかりて行き、あとで式をあげる場合もあつた。これは、カリブンといつた。トマリゾメ（あるいはタルイレ）をして、式をあげるまで、五、六カ月ぐらい間をおくのがふつうであった。（中山字原）カリブン 農繁期にあたるようなときには、カリブンの形をとつた人手をかりるということであった。戦前の場合、軍隊に入る前に嫁をつれて来ることがあつた。経済的な理由はとくになかった。戦前の縁組は無理をせず、身分相応な間柄で縁組みをしたので、財産上の理由でカリブンの形をとつたということはなかつた。年まわりが悪いというので、厄年の前などに嫁になる人をつれて来ることもあつた。式をあげる前三カ月ぐらい前につれて来れる例がふつうであつたが、長いので、六カ月から八カ月間の場合もあつた。

カリブンの形をとるのは、ごく稀であった。（中山字原）アシイレ もらい方へあさげに行つて、酒買いに行くと承知させてから、くれ方へ酒一升を持って行つて、近親と隣保の人へ寄つて、話をきめた。嫁（婿養子の場合は婿）に先に飲ませてから、立会い人に飲んでもらつた。これを、むかしは酒買いといったが、最近は、タルイレとよんでいる。（中山字原）

〔三〕 嫁入り

入　り

朝一見 式の当日、仲人は婿と伯叔父などを連れて奥の方にいく。

伯叔母がいく例もある。奥の方に着くと、仲人は客目録をだす。客目録は、ニシノウチという半紙の上質紙に書いてある。仲人が金員を紹介する。

お相伴が、仲人にかわつてするところもある。一同座に着くと、お茶、お茶葉子、座づけ（寿司がこの辺では普通）、冷酒、燭酒の順である。酒がまわつてくると、酔の物がで、このあとは末広になる。

奥の方の主人が挨拶するところと、お相伴が申し上げるところがある。

「ご一統様に申し上げます。この度、〇〇さんの仲人によつて、つたない娘を貰つてもらつことになつて有難い。」というよくなことをい

う。そして、盃で皆が飲んで一見座敷がすむ。仲人は残つて、朝イチゲンは帰る。遠い場合は、帰らずに嫁を待つている場合もある。（本宿）

結婚式当日、オチユウゲンのやりとりをするといい、先ず仲人が婿及び婿方の親戚五、十人連れて嫁方に行く。嫁方は同様に親戚が同席してオシヨウハシ二人がいて御馳走をする。このイチゲンは婿と一緒に登前に帰る。（利形）

結婚式の当日の朝早く、仲人夫婦の案内で、ムコ・両親・オジ・オバの一行が、くれ方を訪問、挨拶する。（五領）

トリムスピの日の朝、ムコ・仲人・ムコのオジさん、兄弟が客目録をもつて朝イチゲンに行く。（役原） 戒前（のち）の婚礼の形では、もらい方から、式の当日、朝イチゲンがくれ

方まで嫁を迎えて行った。このときイチゲンになるのは、父親、ジワケ（もと分家した家。その主人が行く）、おじ、おばが一人ずつぐらい。この人たちが、仲人と一緒に嫁を迎えて行った。

くれ方では、イチゲンザシキで接待した。接待役（近い親類の者）一人おくり一見について来ない人。近所の者（一人）がいて、ご馳走をしてくれた。この席で、もろい方の父親が、「嫁をもらいに来ました」とあいさつをした。

朝イチゲンは、仲人をおいて、先に帰って来た。

なお、もろい方のイチゲンは、先方に行つて、親類の名簿（客目録）という）を提出する。この中には、ムラ内の親類、おじ、おば、婿のきょうだいの名前を書いておく。（中山字原）

くれ方のイチゲン式の当日、朝イチゲンの人たちが帰ったあと（午後になつてから）、嫁を送つて、嫁方のイチゲンが、仲人と一緒にもらひに来る。くれ方のイチゲンの人員は嫁の父親、ジワケのうち一人、おじ、おばなど。

もろい方の家の隣近所に、中宿がたのんであって、そこへイチゲンと嫁が休憩している。もろい方の準備ができると、使いの者が、嫁をむかえに来れる。（中山字原）

デハノメシ 嫁方のイチゲンは婿方に手行つてまごつかないよう、出掛ける前に予め席順を決めておく。これをザツクリ、ザガタメといふ。客目録の順に並ぶのである。（筆頭—嫁の父—は床柱を背にする）朝イチゲンが帰ると酒を一杯のみ、一口たべて出発する。これをデハノメシといふ。出発はくらくなつてからで、仲人は嫁、嫁の父親、おじ、兄弟などと共に婿方に向う。人数は五人—十人あるいは十三、十五、十七人とゴロの悪いのは避ける。（判形）

風呂敷よめこ 嫁に来るときには、たんすを一さお持つて来るのがふつうであるが、たんすなど大きなものは持つて来ないで、ふだんぎなど着類をすこししか持つて来ない嫁のことを、風呂敷よめこといつ

た。（中山字原）

嫁の行列 嫁と嫁とがぶつつくのをさける。嫁に勝ち負けができる

という。

昔の嫁は馬に乗つていった。荷輪馬に乗せたが、特別に荷輪がある。飾りのついた定紋入りのものがあった。（本宿）

嫁入りに役原から歩いてきた。タンスは馬につけてきた。鏡台を見た。馬に乗つてきて貰つたが、坂道でころんで鏡をうつかけた。遠い人は馬に乗つてきたり、人力車できた人もいる。（火の口）

嫁入り道具を運ぶものを中間という。少量ならば、イチゲンが運ぶ。（五領）

たんす 嫁に来るとき、たんすを一さお持つて来た。ふつうは、嫁の方で用意した。代金は、結納金でまかなつた。中には、むこう（もろい方）まかせて、もろい方に金をやつて用意してもらう場合もあった。（中山字原）

長持 長さは五尺五寸以上、巾は三尺、高さは三尺ほど、長持を嫁が持つて来たのは、明治時代のこと。大正になつてから、たんすだけをもつてくるようになつたようだ。（中山字原）

長持は夜具入れ。明治時代までのものが、嫁入りの時に持つて来た。

このときたんすと長持を持つて来たのが大尽の嫁さん。（中山字梅沢）

桐の木 むかしは、女の子が生まれると桐の木を植えておけといつた。屋敷のすみに一、二本植えておいた。これでたんすをつくつて娘に持たせて嫁がせたのである。（中山字原）

入家式 嫁一行は婿の家の手前の親類の家を中宿として休む。婿方の準備ができるといふ知らせでイチゲンが入る。このとき婿とオショウバン二人の計三人は、高張提灯をつけてカドに迎えに出る。これが

先頭に立つて入る。茶の間から家に上るのだが、このとき婿の父母が迎えて、嫁方のイチゲンに挨拶する。（判形）

共和会の役員がとりしきる。ヨメは、庭から座敷へ直接入るが、そ

の際、麻の芽穂でつくった鳥居をくぐる。(五頭)

ヨメは中宿で一時休み、嫁家に入る時は鳥居状にオガラでつくり、

これをヨメがくぐる。(役原)

嫁に出る時は茶の間から出てオガラの鳥居をくぐる。ジャンボンの

時もくぐる。(新田)

中宿 嫁ぎ先の手前の家になつてもらう。お茶がて、嫁はお化粧

をなおす。(本宿)

もらいの方の準備が出来ると、もらいの方から、中宿まで連絡を行つて、

嫁方の一行をよんで来る。

嫁は縁側からおくりのでえ(一番いい座敷)へむかいいれる。この

とき、女仲人が嫁を庭から縁側へ抱きあげる。仲人は、嫁を、トリム

スピが終つたあとにひきわたす。(中山字原)

トリムスピ オクノデエ(上段の間)で行われる。床の間に天照皇

大神の掛軸を掛け、その前に、伊勢で売つてある嫁礼専用の三重の卓

をしつらえる。島台には白い豆と黒い豆を敷く。掛軸に向かつて、右

側に嫁、左側に婿が、相対して坐り、仲夫婦はそれぞれ、嫁婚の脇

(下座)に坐る。雄蝶・雌蝶の男女の子は、仲人のななめ前に坐る。

トリムスピをするのは、若い衆頭である。座敷の入り口に坐つて、

「これからヨシノの間にります。」と無調法の私がとりむすびさせて頂

きます。よろしくお願ひします。」と挨拶をし、掛軸に二押一手一押

をし、イサナギ、イサナミの命と唱えて、銚合せを行なう。これが非

常にやこないので、間違つたといつて問題になつたこともある。御

神酒(オニキスズ)の方の蓋を背中から取れとか、酒をまたた銚子の蓋

を先にするとか、さらに盃を背中の方にもつていて回すなど、非常

に難かしい。やがて三三九度の盃になる。酒を二回頂いたら、肴をは

さんでやり、肴は膳のふちにおかせる。手拭でふかせて、もう一献さ

しあげておわる。若い衆頭は権限も強かつたが、責任が重かった。(本

宿)

以前、青年たちがオーフード(マルデ)で男根を作り、祝儀の取り結びの部屋に投げ込んだ。男根はお膳の上にのせて床間にかざり、青年たちには酒一升をお祝としてやつた。昭和二十年一月の結婚式の時には、まだこれをやっていた。(戸室)

トリムスピの式はオクリノデエ(一番いい座敷)です。この席に立ち会うのは次の者であった。

同盟会の会長一人、青年団の支部長(わかいしゆがしら)一人、仲人夫婦、巫女(男女一人ずつ、近所の男の子と女の子、両親のそろつているもの十才くらいのもの)、差団をする人、一人(近所の人、式の進行係をつとめる)

座敷には、嫁、婿が上座に、相むかいで坐る。そのつぎに、仲人夫婦が相むかいで坐る。同盟会長や青年団の支部長は末座にすわる。

三々九度のさかづきをかわして、トリムスピの式が終る。

トリムスピが終ると、仲人は嫁を、もらいの方(むこ)の両親にわたす。

このあと、イチゲン座敷になる。(中山字原)

結婚式と若い衆頭式での若い衆頭の権限は大きかった。立会人と

もいつて、仲人と若い衆頭が、トリムスピをやる。三々九度の盃は、

若い衆頭がとり行つた。呉れ御祝儀の方が責任が大きかった。どんな

結婚式でも、手拭一本持つて呼ばれていた。別待遇であった。呼ばれる時は、弓張り提灯を持つていく。一見衆の脇で、若い衆頭は御馳走になる。式が済むと、若い衆頭には、お相伴がついた。昭和三十七年頃から、公民館ができる、式はそこで行われるようになったが、今まで若い衆頭を呼ぶ家がある。(本宿)

若い衆頭届 これには年寄りが折れた。(本宿)

結婚式の料理 お吸物とトリザカナを順にだす。お吸物が四にトリ

ザカナ三ぐらいいである。貴い方の料理が一品ぐらい多いのが普通、お

吸物の一例をあげると、①キジ・青物(菜)・豆腐、②卵・人参・七

リ、③カマボコ・青菜、④ナルト・白タキなどである。トリザカナは、カズノコ、キンピラが一般的で、スタコもある。また、イカをまるめて亀の恰好にするマキズルメがある。

（サシミは最近である。料理の終りは、ネギヌタに決まっている。（本宿）

トリムスピの料理は、お吸物（貝、卵、椎、青菜、豆腐）酒の肴（卵、人参、芹、蒲鉾、青菜、鳴門、白滝、葱ねた）など、海のものと里のもの、畠のものと川のものと、取合せて出す。貴い方が、一品ぐらいい多い。その他、刺身、酢だこ、数の子、金平を、鶏の恰好に並べたもの、イカをあぶつて、亀の恰好にしたまきするめを出す。（本宿）

ご祝儀の料理番 ご祝儀のときには、料理人と、中番といわれる役の人がいた。料理番は近所の人（本職の料理人をたのむ）ともある）、中番は近所の人一人。この人は料理にくわしい人をたのんだ。

中番は、一見座敷の様子を見ながら、料理番（お勝手にいる）へ連絡し、また、料理番の様子を見て、一見座敷へも連絡した。料理を一見座敷の入口まではこぶのはだれでもよいが、一見座敷でそれを受取つて、客のところへはこぶのは近所の娘一人。上座から順に料理をすえた。（中山字原）

一見座敷 オクノデエヒトマノデエをとっぱらつてやる。料理は吳れ方で五通りだと、貴い方では七通りだした。盛りつける品物は歓立表に書き、貼つておく。お相伴が組から一人である。お相伴と料理番の取つぎに中番がいた。それでも連絡が密でなく、料理が足らなくて、お相伴のを抜いたり、また膳を左膳にして失敗した例などある。

一見座敷では、父親が床柱を背負う。若い衆頭は、座敷にてたり、お勝手に入つたりしてにぎやかす。峠越しにきた人は泊つていく場合もある。

一見座敷が始まると、近所の人は「邪魔者はひつこんでべえや」などといつて、遠慮する。（本宿）嫁が来て、一見が奥座敷に着座して、すぐ出すのがザヅケ。これは、

各自にすしを二つぐらいすつ。

そのあと、もらしい方とくくれ方で、冷酒で親族のかための式となる。そのあと仲人が、嫁のおじ、おばをもらい方に紹介する（親族の紹介）。ここまでは羽織はかまを着ている。

紹介が終ると宴会になつた。これはおしようばんが進行する。このときは、客は羽織をとる。

お膳はむかしは、猫足の膳であったが、終戦後からは、会席膳を使うようになった。

一見ざしきには、うどんかそばを出した。

おいしいもん一つにつき、とりぎかなは二つずついた。むかしは、さかなを一つずつ出したが、今は、会席膳に一度に全部のせて出し、おいものだけをとりかえるようしている。

おつもりのときには、料理番が大皿にさかなをこしらえて座敷に持つて行つて、その席であいさつをする。

「料理番の責任を果させていただきました」という。

一見のほうからは、「どうも、えらい」ちそうをありがとうございました」とお礼のあいさつをする。

そのあと、おいしいもんの実のほうで、嫁の父親（一見の床柱）に料理番が酒をさす。床柱が料理番に返盃する。そのあと、一見客に次々に酒をさして、それで一見座敷はおしまいになる。（中山字原）

トリムスピのあと、イチゲンザシキになる。その前に、仲人をとおして、くれ方の客目録がもらひ方の施主にわたされる。これはその席で仲人が新客の紹介する。

イチゲンザシキには、施主が本家なら分家の主人、おじ、おば、嫁のきょうだいなどが出席する。

イチゲンザシキのお相伴役は二人出る。一人は親類の者、もう一人は近所の人。

イチゲンザシキでは、飲んだり、食つたりで、夜中まですごす。（中山字原）

山字原)

披露 式が終ると披露となるが、概ね二~三時間位で、この間オッ

カドの木で男の物を作つて部屋に放り込むと婿の父は「有難うござい

ました」といただく。一時頃までやる。終る頃婿は酒を注ぎに座敷

に出る。酒は最後に大きい瓶くい瓶くい瓶くい瓶くい瓶くい瓶くい

スエヒロという。そばをたてて婿方の親が挨拶する。(判形)

女衆の仕事 結婚式の時には、近所の女衆は背の口から手伝う。親

方の指示で、倉から膳碗を出したり、料理をしたりする。(本宿)

嫁のお茶 披露がすみ一見が帰ると嫁は仕度を取りかえて(持つて

きた着物のなかで一番よい着物、訪問着にかかる)嫁のお茶となる。

茶の間、お勝手などで働いていた人全部に、嫁方から持つてきたお茶

菓子を出し、お茶を注ぐ。嫁のお茶が終ると帰る。(判形)

一見座敷などが済み、解散前に、嫁が近所の人にお茶をいれる。近

所の女衆も嫁に手伝う。茶菓子は、嫁が家から持つてくる。(本宿)

イチゲンザシキがすむと、よめこのお茶といつて、嫁の持つて来た

お茶菓子をつけて、手伝いに来た人にお茶を出した。このときは、嫁

の仕度をかえて出る。もらしい方の母親が一緒に出て、皆さんに嫁を紹

介した。(中山字原)

村回り 婚に来た翌日、姑が連れて村中を一軒一軒回つてあいつ

をした。又、親しいおじ、おばのところや世話になる人のところへも

回った。(五領)

カネツケ祝い 式の翌日、嫁はカネツケ祝いといつて、神社、寺、

組内をまわる。このあと、アトタズネの女一見がくる。(本宿)

赤飯をふかして、親類、近しい人が集まる。呼ばれた人は金銭少々、

前掛け、襦袢のえりなど持つていく。そのあと前日の披露宴の始末を

する。(判形)

カネツケ祝は女一見と同じ日に神社お寺組内を廻る。四日目は、昼

はカネツケブルマイ、夜はゴテエギ(御大儀)ブルマイといって、近

所の人板前さんに、家の人があつた。(本宿)

カネツケの祝いは式の翌日にした。この日をカネツケといつて、仲

人と世話をなつた人たちをよんで、赤飯をたいて祝つた。

嫁はこの日、ムラまわりをした。ふつうの晴着を着て、おつかさん

(姑)につれられてまわつた。隣保班と、ムラ内の近い親類の家をま

わつた。(中山字原)

式の翌日、カネツケの祝いをする。せきはんをたいて、仲人とお相

伴の人を招待して、酒を沢山飲んでもらつた。(中山字原)

アトタズネ 女一見ともいい、式の翌日呉れた方のきょうだいとお

ばが、円満にいるかどうかを見に来る。そのていが帰ると、翌日嫁を

連れて、貢つた方のきょうだいとおばが里帰りに来る。(見廻りには、

婿がその組を廻る。固くすれば一週間かかる。あまり遠ければ正月に

廻る。道案内に、婿には男親、嫁には女親が付いて廻る。(本宿)

ゴテギブルマイ ゴタイギブルマイともいつて、結婚式の三日目か

四日目に限る。近所の人の労をねぎらつて、施主とその親戚が接待す

る。飲んでもらつてお別れである。(本宿)

里帰り 式の三日目、婿婿と貢つた方の女衆が連れだつて呉れ方にい

く。女の一見は帰るが、嫁は泊つてくる場合もある。

この日の婿は、嫁の父親に連れられて、一見回りをする。隣保班(組

内)と親戚を回る。(本宿)

ヨメの初めての里帰りは、嫁いで三日めに行なわれる。この日は、

ヨメ、ムコの外に、シウトメ、オバなど女衆が同行する。若いものた

ちは、泊つてくる。(五領)

ときすぎて(嫁に来て一週間位たつて落着いてから)サトガエリに、

嫁が嫁を連れていく。このとき赤飯も持つていく。概ね午後出掛け、

泊らないで帰る。遠くの場合は一日泊る。(判形)

里がえりは式の三日目。嫁は婿と一緒に里がえりをした。一晩ぐら

四そ の 他

嫁が実家に帰る日 正月二日または三日、御年始。親の生きている間は膳の餅一枚、水引きを引き、風呂敷包みにしてしょっていく。

正月四日、女の御年始、近所を廻る。

三月三日、膳の餅一枚持っていく。重ね餅でまたもらってくる。「やつたりとつたり節句の餅」という。

五月五日、赤飯を重箱に入れて持っていく。

ギオン、七月二十五日（新田、原、本宿）。八月一日（利形、尻高）九月一日、ハツサク、赤飯と酒一升持っていく。

十一月、アキブルマイ、新米をホケーに三升位持っていく。「オフルマイに行つてこい」といわれた。

暮、お歳暮に鮭をもつていく。（利形）

嫁入り直後の里帰りと、その後の里帰りの機会を示すと次のとおり。古い婚礼の形だと、嫁に来て一週間以内に里帰りをした。おばと姑と一緒に里帰りをした。嫁に来てはじめて実家へ帰る行事で、赤飯を重箱に入れて持つて行った。定期的な里帰りの機会は次のとおりであった。

一月十四、十五日（小正月）には、ゼンノモチとお土産（酒など）を持って里帰りをした。このときは、婿も一緒に行った。婿は一晩泊りぐらいで帰つて来たが、嫁は二、三晩泊つて来た。

次の里帰りは、三月の節句の時、餅を持って行つた。ほかに、里の父親には酒などを、母親には甘いものでも持つて行つた。このときも泊つて來た。

五月の節句には、赤飯を持って行つた。泊つて來た。

八朔（旧八月一日）には、八朔礼として里帰りをした。親に土産を持つて行つた。

暮には、歳暮として、サケを持って行き、里帰りをした。親が丈夫

なうちは何年でも、歳暮は持つて行くものだという。

このほかに、夏振舞として、小麦がとれてから（七月二十日すぎに）、小麦粉（新粉）を持って里へ行つた。泊つて來た。このときよそへ嫁いた娘は皆帰つて來た。

秋振舞は、十一月の末ごろ、米がとれてから、新米を持って（三升ぐらい）里帰りをして、親に新米で振舞つてやつた。鍋釜をかりてごちそうをして、娘子で食べた。

夏振舞も秋振舞も、親が丈夫なうちはするものだといわれている。

これ以外に、春、秋の彼岸や盆にも墓参りに家へ帰つた。

なお、嫁の里帰りについて行く婿について、つきのようにいっている。

「上むこ来ず、中むこ一晩、下むの下郎は三晩も泊る」
婿が嫁の里へ泊つて來ると、つら（顔）が三尺のびると悪口をいわれた。（中山字梅沢）

嫁の生活 嫁にきてから中之条へだつて十年行かなかつた。嫁はいいきもんなど着る時はなかつた。しょい商いがきたし、買物があると男が行つて買つてきた。

ミカン、リンゴなんが買わない。卵を買つたり、かん詰めを買つ事があると、「どうかしたかい」なんて聞かれた。（熊野）

火種 昔は火種を絶やしてはならないとて夜寝る時は大きな木をもやしておいてその上に灰を少しきつておいた。これは嫁の仕事であつた。（役原）

なおる なくなつた兄のあと、求められて、弟になおることがある。

今次の大戦の後には、各地でみられた。（五領）

とりかえっこ とりかえっここの例もある。（五領）

嫁の名替え 他所から嫁に來た時に婿家や近所に同名の人がいるときらわしいというので嫁が名を替えることがあつた。戸室の小渕つ

ねさんはとつぎ先のオバサンと同名だったので「みや」と名を替えた。

(戸室)

破談 タルも入れて、あとは、式だけという段取になつて、縁がこ

わることもある。こんな場合は、仲に立つ仲人の力量が問われる。

たいていは、金銭で解決するようだ。(五領)

離婚 三年たつて子供がなければ、縁切りだといった。(中山字原)

五、葬 制

(一) 死の予兆と死

ウドンゲの花 家の中にウドンゲが咲くと何か不幸がある。(戸室)

カラス鳴き カラス鳴きが悪いと人が死ぬ。死ぬ家では聞こえない。

カラスの止まつた時尾のむいた方で不幸があるといふ。(戸室)

大勢でガアガア賑やかすようになく「さわぎ鳥」声の間隔が長く、

カナオとのろくなく「死に鳥」近しい人には聞こえないといふ。(判刑)

重病で体が弱っている人がいると、鳥啼きが悪いといふ。鳥啼きは、

その家人には聞こえないといふ。(本宿)

二不幸のおこるときは、カラス鳴きが悪い。病人でもあれば、その

名を呼ぶといふ。だが、当該のものは、不囁をきかぬ。(五領)

人が死ぬ時はカラス鳴きが悪い。普段来したことのない人が遊びにく

る。寺には人のきたような音が聞こえるといふ。ウソという鳥が鳴くと不

思議なことがおこるといふ。(戸室)

人が亡くなつた時は寺に知らせがあるといふ。男の人が亡くなつた

場合には本堂から入つて来た音がし、女人が亡くなつた時はナガシ

の方で音がする。(戸室)

人が死ぬときには、坊さんのところへ沙汰(知らせ)があるといふ。

男の人の場合は、本堂に入つて鐘をたたくといい、女人が死ぬと

きには、お寺の勝手から入る(お勝手で音がする)といふ。(中山字原)

千度めいり 潰死の病人や急病人がでたときは、コリトリのほかに、

明神様に千度めいりをする。(五領)

十人で百回、本殿の周間を巡る。先頭の人がポンデンをかついで巡

り、様側で豆粒でポンデンの巡った数を数える。(判刑)

お百度詣り 明神様で一人です。(判刑)

急病人が出た場合には、千度まいりをした。この場合には、その病

人が着ていた着物を水にひたして、それをかついでポンデンをもつた

人が先頭に立つて、神社のまわりを、わっしょ、わっしょで、めぐり

あらいた。左から右へとまわつた。

ポンデンは、半紙を百枚きつてつくつたので、百枚ポンデンといつ

た。長さ六尺くらいの竹につけた。ポンデンは千度まいりのあと神社

へおさめてきた。ポンデンはすぐとんでいった。近所の人がいくらかふれあるい

た。急病人ときけばすぐにとんでいた。近所の人がいくらかふれあるい

た。あるいは、物音を聞いて、ムラの人があつまつて来た。

千度めいりは、字ことにやつた。一軒の家から何人でてもよかつた。

男でも女でも、わかいものでもとしよりでも。時間はいつでも、朝で

も夜でもやつた。へとへとになるまでやつた。

病人は年令には関係なくやつた。病人が危篤の状態になるとやつた

もの。

このことは、今から五十年ほど前までやつたことである。(中山字原)

死人をよびかえす 屋根にのぼって死にそつた人の名をよぶ。(新

田)

人がなくなりそつた場合には、近親者が屋根の棟へあがつて、その

人の名を呼ぶ。死んではならない人がなくなりそつたときには、近親者が

がよびかえした。

また、その場合には、近所の人をたのんで、神社で千度まいりをし

たこともあつた。(中山字原)

塙離とり 以前は、重病人がでると、塙離とりをした。重病人の着物に川で水をかけ、さらに中山神社（明神様といついた）に持つていき、広げて掛けおき、千度めぐりをした。数どり（回数を数える役）が一人いて、それ以外の人は、ポンデンを持つ人（足の速い人がなる）を先頭にして、本殿のめぐりを回った。走りくらになつた。ポンデンは、お祭りの時、神主が作つておいたものを使用した。参加者は誰でもよく、塙離をとるといって近隣の皆が参加した。百人で回れば一人が十回まわればよい計算になる。

屋根に登つてその人の名を呼んでから、神社にいったのも記憶している。

昭和になってから、行なわれた例はない。（本宿）

病人の着物を川に持つて行って水をかけた。そのあと神社に持つて

来て、着物を持って社殿の回りを千度参りした。

又、その家の屋根に登つて、病人の名前を呼んだこともあつた。今から五〇年前の七月二十四日。山口さんの病気のときに行なつた。な

お、子供のひきつけのときも屋根で名前を呼んだ。（五領）

瀕死の病人や急病人がでたときは、病人の着物を川へ持つて、

村中のひとびとがでて水をかけた。このお願しよかけを、こりとりと

いう。

また、井戸の中に病人の名前を呼ばつたり、屋根のグシに上つて、

同様のことをするのも、こりをとる、こりをとつたという。（五領）

病人が出るとその人の着物をぬらし、中山神社のまわりを回つて、

しばつて病人に水を飲ませる。これを水ごり（さんげ）といつていた。

（新田） ゴセイ人 男の人が死ぬと本堂に姿をみせ、女人だとの寺の流しに

あらわれるという。そうすると、あの人ゴセイ人（悪氣のない人、苦勞しないで死んだ人）だから、姿をみせたのだという。あの人ゴ

セイがよいなどともいうが、後生業（氣楽な人、骨を折らない人）と

は意味が違う。（本宿）

ヒカリダマ 人がなくなるとヒカリダマがとぶ。（戸室）

人魂はぶらりぶらり、火の玉はまっすぐにとぶという。（本宿）

人玉 人玉を見たことがある。上の寺へ大般若に行つたかえりである。三〇センチぐらいの青い玉（下はあかかった）が、ふわふわとん

できた。それをみた人が、人玉だといった。

人玉は、人が死んだときとか、死ぬ前に出るという。一日二日のち

に死ぬという魂がぬけ出るのが人玉という。

二十歳前に入玉を見なければ、その人は一生入玉をみないですむといわれている。（中山原）

葬式と馬 葬列が出る時に馬が鳴くとよくないというので馬にはた

くさんエサをくれておき鳴かせぬようにした。（戸室）

判形の五島馬ケのある家の死者の顔を坊さんが拌む前に刺ろうとし

たら死人が手を出して刺せない。坊さんが困っているところに泉龍寺の坊さんがやつて来て拌みながら刺つてやつた。泉龍寺の坊さんは

えらい僧だったのでできたとて以来五島馬ケは泉龍寺の檀家になった

という。（戸室）

死に水 病人のときは死んだらサラシに水を含ませて口をふいてや

る。（戸室）

魔よけ 死者を北枕にし、布団の上に刀を置く。これは魔除けだと

する。あるとき夕立が降つたら棺が急に軽くなつたことがある。これ

はカシヤ（魔物）がさらつて行ったのだという。カシヤとはネコの化けたもの、ネコマタともいう。（判形）

死んだ人の上にナタなどの刃物をのせる。猫がばけて火車になつて

死んだ人の上にナタなどの刃物をのせる。猫がばけて火車になつて

死人は北枕に寝かせ、魔よけにナタをのせる。猫は死者の安置して

ある部屋にはいれない。（戸室）

人が死ぬと北枕にし、布団の上に、魔物除けの切れ物を置く。これ

は今でもやっている。(本宿)

戸の部落がさびれた。或時葬式があり、昔は頭を剃って湯灌したが、かみそりをあてると死人がもつたないと手を頭にもつていつて邪魔をし、それなかつた。そこに尻高の僧が通りがかりそつてもらつたらそれたという。僧はネコマタが出たのを知つて、屋根にネコマタが居たが、それに向つて僧が刀を投げつけ傷をつけ、葬式ができるといふ。(前原)

神かくし 身内でない隣組の人が筆の葉で家の神様の前に立ててふさぐ。(判形) 死者がいると、神棚にすぐ筆をあげるが、それを筆を引くといつている。(本宿)

人がなくなるとすぐ親族だけがれていない人が神棚を筆でかくす。

筆をひくという。ときは同じ人がとつてくれる。(役原)

不幸の主導者 ご不幸の際の一切は、近所のものでとりしきる。共

和会は、直接関係しない。(五領)

ホウバイ衆 葬式組の人をホウバイ衆という。午前に葬式をするとき、午後に「お通夜」をすませる。これは略式で、以前は葬式のあくる日に一

七日をした。ホウバイ衆を呼んで膳を出してふるまつた。昔は葬式組は二十一三十軒の大組だから隣保班二組もいた。今は隣保班で間

に合わせるようになつた。(熊野)

葬礼組が火の口は三班あって、葬礼組をホウベエといい、上・中・下の三組あって協力し合う。祝儀は一組だけです。昔は火の口が一組で葬礼をした。(火の口)

引き物 葯式の役割は帳場の人(隣組長の場合が多い)が主体となつて施主と相談して決める。香焚返しの引物は焼き餃頭で、以前は中之中からお茶箱位の大きさの漫頭箱を、少なくとも馬三頭につけてもつてきた。一頭に二箱をつける。餃頭は一コ二錢、洋十七仙位の大きさである。(判形)

告げ かならず二人でいく。事故がおきると困るので、一人でいいではないという。夕方でかけて、朝帰ってきたこともある。一軒起こしていくのは大変であった。

告げの人にはかならず食事を出すものだといい、まだされたら、かならず頂くものだとされた。酒も出した。(本宿) 必ず二人でいく。普段他人の家に一人で行くとツゲのようだといつた。寺には別のツゲが行く。(戸室)

告げはてぶらで二人で行く。受けた家では時間であれば昼食を出す。堅い人は時間でなくとも出しが、廻る家があるからといって遠慮して会議をする。かつては告げをきめるのが大変であった。(本宿) 知つているから。昔はどこでもいつツゲが来てもよいよう用意していた。(判形)

お通夜 最近いうようになつた。組の手が葬式の段取りなどについて会議をする。かつては告げをきめるのが大変であった。(本宿)

枕團子 デエドコに繩を下げる、繩をつるして、枕團子をうでた。

團子の粉は、玄米を使用して、臼を左回りに三回はひく。反対にひくのは大変である。枕團子は六個ときまつていて。

団子など、墓に持つていったものは、持ち帰つてはいけない。長生

きの人の團子を食べるが丈夫になるといふ。(本宿)

玄米を茶碗に一杯分ひいて粉にする。團子が黒いと、黒い飯ばかりたべていたのだろう。苦労人だったといい、團子が白いと楽しむだつたという。(判形)

枕團子をうでた汁で、枕飯をにた。枕飯は、大高盛にして、

枕飯 枕團子をうでた汁で、枕飯をにた。枕飯は、大高盛にして、

箸を真中に立てる。茶碗の外の方が多いくらいに盛る。(本宿)

枕团子を煮た湯で、とがない米を台所に繩をさげこれにナベをつるして煮て、それを茶碗に山に盛って箸一本を立てる。この飯や枕团子はイロリでは煮ない。(判刑)

別火 枕团子をつくたりする時は普段使用しているカマドは使わず、ダイドコに梁からひもをさげて釜をかけ、それで煮たきした。カマド、イロリ、風呂など火をつかったところはすべて灰をあつめた。(役原)

(二) 葬 送

湯灌 湯は台所に繩をつるしてカギを作り、これになべをさげて沸かした。そして近しい身内の子供、兄弟が裸一つあるいは腰巻に繩帯をしめて湯灌する。湯は陽の当らぬ所あるいは穴を掘って捨てたり、庭の馬糞を積んだコエニワにかけた。(判刑)

六尺桿一つの裸になり、腰に繩の帯をしてやった。歌舞伎にでる勘当される時の姿に似ている。繩帯を普段しめると叱られた。湯灌道具は、布団も含めて焼いてしまう。焼く所は決まっていない。自分の地所で焼く。(本宿)

血の濃い男女が湯かんをした。(戸室)

棺に入れるもの 棺は以前は立棺であったが終戦後は横棺が多くなった。三角形の紙を死者の頭にのせ、ズダ袋、カクシ布を麻で四角に縫い、これに五穀(米、麦、豆、そば、粟)を炒ったもの、および一文銭を六枚(三途の川の渡し貨)入れ、首にかけてやる。枝はオガラ製で長さは二尺位のものである。(判刑)

昔はたて棺であったが現在は横棺になつた。(戸室)

五穀(アワ・ヒエ・イグサ・ソバ・キミ)を入れてやる。芽がでないように炒って入れた。イグサは、ゴマのかわりに油をとるためのもので、畑に植える。

沼田の下川田町では、七色入れろといって七種類の穀物を入れてやる。(本宿)

頭陀袋 サラしで四角に縫つた袋。近所の女人が縫つた。この中には、故人の好きだつたものを入れてやつた。

また、五穀(米、麦、アワ・ヒエ・大豆)を袋に入れてやつた。芽が出ないようにと、五穀は炒つてから入れてやつた。分量はごく少量(全部あわせて、手のひらにのる程度)。(中山字原)

死装束 白のキヨウカタビラに手甲。棺には紙の鼻緒のワラジと六文銭を入れた。棺は近所の人が石で釘を打つてくれた。(戸室)

経稚子は晒布一反で間に合う。これを縫つのに手指は使用せず、戻針をしない。また、糸の結びめもしない。他人が縫うものであるといふ。(本宿)

死者には一番下に襟を帶にして着物を着せる。夏は浴衣、冬はあわせ、足袋半分底を外して甲がけのようにはかせ、ワラジをはかせるなど。着物の上には袖のない麻製のカタビラ(縫い放しで止めないでおいたもの)を着せる。これを縫つた針を使うとオハリが上手になるという。(判刑)

番號 ミマイウケといって帳場ができる。位牌をもらう人全部が別々に帳面をつくる。位牌は嫁に行つた者、分家した者は後見人(近しい親類や昔の本家)がついて行つてもらつた。帳場はA(施主)B、C(とく)、AがBと関係が深いと施主(A)とBの両方の帳場に番典を出し、イがCと関係があると施主(A)とCの両帳場に出す。B、Cは番典を一応受取り、帳場をとりしきる人が施主に会計報告をする。

収入と支出を計算して赤字が出来ると、施主は自分で受持つといい、そういうわけにはいかないと、B、Cは額に応じて位牌わたしのとき包んで出す。これを遺物としてB、Cに返すこともある。また例えれば五万円の赤字が出来ると、施主が三万円、BとCがそれぞれ一万円ずつ出す。このとき後見人が、Cは一番苦しい時だからBより少なくてく

れといふ五千元にするということもあり、場合によつては後見人が出ることもある。あるいは施主が口出しせず、後見人が帳場で話合つこともある。このように複雑なので位牌を渡すと帳場ではやれやれとなる。(判形)

葬式の時には、利根郡と同じで、外に出た兄弟姉妹の人数だけ帳場ができる。後見人が帳場をあずかる。何人も人数がいる場合、知人は各帳場に香典を張り歩くということもあります。大変であった。後見人は集まつた香典を施主にぶつこんできた。施主はユズリで、兄弟達に返すのが普通。(本宿)

兄弟が何人かいると、その数だけ帳場ができる。帳場の長は、香典の金勘定があるので大変だった。また、位牌を渡す時にはお説教をする。「お父さんが亡くなつて大変だらうが、これから兄弟仲良くやつていてほしい。位牌を渡して、持つていてもらはうが、そして位牌にかけて何もやれないけれど、どうか十分に供養してほしい。あなたかいご飯をあげてくれと施主からいわれましたからよろしく」などといふ。(本宿)

オンシン米 葬式のとき、近しい人は、帳場とは別に、オンシン米三升を持つていった。(本宿)

ヒノウエノカカリ 葬式のかかり(費用)のこと。(北之谷)

ヒノカカリとは、親がなくなつた場合に、その子供達が、葬式の費用を分担することをいつたもの。

長男から順に金額をきめて、費用の分担をした。これは、帳場の人

アナホリ 死者の隣組のなかで身内でない人三人。足りないと隣の隣組の人に頼む。この人はほかの仕事は何もしないでよい。年一回のみで二度と割当てるとはしない。墓地のここからここまでと四隅

にと真中に計五枚のジガイ錢をおく。このジガイ錢を(十円でも百円でもよい)先祖の石塔の上に進ぜ、あとは子供が拾う。穴を掘つている間におむすびとキヨメの酒一升が施主から出る。(判形)

穴掘りは組の手がやる。最低三人で、四人が普通。穴掘りは一番シンヤク(大役のこと)であった。穴掘りにお茶を持ってけなどと氣をつかう。弁当がでて、掘りあげてから、清めができる。骨がでた場合、また入れてしまつ。(本宿)

穴掘りは隣保班の人が四人でやつてくれる。葬式の前日に掘つておく。掘りおわるとまわりに寺から借りてた白い幕を張つておく。陽にあてるとお天道さまに申しわけないとしてやつた。(戸室)

地賣い錢 穴掘りの前に、施主がいって、穴の中心に六文錢(今は十円玉)をおく。六文錢でその土地を買うことを意味している。(本宿)

葬式のとき、穴掘りをする場合に、施主が、穴掘りの場所に行つて、図のよう、四すみと中央に金を置いてから、穴を掘つた。これを地所代といった。

なお、穴の大きさは立棺の場合には四尺角ぐらいで、寝棺の場合には五尺五寸×三尺ぐらいであった。(中山字原)

土饅頭 身内の人人が近い順に土をかけていく。この山盛りがうんと高いと、生前の人はうんと食つたからという。(本宿)

墓地の箸、茶碗 墓地に供えた長寿のひとの箸や茶碗は、その長寿にあやかりたいひとによって、いつのまにかもつて行かれる。(五領)

本膳 葬儀の手伝い参加者近所、親戚の多い場合は、前日から本膳が出て、回二十人分位、作り直して交代でたべる。一人一回である。

箸の持てる者は子供まで坐る。家族が多いと饅頭を沢山もらえた。普通一人五コ宛である。(判形)

出棺、埋葬 読経後座敷の縁側から出棺する。そのときオカラの門をくぐる。担ぐのは孫、甥など四名。このとき長女の嫁が屋根に向かって弓矢を射る。魔物払いである。出棺すると部屋を掃き出す。帰つて

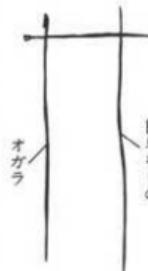
くるなどいう意。但し棺が橋を渡るまでははない。墓では飾りを外し麻の綱を棺をつるして穴に入れる。この時も弓矢を射る。このとき

土の上に膳を据え茶碗だけ残し枕团子、枕飯も穴の中に入れる。墓の上にメハジキを据えたり行灯、花輪で飾つてから僧侶がノベのお経をあげる。(判形)

出棺のとき、馬が鳴かないよう祠料を充分与えろといわれた。それは、鳴くと友を呼ぶからだといった。

又、出棺の時は、オガラで門を作り家から出る際に、仏をくぐらせた。(五領)

簡単なもの



オガラ

棺は縁側から出した。棺が出るとすぐホウキではき出す。(戸室) 出棺の折、オガラの鳥居をくぐらせる。(群馬郡白郷井(今子持村)) では、娘が家に入る時に、オガラの門をくぐらせる。(本宿)

デハの飯葬式の時、和尚とお相伴に盛り付ケ飯が一杯だけ出るのをいう。嫁入りの時中宿に「落子着き」の時、「座付ケ」の飯が出るが、一杯だけが常識である。(熊野)

出棺の際のデハの飯というのは、きいたことがない。(五領) 位牌を貰つて出る前に膳について食べていく。これをデハの飯といふ。(本宿)

尻高では、野辺送りに出る前に、一本箸に飯粒をつけて、人々が食べる。今でもやっている。本宿では、そういうことはしない。(本宿) 破魔弓、葬列が出発する際に、娘ムコが母屋の大屋根に向つて破魔弓

矢を射る。墓場でもう一度同じことをする。(五領)

野辺送りの弓は、死んだ人の娘の亭主を持つ。(本宿)

墓では北向きに弓を射る。そのあとその弓をつかつて墓の上に麻の

つるに石をぶらさげた。土の上につかない程度まで石をさげた。(戸室)

弓は昔急に黒雲が出てきて火車が出て棺をさらへつたことがあ

るのでそれに対する抗して内親の者が出棺に際して屋根の方にむけて弓を射る。墓地でも弓をひいた。(戸室)

枕石 埋葬の時、棺の下に入れる石をいう。頭がさがらないためと

いう。石は前もって入れておく。(本宿)

穴の中に棺を入れたあと身内の者が石をひとつ棺の上におとす。枕

石という。(戸室)

土葬の場合、棺を穴の中に入れる前に、穴の中に石を入れる。この石を枕石といふ。(中山字原)

葬列 1行灯 2花籠 3龍頭 4天蓋 5白旗 6五色旗(棺に

つるす) 7たいまつ 8香炉 9弓 10しかばな 11門牌(本来は

七日までカドに立てたあと墓に持っていくもので、四十九日に燃す。今は翌日燃している) 12膳 13写真 14生花 15造花・花輪 16弔

旗(判形)

棺つき 棺を担ぐ人をカンツキまたは、緑尺といふ。棺は四人で担ぐが、普通は孫の役である。孫がない場合は甥がする。(本宿) 棺つき(緑尺ともいふ)の草鞋 野辺送りの後、草鞋は三本辻に捨てられるが、捨てたのを拾つてきて履くと長生きをするという。

この草鞋は、片方ずつ別の時間に作る。普通は、かなづら両方作れといわれている。片方だけきて、急用などで仕方がない場合は、タチナワだけでもなつておく。(本宿)

花籠 年寄りが死ぬと花籠をつくるが、中には五円はいれない。昔は五厘がいけなかつた。「二歳があつては困る」からである。(本宿)

オガラ 仏様のもつね。(五領)

別れ島田と白無垢 野辺送りの女衆は、頭に白布をかぶり、着物は白無垢であった。

両親（実家も嫁ぎ先も）が死ぬと、嫁は別れ島田を結う。髪を麻で結わえ、チヨンマゲのようにして、前を二つに分ける。みるからに淋しい髪型であった。（本宿）

男がなくなったとき、姑と嫁は、ふつうの島田まげとはちがう形に髪を結って、野辺送りをした。この髪の型をわかれ島田といった。（中山南）

野辺送りには、身内のは、半紙をたんてで麻糸を付けたものをかぶつた。呼び名はない。また、竹を割つたものに紙をまいて、背中にさした。金剛杖という。半紙も杖も穴の中に入れてくる。（本宿）

メハジキ 葬列が持つて行つた竹を割つて、墓の土盛りの回りに曲げてさし、魔物除けにした。弓のつるを取つて石をしばつて吊つるものも魔除け。節をはずした竹を棺箱に届くように上にさす。イキ杖、息抜きの竹などといい、七日ごとの墓参りの時、根元に水をかける。下の仏に水が通じるといふ。

金剛杖はオガラで逆さ枝を作り、立てないで棺箱の中に入れでやる。棺の釘は石で打つ。（中山）

埋葬して近親者が土をかけ、家の帰ると穴掘りは残つていて仕上げをする。土を盛り、メハジキをさし、竹を立ててそれから縄で石をつるし、行燈等を周囲に立て、墓上にノイヘイを立てる。（判形）青竹を削つて墓のめぐりに丸く立ててめはじきをめぐらす。死んだ人を山の何かが堀り出して食うと竹がビーンとはねて逃げるようにする。（火の口）

モガリともいつた。真竹を四つに割つて墓にさした。魔物が掘らなといふ。（戸室）

魔物がきて、墓をはじくるときメハジキが役立つ。モガリはきかない。（五領）



新 墓（中山法信寺）
(関口正巳撮影)

竹のメハジキ18本で閉う。弓の弦に石を吊る。七本塔婆、息抜きの竹に石を吊る。

の若い人は、メハジキですましている。」
と書いたのを覚えて
いる（本宿）

葬式の弓のつるを片方だけといいて墓にさし、つるに石をつるして下げる。これをモガリといいう。

六角トウバをたたきこんどく。（火の口）

土葬の場合、葬儀の日に、土盛りの上に、旗とか龍頭につかつた竹を割つてメハジキをした。これは近親者がした。子供の場合も大人の場合は場合もこれをした。

これをとりはずるのは、一週間目の墓なおしのとき。

メハジキをするのは、魔物が来て墓を掘るので、それを防ぐためといふ。

なお、土盛りには、息抜きの竹をたてておいた。更に土盛りの上に石をつるしておいた。これをはずるのは墓なおしのとき。（中山宇原）

モガリ 出棺の時に棺を担いで行つた竹を、墓地で穴掘り人がなたを使って小さく割り、土盛りした回りに弓なりに曲げて土にさし、垣根のように仕切る。竹の本数は自由。これをモガリといい、山犬が仏

を掘り出さないよう、威かくのためにするという。四十九日まで置き、墓直しの時に取つて、供え物とともに燃す。別に竹の棒に石を縄で吊したものも立てる。長さ一尺ほどの木の柱に、梵字を書いて立て、お参りした人が石でたたいて少しすつ埋める。（熊野）

かつて、役原の葬式で、年寄りが「モガリを上手にしておこう。今

メハジキと息ぬき竹 埋葬の後、土饅頭の回りに、メハジキをする。

割り竹を弓形に地面にさして、土饅頭の回りを塙のように固む。これは、犬や魔物に墓を掘られないためのものである。モガリとはいわない。

土饅頭には息ぬき竹をさす。竹の先に麻繩で結わえた石を吊す。石

の呼び名はない。墓參の折にこの石をゆすってやると、墓參りにきたことが死者にわかるという。息ぬき竹は、棺にとどくようにさす。墓參の折、水をこの竹の根本にかけるが、水がじかに死者にとどくためである。水がとどかない、死者が生き返った時に困るからである。

メハジキと息ぬき竹は、四十九日の、墓なしの時に取り扱う。最近では、三十五日に墓なしをする例が多くなった。

メハジキは子どもの時にも、大人と同様にする。(本宿)

天蓋の竹を、棺の真っしろに立てた。竹の節はぬいてたてた。この竹に水を注いでやつた。これを息抜きの竹という。

この竹は盛土の上でまけて、石をつるしておいた。

竹は四十九日の墓なしの日まで、そのままにしておいた。四十九日(あるいは三十五日)に盛土のまわりのかざりと一緒にとりのぞいて焼きする。(中山字原)

溝め 棺を担ぐ人は裸足で、野辺送りから帰るとニワにタライを置いて手をつかわず足と足で洗つた。タライのそばには臼の絵を書いた半紙をはつておく。年中バライではらい、塙で清めた。(戸室)
立白の絵を書いた紙の上に塙をおき、野辺送りから帰った人は、その塙で清めをする。(本宿)

葬式後の払い 野辺の送りを済ませたあと、サン儀にカマドやヨロリ等の家中で火を使う所の灰を少しづつ集めてのせ、これに「年中祓い」の幣を立てて三本辻に置いた。灰は火が残つていて熱いのがよいといわれる。サン儀がこける場合もある。(役原)
二不幸の清めが終わると、サンダワラの上に、かまどの灰や閉炉裏

の灰をのせ、三本辻に供える。(五領)

位牌わたしがすむと神棚などおはらいをして、チョウベンを三本辻に送り出し、次でオキヨメとなる。施主、親戚、隣組の人など葬式に立会つた全員参加する。酒(ハンニヤトウ)が出る。これが終つて隣組の人(男女)が全部集まつて念仏をする。念仏は「南無阿弥陀仏」、中休みにはお茶、念仏玉として赤飯のお握りが一コずつ全員に出る。

最後に十三仏の念仏をする。全部で一時間位。(利行)

埋葬を終えて家に帰り、家の入口に白を置きその上に塙水の皿をおき、キヨメで入る。このときは僧侶も接待する。その際は前々から頬んでおいたオシヨウバンが出てこない。これが終つて寺に帰るとそこのあと親族が寺詣りした。次でオキヨメをする。一人が盆の葉で塙水で神様をきよめ、一人が正月に作つたキリハギ(オハライ)で神様をはらい、枕飯、枕団子を煮た灰と共にこの盆の葉、キリハギをチヨウバシにのせて三本辻に送り出す。(利行)

野辺送りが寺にいっている間に、近所の人は、チヨウバシ(棲依)に塙を敷いて、その上に、葬式で使用した火の一かけらを置いて水をかけ、神主さんが毎年くれる御祓と一緒にして、三本辻に捨てる。

葬式が終り、このチヨウバシを三本辻に捨てる前に、家の中の神様のいるところへは、筆をひく。(本宿)

人がなくつて送り出す時にカマドの若干火のついた灰をキヨツバシ(サンダワラ)の上の上にのせてカドの灰はだんだんもえれるようにしておせた。春祈禱の時に神主がつくってくれた年中バライも一緒に送り出される。(役原)

念仏 葬式の済んだ夜、近所の人が集まって、南無阿弥陀仏や十三仏を唱える。清めの冷酒を頂いてから念仏をする。原の堂山では、念仏を先にやって、清め(冷酒)になる。新田では念仏をしきりやり、この辺では「新田の念仏」を通る。三遍がえし、六遍がえしなどと丁寧にやっている。

ここでも昔は、葬式当日と二日目にやつた。当日の忌中念佛といつた。現在、当日にやるのは、二日目のものが移つたのである。昔はオコワ（赤飯）をふかし、煮しめをし、お念佛をした。念佛衆は夕食を食べたあと、このオコワのにぎり飯（念佛玉という）を食べた。念佛玉は食べきないので、家に持つて帰つた。念佛玉は子供にもみんなやつた。（本宿）

位牌わたし オテラマドリがすむと、子め子供の数だけ作つておいた位牌わたしをする。世帯持ちのみ渡す。そしてその晩のうちに帰る。遠方の者はトボグチからカドまで行つて、一度出たことにして再び家に入つて泊る。位牌を渡してしまえば、帳場はやれやれとなる。

（判形）

施主から位牌をもらつと、背中に逆さにさして帰る。今では、橋を渡つて街道などに出てから戻ってきて、次の行事に参加するが、昔はかならず一旦は、家に帰つた。

施主は位牌を渡す際に、ろうそく五本と、線香の束を五つをつける。

また、カエリトギのために、油揚と米三升を渡す。兄弟衆が多いと三升の袋を幾つも作つた。大尽になると、その他のユズリが大変であった。

持ち帰つた位牌は四十九日まで、上段（オクノテエのこと）の間に安置される。（本宿）

位牌わけは葬式の当日にした。その晩葬儀に立ちあわなかつた近所の人とか、葬儀の関係のなかつた親戚の人が立つて、仏の供養をした。この行事のことを、カエリトギといつた。

位牌は子供たちに分けてやつたが、位牌と一緒に、故人が一度手をおとした着物（羽織などいもの。いいものがないときには、金を代りにやつた。これをゆすりといつた）、米（さらしもんでつくつた三角袋を入れた。分量は一升ほど）、線香一箱、あぶらげ十枚ほどをつけてやつた。位牌は首（えり）のところにさかさにさしていった。位牌をもらつてくると、近所の人が寄つて来た。夕飯をだしてやつ

た。
なお、位牌をもらつた人が、遠方から来ている場合には、一旦庭まで出てから、またうちへもどつて泊つた。（中山字原）
本葬がすんでもから、位牌わけをする（その日のうちに、泊らずに帰つた）。

位牌は半紙にくるんで（戒名が見えないようにして）、様にさかさにさしていった。位牌と一緒に、米（三升ぐらい、三角袋一さらしでつづくた、麻でぬつたものーに入れて行つた）、あぶらげ（二十枚ぐらい、わらのつとつこに入れた）、ゆずり（遺品、親の着たもの、羽織、袴、着物など）をつけてやつた。

もらつて来た米は、一週間たつて、位牌に供えた。

むかしは、位牌をわけて来た晩が、一二三日のあとに、近所の人たちをよんでごちそうをした。これをケエリドキといつた。このとき、十三仏を唱えて供養した。（中山字梅沢）

カエリトギ、位牌を持って帰ると、近所の人が仏様がくるからといふので、カエリトギの用意をして待つてくれた。皆で食事をする。（本宿）

不幸のときの食事 不幸のときは葬式の当日には白飯を出した。葬式の翌日、七日というのをしたが、このときは、うどんかそばを出した。

葬式の当日の昼食には、本膳を出した。白飯に、ひらにつけてもどしきを出した。

子供がなくなった場合には、ひらの上にあぶらげをのせて出した。
（中山字原）
マケ墓 泉照寺墓地には斎藤マケ、山田マケ、中島マケの墓がある。
（関田）
尻高はほとんどの方が泉照寺の檀家。墓は個人墓地とマケ墓が半々くらいになつてゐる。墓地は屋敷の近くにある。（戸室）

ラントウ 昔、墓場であったところをいう。今も供養塔がある。(本宿)

(三) 葬後の祭り

一七日までの墓参 每日、夕方になるとお燈明をあげにいく。

一七日

日を過ぎれば、あとは七日、七日に燈明をあげておく。(本宿)

門牌 死後、一七日の間、門牌を立てる。この期間に訪れた物

貰いには、金員に食事をださなければならない。それでは大変だから、

(本宿)

門牌は外に向けるなどといって、横向きに立てる。(本宿)

七日 葬式の後、宴席が設けられるが、これを七日という。この辺

のご馳走は、祝儀、不祝儀にかかわらず、ウドン、ソバときまついた。かつては、七日は一日目に行われたが、今では当日に済ましてしまつ。七日のあとは念仏をやる。(本宿)

初七日として親戚、隣組の人も翌日墓詣りし、二七日、三七日は家族だけで詣る。このとき七日のダンゴを茶碗に入れて供える。四十九

日はハカナオシである。(判形)

寺まいり 葬式のあった晩に寺へ米を持って行った。米は三角袋に一升入れて持つて行った。このとき、お布施と借り物料(金)を持つて行つた。寺へ行くのは施主と親族。

葬式が遅くなると、寺まいりは夜になつた。(中山原)

清めをすましてから、近親の者は、七日の経をききに寺参りに行く。

(五領)

七日の念佛 本来は、初七日に行なう念佛を、現在では、清めをす

まして、そのあとで行なう。念佛の中心になるものを僧正様といつて、木魚をたいて音頭をとる。(五領)

四十九日 ハカナオシをする。餅はつかない隣組の人が来てお詣りする。米粉の団子をつくつて供え、みんなで分けたべる。これをおべると丈夫になるといふ。墓ではメハジキを外し、花輪、行灯など

墓上に飾ったものを燃す。(判形)

オタナアゲ 昔は四十九日がオタナアゲであったが今は三十五日になつてゐる。四十九日までは七日塔婆をたたく。魂は四十九日の間は

屋根のグシに居る。(戸室)

死者の魂は四十九日間、屋の棟にいるといわれている。(本宿)

四十九日の餅 フンタキモチという。イロリの足をのせる所をフンダギといつてゐる。餅をフンタギにして足をのせ、仏様が仏壇に上るから「フンタギモチ」というのかもしれないと言者は語る。(役原)

四十九日になると、仏が仏壇に上がるの、仏の踏み縫きになるよう餅をつくる。(熊野)

小さい俵を編んで、餅を四十九箇入れ、寺に持つていった。大正までであつたと思う。(本宿)

かけ見舞 葬式のあつ翌年の諏訪様の祭り前に、かけ見舞をした。持つて行く物は、うどん、練習、うどん粉などであった。(五領)

(四) 年忌

年忌 一周忌、三年忌でおしまいにする人もあるが、普通は七年、十三年、三十三年忌をする。三十三年忌にはワカレトウバ(エダトウバ)に戒名を書いてもらい供養する。これで仏は神様になるという。

(判形)

一、三、七、十三、三十三年

（戸室）
塔婆（金子雄一郎撮影）



塔婆はホウの木に戒名を書いてもらつて建てる。この木はあまり生えていない。

(五領)

一回忌、三、七、十三、十七、二十三、二十七、三十三回忌。三十二回忌にはワカレトウバをたてた。栗の木か桜の木の二股になつた枝を切つて皮をけずつて戒名を書く。葉はつけない。ワカレトウバは腐るままにしておいた。(戸室)

枝塔婆 三十三年忌に、ホウの木の枝塔婆をたてる。一、三、七、十三などの年忌は、お寺から手紙がくるのでわかる。(本宿)

(五) そ の 他

耳つぶさぎ 同年齢のひとがなくなつたことをきいたときには、耳に馬グソをつめる。馬がいなくなつてからは、とんとみられぬ。(五領)

同年の者が死ぬと、馬の糞で耳を押えて、「聞かない、聞かない」と唱えた。(役原)

同年者のが死ぬと「一度」と「二度」といつて、ボタモチを耳にあてる。

(刑形)

ひとつ年の人が死ぬと馬の糞を耳に近づけて「キカンキカン」という。(戸室)

ムラの中の同年の人がなくなると、まぐそをまるめて、棒ではさんで、耳につけて、次のようなことを何度かいう。

「いいこと聞け、わりいこと(悪いこと)聞くな」

これは、子供がおもにやつたこと。「ミニーピサギでもしてくれべえ」といつてやつた。(中山原)

ムラの中の同じ年のものが死んだときは、同年輩の者は、馬の糞を耳にあてて、「みみきくな、みみきくな」といつた。(中山字原)

一年に二度の葬式 この場合には、葉を打つ楊柳を繩で引つぱつて、三本辻に捨てくる。(本宿)

無縫仏 旅先で死んだ仏、子供もなく誰にも祀つてももらえない仏で

共同で祀つてやる。これはお盆のとき盆棚の下にイモの葉にボタモチを入れて供える。子供で死んだ者も棚の下に祀る。(刑行)

生まれ替り 中之条町で死者の背中に字を書いておいたら、吾妻の東村で生まれた子の背に同じ字がある子が生まれたという。(戸室)

お産で死んだ人の供養 流れ川の水たまりに四本の竹を立て、それに赤い四角の布を張り、柄杓で水をかけてやつた。赤い布が早く白くなりればよいという。赤い布には何か字が書いてあつた。その水たまりは、通称サンゲといって、子供たちの水遊び場であった。(本宿)

お産で死んだ人があると赤いきれをおつしやんに貰つて棒をつけて水の流れるせき口に張つとく。小さいヒシヤクをつけといて早く色が白くなるように通る人に水をかけて貰つて供養した。(北の谷)

子どもが死んだ時 このとき着物をさかさにして振つた。着物は本人のでも他の人のものでもよかつた。三歳位までの子どもが死んだときこうしたが、これを何んというのか、また何んのためにしたのか分らない。(役原)

逆縁 子供が死んでも、親は埋葬に立合わないし、妻が死んでも夫は同様である。(本宿)

正月前の葬式 正月間近に葬式があるとその正月は祝わないと。正月をやりなおすということはなかつた。四十九日が終わらぬうちは正月をしない。(戸室)

盆中の葬式 盆月にはいつてできた仏には、すりばちをかぶせて葬式を出す。すりばちのかわりに、紙にすりばちの絵を描いて顔にかぶせたりもする。お先祖様がずんずん来るのに、「こっちから出かけて行くのだから「貴様、どこへ行く」などとつっこくられたりするからだといふ。お盆様を送り出してしまえば、「このかぎりではない。(五領)

年 中 行 事

は に め に

高山村の年中行事を概観すると、吾妻地方の特色と見られる風習のほかに、利根地方の影響もかなり見られる。最近、生活様式が急速に改まり、民俗も急速に薄れて、忘れられているが、それでも老人たちの経験した事象に基いて、聞き取りされたものの中から、本村の年中行事の特色と見られる点について触れてみよう。

正月行事を司祭する年男が、元旦には早く起きてまず若水を汲んだ桶の中に、繩でしばった水餅（供え餅）を三回入れてかき回す儀式がある（五領）、利根郡白沢村岩室などでも餡餅を若水に浸す家がある。これは、六月一日のキヌタギツイタチに水餅を食べる習俗と関連していて、かなりひろがりをもっていると考えられる。

正月様は卯の日卯の刻に燃るといつて「卯の刻飯」をおたきあげにして、神棚に供えて送り出すというやり方は、年取りの晩におたきあげをして、新しい年神を迎えるのと共通する丁寧な送り方である。

正月五日が仕事始め、小正月の若木迎えをして、マユ玉木（ミズグサ）や花をかくオッカドを伐るために、山入りをするが、山村地帯

の二日の仕事始めに七草がゆのセリ取りに行くのは、古風を守っているものといえよう。（新田・五領）

元旦に子供が組内を回って、草紙などをもらい歩いたが（熊野・村の子として大事に扱われていたことがわかる）。以前は紙が挨拶用・贈

答用として、盛んに用いられていた。神社からの年始で、一月四日に官司が氏子を回るのは、寺の年始に習ったものか。（本宿）

正月六日を六日年といい、家中の年取り、馬の年取りなどといって、ヒエを煮て馬にくれたり、六日爪を切るので馬の爪切りをしたが（本宿）、利根郡白沢村尾合でも「女と馬の年取り」なので馬にご馳走をするように、北上州に多い習俗であった。

松引き、松飾りをはずすのは、外飾りは一月七日で、家の中の松飾りは十三日の飾り替えに、マユ玉と引き替える（戸室）というよう、二段になっている。七日までを松の内とする都會風の考え方の以前に、小正月までずっと大正月が連続していたのであるうか。

小正月は農家の祭りといい（新田）、農具の模型をオッカドなどを作つて供えるが、同郡嬬恋村でも小正月を「農家の年取り」というのと同様で、小正月を農家の生活に即した正月と感じていたことがわかる。

小正月十五日の十五日がゆを、カユカキ棒でかき回したあと、神棚に上げて置き、五月に苗の種もみ蒔きの時に、その水口にさすが、「カラスの口を焼く」といって、米をいって黒く塗ったカユカキ棒の先端の四つ割りにした所に挟んで置く（本宿）。同郡嬬恋村でも焼き米を、熊野神社の千羽ガラスの札に包んで、水口に立てたカユカキ棒に供えたとの類似した行事で、カラスの威力で雀の追放を祈つたものであろう。

小正月のマユ玉はアワ・ヒエや米の粉を使って作つたが、「二十日前に取りはずすのは（戸室・五領）」

小正月の終りを二十日正月と意識したものであろう。オシラ様に供えたり玉は三粒取って置いて、秋の十月一日ごろの山の口に干し草刈りに行く時、持つて行つて食べるとマムシに食われないというが（北之谷）、マユ玉に蛇除けの呪力を認めたものと考えられる。なお、一月十四日をオシラミマツリといふことは、この日がオシラ様を祭る日として記憶させていたことがわかり、注目される。十四日から十六日まで、正月棚のオミタマ様に、メンバに飯を盛つてラミ箸を六膳さして供える役原の例は、嬬恋村では聞けなかつたが、ミタマ祭りの古風を伝えるものである。

道祖神は道ロク様とも呼び、兄妹で一緒になつた神様という伝承は（役原）、嬬恋村袋倉にもあり、吾妻地方に伝わるものであろうが、その分布に注目したい。道祖神像として、男女の木像をオッカド（ヌルデ）の丸木を削つて作り（高さ10—15センチ）、道祖神燒きの時に火中にくべて焼く風習は吾妻地方の特色を示すものである。道祖神祭りの晩、役原では子供が水一升を樽に詰めて、新しく嫁を貰つた家に行き、オッカド製の男根とワラットコ製の女陰を渡して、夕飯をご馳走になつて來たが、この時に嫁ゴババキをしたといふ。道祖神の夜、カゴ祝い、水祝いなどといつて、新婚夫婦を祝う風俗が県内にとびとびあつたが、その一例として興味深い。なお、吾妻郡の道祖神祭りの時盛んな「鳥追い行事」は、ここでは太鼓の音もさせないという。

千匹ガユは利根地方に盛んな行事だが、ここでも小正月十六日にヒエと豆を煮て、ツツコを入れて三本辻に出すが、月の数だけ十二、三本も出す家もあつた（新田）。動物を供養する日だという。判形では千匹ガユは正月と盆の十六日にするもので、馬の供養だというから、正月と盆行事の類似を示している風習といえよう。さらに、五箇では正月と盆の十六日には十王様に供え物をする風習がある。正月十六日には茶碗に飯を盛つて箸八本をさして、仏壇に供え、盆の十六日にはキヨウバシ（儀はし）に灰を盛つて、道の辻または門の脇に供えるという。

正月や盆の十六日に十王様を祭る風習は嬬恋村では見られなかつたが、東上州に顕著なもので、その分布に注目したい。

正月十八日に十八ガエを作り、成りコダマ（実のなる木）に、カユをかける役原の例は、利根地方など、北上州に多く伝えられている風習である。

正月の終りを意味する「しまい正月」を一月二十日とする所と、二十八日とする所とあるが、ここでは二十日をしまい正月といい、朝ゲ（朝食）に雜煮を作り、正月棚をおろして正月を終わりにしたり（五領）、マユカキをして、マユ玉飾りを取り去つたりする（新田）。その夜は、エビス講で、エビス講はたて膳にして飯・煮物などを供えるが、下げる時はその食物を「お金で買う」まねをして下げる。供えた物は出世前の子に食べさせると縁遠くなるからといって、食べさせないな（新田）、県下で聞かれることが共通している。

春分過ぎて初卯の日の前夜（寅の晩）、卯の日待ちの行事をする所がある（北之谷）。宿に集まって、米の飯を高盛りにして無理じいて食べさせ、シッケツコウという觀世よりのくじなどをして夜ふかしを行つた。火災除けに天狗様を祭る行事だというが、西上州などの寅祭りの行事と似たものであろうか。

二月八日を春のオコト・オコト始メといい、オコトボタ餅を作つて食べたが、この日は一ツマナコが来るから、メケエ（かご）など、目のうんとあるものを庭に出して置けばよいという（本宿）。利根郡白沢村岩室ではダイマナコというかごを、鬼除けのためにカイド（星敷の入口）に出して置くこと、同類の風習で、東上州に多く残っている。判形ではコトハジメには長く続くようにうどん、そばを作つて神様に供え、コトジマイ（二月八日）には丸く治まるようによタ餅を進ぜるといつて、両日の食べ物をあげているのは、よそではあまり聞かないと、兩日とも、オコトババアが来るので、目のたくさんあい風習である。兩日とも、オコトババアが来るので、目のたくさんあるものをドボグチに出して置くと、たまげて来ないというのは、この

日に来訪するものを老婆と仮定していく興味深い。

正月と十二月、または春と秋に同じような伝承の行事をすることはほかにもある。ここでは、二月初午と十二月稻荷祭りの時に、屋敷稻荷を祭る。赤飯・マユ玉・ヤキ餅・魚などを供えて祭るが（北之谷）、

同郡嬬恋村や利根郡白沢村でも同様に祭っている。

さらに、天神待ち

を春二月二十四日、秋十一月二十四と年二回、子どもが組を作つて宿に集まつて会食するのは（五領）、嬬恋村今井でも日を二十五日にして二月と十一月に祭ることと同様である。天神講を一月か二月の二十四、五日ごろ祭る所は県下に一般的だつたが、秋にもして年二回祭る

地城は北上州の特色であろうか。

六月一日をキヌヌギツイタチ、キヌヌグ日といつて、正月の供え餅（水餅という）やマユ玉を取つて置いて、ほとばしてジリ焼きにして食べるが（本宿）これを食べるといふ（北之谷）、蛇がキヌを脱いで一チヨウメエ（一人前）になる日という伝承は珍しい。

水神の象徴とされる蛇を祭る日だつたのだろうか。

七夕には七回飯を食つて七回水を浴びる日、井戸替をする日、用水の掃除をする日（新田・五領）、洗濯すれば汚れがよく落ちる日、髪の毛を洗う日（関田）など、水に関係した伝承が多いのは、東上州などにも共通している。

夏の祇園祭りは七月二十五日に天王様の御輿が出て家々を巡回するが（新田）、八月一日の所もあり（判形）、昼夜祇園で自分の所では行事をせず、中之条町の祭りへ出かける所もある（戸室）、八坂神社に稲穂を供えるのは（新田）、穗カケの一種として興味深い。

盆の日取りは中山地区では九月十三日—十六日にしていたが、昭和五十二年から八月盆になつた。養蚕などの関係で遅らせていたものを、最近農作業の影響が減少したので、県下に多い八月盆に切り替えたものであろう。盆棚に供えるナスは、「ソウリヨウ切り」といつて、さいの目に切つてハスカサトイモその葉に載せて進ぜるが（五領）、高崎市

京ヶ島地区でも、「ソウリヨウ切り」と呼んでいたのと共通する。新盆の家では、墓地から家までの間に、シノ竹を立てろうそくをさして百八灯をともす行事を、迎え益と送り益の時にして（五領）、北上州に多い風習といえよう。

秋の彼岸の社日には、地神様が遙り歩くので、稻を一株切つて神棚や軒端に下げたというが（新田・役原）、実が熟する前にまず初穂を神に供える刈りカケの行事であろう。カリカケの稻の穂は、馬が病気の時に食わせると治るというのも興味深い（判形）。

旧十月神無月に出雲へ神々が集まるというが、留守居をするのは稻

荷様とエビス様で、お留守居様と呼ばれる（五領）。諏訪様も出雲の神

から、「蛇は体が大きいので来るな」とことわられたというので、留守居をするという（五領）。諏訪信仰の盛んな北上州らしい伝承である。

なお、旧十一月一日の神迎えの時はハバキヌギをして、神々を迎える

という（小屋）。

旧九月九日・十九日・二十九日をオクンチといい、それぞれ、初ノクンチ、中ノクンチ、シメノクンチなどと呼び、屋敷稻荷のお仮り屋を作り替えて（関田・熊野）、赤飯を供えて祭るが、「オクンチはカラス鳴きが悪い」という（本宿）。野鷹などでは屋敷稻荷の祭りを、春の初午と秋のオクンチと、年二回祭っている。したがつて、この地区は

屋敷稻荷を春と秋とで、年二回祭るが、秋はオクンチに祭る所と、十二月に祭る所とがあり、オクンチに屋敷稻荷を祭る例は、ほかでは聞かない珍しい日取りである。

旧十月十日の十日夜は月祭りで、「大根の年取り」といい、餅と大根を月に供えるが、「フランユウの祭り」という（本宿）。十日夜は月見だから、月が見える縁側や庭のフランユウ（フランユウ）の上に餅を供えるのだと説明している（北之谷）。一日早く九月夜をする所もある。関田の飯塚マケと小瀬マケでは、源義経が奥州へ下向した時に十日夜ができなかつたので、九日夜をするようになつたという。東上

州の戸塚本町辺でも同様な伝承により九日夜をする所があるが、はるかに離れた北上州のここにも同じ伝承があるのは興味深い。

十一月二十三日は太子講荒れで雪が降るといい、ピッコ（片脚が短い）で、メツカ（片目）の太子様を祭るために、長いカヤのピッコ箸

で小豆ガユを食べるという（新田）。太子講の伝承も北上州に多い。

十二月十五日に屋敷稻荷を祭るのは、県下に共通している。お仮り屋を作り赤飯・尾頭付の魚・スミドウフなどを供える（本宿）。しかし、この日をカマギヨメと呼んで、カマ神様を祭ることは（本宿）、この地区の特色であるといえよう。へつてにシメ繩を張りオンベロ（御幣）を下げて、カマド祝いをする日にもなっている。ここではカマギヨメは秋の屋敷稻荷祭りの行事の名称である（新田・五領）。カマドの火を改めることが、家の再生を祈念する大事な祭りだったのであろう。

冬至にナス木を燃してあたると、シミ（寒氣）が通らない（新田）

というのも、一年の極まりに新しい火を焚くことで、再生を願った気持の表われと見られよう。

正月の用意として、門松にはナラの木を松グイとして立て（熊野）、松と竹を飾り付けて回りにナラマキ（薪）を付けた。シメ繩にはミカ

ンや豆がら（マメー健康で暮らせるように）を付けた（新田）。正月棚にはナラの木を割った板を、七、八木そろえて、繩で編んで組み立てた家もある（熊野）。ナラの木が正月神を迎える時に、大事な働きをしていたことがわかる。なお、正月に飾った松は神のヨリマシの木とされるが、本宿では正月様の松を四本取って置き、五月の大掃除と、十二月のす払い（大掃除）の日に、イロリで燃すことになっていると

いうのは興味深い。正月神の去来を暗示しているよう。

この記述に当たっては、同じ項目の中では東の中山地区から西の尻高地区へ、編成順に資料を並べて、その変化や比較ができるよう配慮した。

（閑口 正巳）

一月

一日

年男 年男は子どもがなる。元旦に早く起きて若水を汲んで湯をわかし、茶を神棚に供えた。（利根郡の方の風習であるといふ）年男が雑煮をつくり、女衆は家の中をはき掃除した。（新田）

若水汲み 元旦の若水汲みは、年男がやつた。若水をなみなみと汲んだ桶の中へ、繩で柱につるしておいた水餅をお供えを、三回入れる。そうしてから、鉄びんの中へ汲んだ。（五領）

雑煮の水は卯の刻にくめと昔からいっていいる。（本宿）

初詣で、初詣では、村社の中山神社や権現様へ出かける。近年、また盛んになってきて、十二時をまわれば、もう出かけるひともある。五領からは、氏子總代が出かける。

明年からは、寒いことだから、参詣者に酒を一杯だす話もある。（五領）

子持山の御来光 元旦のまだ暗いうちから、子持山頂に篝火がみえるが、あれは、御来光を待つひとたちのものだ。（五領）

年始回り 昔は、本宿中を元旦に回った。百戸近くがあるので、暗いうちから、五六人組んで歩いた。草鞋ばきであった。今は、同志会の主催で、公民館式をやり、祝賀会を行なう。（本宿）

この部落は一〇〇戸ぐらい。昔は二日のあさげ残らず年始に回った。そうだ。わしが若い頃は一日の朝早く毎戸回ったつけ。旦那が出来れば、かみさんが仁義を受ける。（新田）

年始まわりは昔は、夜が明けると早々に、一戸まわりの戸別訪問で、中山中、「おめでとうござす、おめでとうござす」と挨拶をして歩いた。まいましていと、お雑煮のできないうちに挨拶されてよわった。

毎年はやい習慣のひとで、ある年、門松にふたのしてある表中の家

にまで、いせいよくおめでとうごわすとびこんで、往生したことがある。

門松も飾り、新年を迎える用意のできた三十日になつて、二不

幸のできた家もある。

近年は、元旦の朝七時に、各戸一人が公民館の前に集合して、区長

の音頭とりで、宮城連邦をしたあと、たがいに年始の挨拶をする」と

でかえっている。(五領)

正月様 初卯の日にお正月様があがるのだといつて、オタキアゲを

する。ご飯を煮て進ぜた。(本宿)

正月の卯の日の卯の刻に正月様が帰るから「卯の刻飯」を作つて神

棚に供える。成徳神がはやく出で行く時は豊作。長い間いると悪い

年、不作である。卯の刻飯をおたきあげにして、飯を乾しておき勝負

ことに出かける時食うと勝つ。(新田)

初卯の日の卯の刻に年神様が帰つて行くので、飯を一合ぐらいない全部を供える。「たききりめし」のおたき上げをする。早く初卯が来る年は陽気がよいという。(五領)

正月卯の日の卯の刻に正月様があがるのでオタキアゲをする。はや

くあがると天気がよい。(五領)

おたきあげといつて、正月の初の卯の日には、朝早くご飯をたく。小鍋で煮て、それをそのままそくり、正月廟にあげる。(鉢とかお椀にもりかえてあげるうちもある)それをあげるのは旦那(煮るのは女衆)。

これは、年神様がおたちになるので、おかえりにならぬうちにあがれといった。そのため、朝寝をしてはいけないといた。(中山原)。

正月には正月棚をかけるが、ここに成徳神をまつる。成徳神(正月様)がかかるとき(この日は年によつてちがう。早い年には元日のうちに帰つてしまつこともある。その日と時刻は暦に出ている)ご飯を

炊いておわんに山もりにして正月棚にあげる。これは年男が炊いてあ

げる。

これをさげるのは、正月四日、おたなざがしのとき(中山原)。

朝湯 以前は三ガ日と七日には、どこの家と決めて朝湯をたてて、

年男が入つて身を清めた。(新田)

初絵 オシラ様、キヌガサ様、エビス様、大黒様などがあつた。(本

宿)

正月の食事の禁忌 正月にソバを食えないのは、竹瀬、小野両家、なお竹瀬家では正月飾りに、ミカンとイカを使つてはいけない。大木

家では、三ガ日に雑煮を食べない。(本宿)

二 日

仕事始め 正月一日は、仕事初めといつて、山へ、正月のまゆ玉木

であるミズグサや、かき花をつくるオツカドを切りに行く。このとき、

小さく切った餅を紙にくるんだものを神様に進せて仕事にかかる。七

草がゆに入れるセリをとりに行くのもこの日である。

煙に初めて出る日というのには、特別はない。仕事初め以後なら、

いつでもよい。(五領)

仕事始めで正月の二日にオツカド・ミズグサの木を切つて小正月の用意をする。山で最初に切つた木の株にのしもち二つあげる。(五領)

仕事はじめには小正月のマユ玉をかざる木を山へとりに行つた。山

グワ(ボク)・ミズキ・オツカド(ヌルデ)をとつてきた。(戸室)

山入り 一月二日の仕事始めに山へ行って、小正月のマユ玉をさす

木やミズグサなどを伐つて来た。オツカドやニワトコも伐つて来る。

(新田)

山入りは一月一日。山へ行って、十二様に餅を二重ね供えて、一年

中怪我をしないように拝み、小正月のボク伐りをして来る。

一月二日に山入りをする。小正月のまい玉をさすボクをとつてくる。

(熊野)

若木迎え　一月一日、小正月のマユダマをさすミズキ、山桑を切つてくるが、このときは十二様にお詣りしてから出掛ける。(判形)
若木迎えをして、十二様におサゴ(散米)などを供えて来るのに具。
合(がよい)。(北之谷)

正月二日に、山へ若木迎えといって、年があけてはじめて山へはいつて、若木を切つて来た。それに、小正月の十二日に米の粉のめえ玉(まゆ玉)をさしてしんせた。(中山字原)

書初め　昔は書いて近所へくれるものだった。座敷いっぱい貼つたものだった。書き初めをもらうと一錢くれた。三錢・五錢は多い方。(熊野)

元日の朝「こんちや、新年おめでとうございます」「こんちや、紙をくられとくれ」と近所の子どもがお草紙を貰いにきた。家庭では五枚とか七枚とか十枚ぐらいつ用意しておく。よじよじ歩き始めた子から学校へ上るまでの子がくる。どこそこは多かつたなどと見せ合い、貰つた紙は自分の箱へ入れてしまつておき学校に出ると手習いに使つた。(熊野)

嫁のご始日　一月二日は、嫁の二年始日とか、お客日といった。

この場合、ふたごどしあはとるなどといつて、六日までには帰つてこいといった。一日六日は六日年で、女のとどりといつた。(中山原)とろめし

三ガ日のうち一回食つもんだ。(新田)
火打石　正月の三ガ日の間は、火打石をつかつてあかりをつけた。(中山字原)

四

日

オ棚サガシ　四日の朝、神の鉢に入れて神棚に上げて置いたものを下げる、ゾウスイにして食べた。(新田)

寺の年始　中山地区の人は、元日に、双松寺と法信寺の両方に年始にいく。四日は坊さんの年始で、お札を持ってくる。「大般若祈福札



お寺のお札 (本宿)
(佐藤 清 撮影)



神社のお札 (本宿)
(佐藤 清 摄影)



神社のお札 (本宿)
(佐藤 清 摄影)

双松寺と御祈福
宝積 法信寺である。(本宿)
寺からの年始は、
はなるべく留守にしないようした。壇
家から寺へのお札参
りは、一月十六日に
なる。(五領)

神社の年始　寺と
同じく四日である。

宮司は「歳旦祭氏子
繁榮祈福璽」を氏子
全部に配る。「大歲皇
太神」は、十二月二十
日には、氏子總代が
配る。区長・伍長を
通じて、戸ぶれの形
をとつて配る。こ
れは宮司の收入と
なる。この札と一
緒に伊勢大麻が配
られるが、この金
は群馬県神社庁告
妻支部を通じて上
納される。

この他、「中山神

社祈禱會」は四月一日に、「三嶋神社祈禱會」は旧の九月十四日に、總代から区長・伍長を通して配られている。この金は神社の所有となる。(本宿)

契約 一月四日した。契約は四十歳以下の若い衆のもの。道路の修理、橋のかけ替えまで中心になつてやる。若い衆が家に居ない時は六十になつても一戸一人は出る。公民館ができるから三月にするようになつた。(新田)

その年のムラの初寄合をケイヤクといって、正月四日に行なう。一戸あたり一人で、ムラの一年中の計画をたてる。宿は、前年にヨメをもらつた家が順ぐりに請負つた。その際、出席者は、一人につき米五合を持ち寄ることになつた。宿になる家では、ムラじゅうといえば、なにしろ六〇人余も集まるので、その接待はたいへんだった。

一二、三年前からは、年度末、区長の交替する三月に、公民館でやるようになつた。(五領)
ケイヤクは、正月の五日と六日に、米一升ずつ持ち寄つて、嫁をもらうなど、お目でたのあつた家に集まる。その年の年間事業計画などを相談するが、ケイヤクに参加できるのは四十歳までである。当日は、役員が会費を集めて酒を買って来て飲む。(羽村)

おんなしのお正月 一月四日のことを、おんなしのお正月といった。むかしは、おんなしは正月三ガ日のあるいたは、外へ出るなどいわれた。四日になつて、仲人と親のところへ二年始に行つた。(中山宇海沢)
初肥い 申の日を選んで、馬屋肥いを出した。(新田)

六 日

六日年 家中の年取りで、夜ご飯を煮て食べる。(新田)
六日は家中のとしとり。嫁が里帰りしても六日には帰つてきてとしとりをした。(新田)
としとりには大晦日のとしとり、一月六日、六日どし、十四日の十

四日どし、節分のせつぶんどしがある。(火の口)

一月六日、よそへ行つてゐる者もこの日には帰つて来て、うちの者と一緒に食事をしろといった。(中山宇海沢)

六日爪 六日は、馬の年取りで、ヒイ(稗)を煮てくれた。カンヅクロイといってハクラクサン(伯樂)が、馬の爪を切つた。(本宿)
六日まで爪を切るなどとい、六日に切つた。(新田)

七 日

七草 二日の仕事始めにセリを摘んで、しばつて神棚に上げて置く。七草は大根・大豆・ニンジン・ゴボウ・トウフ・セリ・葉など、七色のものを作れる。セリタタキをする家もある。

七草を過ぎると松をはずす人もいる。その時に、松のシントウを枝残して、クリに挿んで置く。(名は不明)(新田)

一月七日に七草がゆを作る。七草、セリ、ダイコン、コブ、ニンジン、サトイモ、ダイズを入れて作る。七草は神棚の前で包丁の茎で次のように唱えてたたく。

「七草なすな とうどの鳥が

渡らぬうちに 早くたけ 早くたけ

たけ」(戸室)

年神棚の下でマナイヤを置き、その上に火吹竹とビバシとまわし木(スリコギ)をのせて、セリ、豆、コブ、人参、大根、ゴボウ、サトイモを包丁のみねで刻んだ。年男が「七草ナズナ、唐土の鳥が日本のはしを渡らぬ先に早くたけ、たけ」と唱えながら刻んだ。(戸室)

一月七日の七草のときには、七草がゆをつくった。七草をきるのは茶の間の正月棚の前。このときの唱えことは、「七草ナズナ、トウドの鳥が、日本の橋を、渡らぬうちに、はしたたけ、はしたたけ」という

松ヒキ 一月七日、庭にある松飾だけは取り除く。除いた穴に、松の

シンをはさんでおく。松ヒキの時は、松をしばたなわは縫など刃物を

使つてはいけない。結び目をほぐして松をはずすことになっている。
しかし、家の者に不幸などてきて急に取りはずすときは鎌を使つても
よい。家の中の松鈴は十三日のマユ玉と引き替えに取り除く。(戸室)

八 日

北向觀音 厄年の人々が厄落としにお参りに行く。(新田)

十一日

藏開き 十一日雑煮を藏に上げて食べる。藏のない家は穀を置く所
へ供える。(新田)

カガミ開き(藏開き)は正月十一日に雑煮を藏に供え、煙に入つて
さくをきるまねをする。(五箇)
藏開きは一月十一日に藏のある人がやる。雑煮を食べてから藏の戸
を開ける。この日になるまで藏が明けられないから暮のうちに、必要
な物は出しておく。(戸室)

一月十一日の朝藏開きをする。雑煮をして藏にしんぜた。(中山字
原)

十二日

十二様 十二日の朝、十二様に餅をそなえてボクを切りに山に行つ
た。以前、山の入口には、ほとんど十二様があつた。(戸室)

小 正 月

モノヅクリ

ハナ ニワトコでハナをかけて神棚や仏にあげた。長いニワトコ一
本に水引をかけて、神棚にあげて置く。(新田)
小正月は農家の祭りなので、オツカドの木で、テンガ、エグワ、鎌
などを作り、供え物にした。(新田)



カユカキ棒と ハラミバシ (中山)
(佐藤政雄撮影)

アーボヒーボ 門松の所を取つて、オツカドの木を、皮をむいたも
のと皮をつけたものを七一一〇本ずつ作つて枝にさし、堆肥舎に立て
る。(新田)
正月十三日の晩に、オツカドの木で皮をむいた白いのと、むかない
黒いアーボ・ヒーボをこしらえておき、十四日に堆肥の上にさした。

モノヅクリを十一日から十三日ころして、アーボ・ヒーボは堆肥小
屋に立てる。(北之谷)
アーボヒーボはオツカドでつくった。アーボは皮をむき、ヒーボは
皮をむかなかつた。これを、一月十四日に堆肥塚にたてた。(中山字原)
カユカキ棒 十五日粥をかき回す棒は、先を四つ割にして、そこに
藏玉を入れる。その棒は、神棚にとつておき、苗間の種まきの時に
水口にさす。その際、「鳥の口を焼く」という訳で、棒を黒く塗り、米
を炒つてオヒネリにして、それを四つ割にしたところにはさんでさす。

(本宿)

カユカキ棒は神棚にあげて
とつておき、苗間の水口にた
てる。炒り米をつくりて半紙
に包みはこんで水口にたてる。
炒り米は鳥、鳥に供えるのだ
といふ。(中山)
カユカキ棒は先端にまい玉
をさして十五日のあづきがい
のナベをかんまして神棚に上
げとく。あづきがいにはまい
玉を入れる。(新田)

カユカキ棒は、オツカド棒
の頭を十文字に割つてマユ玉

を挿み、十五日ガユをかん回す。あとで田んぼの水かけ口に立てて置く。(新田)

ケエカキ棒は、苗間の水のかけ口にたて、米、豆のいっただものをおひねりにして、五(グ)の目のわれ目にさかさまにしておくと豊作。(五領)

小正月は百姓の祝いといった。

一月十五日の朝、あずきがぬにて、カユカキ棒(オッカドでつくつた)で、かゆをかきまわした。そのあと、カユカキ棒は、神棚にあげておいた。

五月の末頃、苗代をするが、そのとき、カユカキ棒を苗代の水口にたてる。

やき米を紙に包んで、カユカキ棒にはさんでおいた。(中山字原)

ハラミ著 日は決めていないが、正月の十四日に作ればよい。ナタで作った。小豆粥を食べるのに使用して、その後、田植えまで取つておく。(本宿)

ハラミバシは十五日粥を食べる時に使う。オツカドで家人數だけ作り、取つて置いて、田植えに田んぼで赤飯を食べる時に、ハラミバシを使つて食べた。(新田)

ハラミバシは十五日のおかげを食べれば役すみ。昔はとつといで田植の赤飯を食べた。田んぼのきわで赤飯やモチを食べる。(新田)ハラミバシは、オツカドの木でつくつる。あずきがぬをかんまして、はしにうんとくつつくほど米の出来がよいという。使用後は、苗間の水口につつさす。(五領)

ハラミバシはオツカドでつくつた。一月十四日の前につくつておいて、床の間にあげておく。五月の田植のとき、初田をするとき、田植を手伝つてくれた人に赤飯をだすが、それを、ハラミバシで食べてもらつた。(中山字原)

タワラ ハナカキの余り木と、マユ玉の余り木をしんに入れ、オツ

マユ玉各種

一月十一日、十三日にマユ玉をヒエ粉や米の粉で作つた。ヒエ粉は丸形、米の粉は十六マイ五など大きい。マイ玉を作つた。

オシラ様やお正月様にあげた。(新田)

マユ玉は丸形が最も多く。マユ形もある。米やヒエ、トウモロコシなどの粉で作る。十六マイ玉をマユ形に作つて、オシラ様へ供えた。

井戸から便所などの建物にもマユ玉を供えた。ハナ葵子を買つてきて、マユ玉とともに木の枝に飾つた。(新田)

朝鮮ピエをひいたヒエマイ玉と、米の粉のマイ玉と、両方をボクにさす。(一月二十日にマイカキをして食べる。(新田)

メーダマは小正月のとき米粉・稗粉・トウキビの粉を二、三斗用いて作り、若木迎えのとき伐つてきたミズグサ・山桑の枝五

一七本にさして家一ぱいにかかる。大きいになると一本の木に粉一斗分位の团子をさすこともある。小正月には五、

六人で夜遊びに行き、イロリの周りでメーダマを焼き灰を落してたべた。稗のが一番美味しかった。(判形)

米をひいて米の粉を作り小正月にマイダマを作る。桑の葉の形だの蘭を半分にした形



小正月飾り (中山)
(佐藤政雄 撮影)

だの作つてボクにさす。ボク

は山つ桑の木である。ハナ菓子も一緒にボクにつける。(火の口)
マユ玉をボク(水グサ・山グワ)に刺して飾る。アワ・ヒエ・米・
マユの形を作つて刺した。多い家では一斗も二斗分も作つて飾った。
これは、二十日の風に合わせてはいけないので、二十日前には「マユ
カキ」といって、取りかたづけた。マユ玉はかびないので、お菓子上
の頃まで焼いて食べたことがあった。また、草刈りなどに行く時も、
持つて行つた。(戸室)

マユ玉をゆでた湯は、ナリコダマ(美の成る木)にかけた。(戸室)
十六メイダマ 蛹が当るようにつくる。養蚕の上手な家の桑の木を
盗んで来てこれにさした。(中山)
門松の一本には、アーボヒーポをさげ、もう一本には、十六メ
エダマをさす家もある。十六メエダマは、桑の木にさすのが普通とい
われるが、山桑、水ケサ、竹などいろいろな家がある。(本宿)
藤玉の木はオシラ様だけには、山桑のボク(木)を使うが、その他
は水ブサの木を使う。(本宿)

十六マイダマは蚕神のおしら様に上げる。(新田)

正月十三日にマユ玉を作つて、ヤマクワの枝にさし、ハナ菓子を賣つ
て吊るした。十六メイダマといって、大きくマユ形にしたり丸形にした
ものを、別の枝にさす人もいる。(火の口)
マユカキ 小正月のマユ玉は、二十日の風にあわせるな、という。
たいてい、十七日頃のいい日にもぐ。しかし、二十日の日に、お雑煮
を進せてからもぐ家もある。(五領)

固くなつた小正月のマユ玉は、いらなくなつたイジメの中にしまつ
たりする。寒い晩に、イロリのぬくとまつてある灰にくべて焼き、ふ
うふう灰を吹きながら食つたり、ほとばしておいで、ふかして食つた
りする。また、春先、ヒエのマユ玉を、腹のすいたときなど食つても
うまい。(五領)

マユ玉は持ち味で食つ方がいい。しようゆをつけて食つことはない。

できたてを食べたり、小正月に木にさして固くなつたのは、イロリの
灰の上でホド焼きにして食べた。灰をたたいて、手でもみぶして食
うと、香ばしくてうまく、おかずなどいらない。初午のマユ玉はイロ
リのワタシコの上にのせて焼いて食べる。オシラ様に供えたマユ玉を
三粒取つて置いて、秋の十月一、二日ごろ、山の口の日の干草刈りに
行く時に持つて行つて食べる。マムシに食われないという。(北の谷)
女の年取り 正月の十四日をいう。オシラミマツリともいう。この
日は早くねると白髪がふえるといって、十五日に使う小豆を煮た。小
豆は馬鹿が煮るという。火を消したりつけたりすればよい。煮えたつ
たらシワノバシといって水を入れる。(本宿)

オミタマ様 メンバに飯を盛り、ハラミ箸をそれに六せんさして、
一月十四日から十六日まで正月棚に供える。仏様は三十三年たつと神
様になつて家にくるという。(役原)

小正月の十四日にうどんを作る。オミタマ様の名は聞かない。ドン
ドン焼はする。

正月にオシラ様に供える人もいる。(北の谷)

道祖神祭

ドウロクジン ドウロクジンは兄妹で、二人ともきりょうがよすぎ
て世間を歩いてみたけれども、いい相手がないなかつたのでしまいには
兄妹で一緒になつた神様。

子供たちが学校帰り、友だち同士で馬鹿にしたりするときに、「ドウ
ロクジンのおんばかが一枚紙欲しがつてコンブで尻ぬぐつた」と大声
でいつたりした。(役原)

人別集め 子供が道路に泥縄を張つて、道行く人からさいせんをも
らつた。また、各戸を回つて、一人いくらと、人別集めをした。この
金で菓子・ミカンなどを買つて、オミゴクとして家々に配つた。(新田)
ドンドン焼き 正月十四日の朝小屋を燃す。火にあたると危よけに
なる。(五領)

正月十四日の晩はドウロクジン焼きで明治中頃までは小屋をつくつて子供たちがその前を通る人に何かおねだりをした。餅を焼いて食べると一年間無病息災でいられる。半紙に習字してもすと高くあがれば手があがるといった。このとき厄年の人はミカンなどを配り、厄を他人にしょつてもらう。(彼原)

ドンドン焼きには職玉を持って行って焼いて食べた。団子のとりくらもした。松のもえた節のところには半紙に包んで大神宮様に飾つた。魔よけになる。(役原)

道祖神焼きは一月十四日。子どもたちが主になつてお飾りの松を村の道祖神の前で焼いた。以前はアケグラの木などを組んで小屋を作り、十三日の夜おこもりをした。この時、よその者が竹槍などを持って小屋をこわしに来た。道祖神をオッカド(ヌルデ)で作り火にくべた。道祖神焼きの消えた木を家の屋根の上に投げると火伏せになるとわれている。(戸室)

お正月のお松をよせて、一月十四日の朝もやした。

お正月のお松をよせて官地に三角錐の小屋をつくつた。これをドンドンヤキの小屋とか、ドウロクジン小屋といった。この中に子供が泊つて、朝になると小屋に火をつけた。ムラの人々は、個人個人で、そこへおまいりに行く。マユダマをあげたり、おさこやおさいせんをあげたりした。ドンドンヤキのけむりに

習字の用紙を持って行ってもやした。このとき、紙が火の勢いでふきあげられるが、紙があがると手があがる(上達すること)といわれた。ドンドンヤキのときに、年男年女(厄年のもの)がミカンなどを投げた。(中山字梅沢)

道祖神まつりのことは、ドンドンヤキといいう。大正月のおかざりは七日にはず家が多い。十二日にとる家もある。

お松・おかざりは、とりはずすとすぐに、子供たちが集めに来た。おかざりなどは、道祖神様のところに集めておいた。

道祖神小屋(ドウロクジンゴヤともい)は、道祖神様のところにつくる。円錐状の小屋で、小学生(小3以上)と中学生がつくる。本の心棒を山から切つて来て、お松類をまわりにかぎりつけた。

小屋に火をつけるのは、一月十四日の朝方。小屋に火をつけるころになると、ムラの人たちが集つてくる。小正月のマイ玉と餅もつて来て、ドンドンヤキの火でやいた。この火でやいた餅を食べると、風邪をひかないといつた。

なお、厄年の者は、ドンドンヤキの場所で、酒とか菓子をあつまつた人においてやつた。(中山字原)

道祖神人形オッカドの木を削つて、男女の人形を作る。墨で目鼻を書く。道祖神焼の火の中に投げ込んで燃す。皮をむいたのと、むかないのでとをする。十四日朝焼くのに間に合うように作る。

焼いた炭を拾つて来て、屋根の上に上げて供えると、家族が病気にならないといいう。(北の谷)

道祖神には男女の像を作つて、ドンドン焼きに持つて行って焼いた。道祖神の松小屋は子供が七草過ぎると、各家の門松を集めて作つた。

鳥追いはしなかつた。(火の口)

鳥追いは西群馬郡の方が盛んで、ここでは太鼓もたたかない。(新田)

ヨメゴバタキ ムラの子供たちが一升の水を樽につめてヨメの家に持つていく。新しいヨメをもつた家では子供たちをエンガワからあげて客間にとおし、上座にすわらせ、ヨメが接待をした。子供たちはオッカドでつくった男根と、薬ストッコの中にヒシコ(お頭つきの干し魚)を入れた女陰を膳にのせて主人にわたす。子供たちは夕飯をこちそうになつて帰る。古いころにはヨメの尻をたたいた。これはドン

ドン焼きの晩(役原)

十五日ガユ

小豆ガユ 十五日に小豆を煮てアズキガユを作り、さまでしてからラミバシで食べる。熱いのを吹いて食うと田植えに風が吹くので、吹いて食うなという。

小豆ガユはケエカキ棒でかき回してから、ケエカキ棒を取つて置き、あとで苗間のかけ口に立つてごみ除けにする。ケエカキ棒はヌルデノ木の本を十文字に割り、餅をはさむ。（北之谷）

小正月、十六日朝の小豆ガユを吹いて食べると、田植の日に風が吹くといって忌む。（五領）

十五日のガユは吹いて食べてはいけない。たねまきの時、風が吹いてたねがまけなくなるという。（戸室）

小豆カユを一月十五日に作る。オッカド（ヌルデ）の木の上部に十文字にきぎみを作り、これに餅をはさんだ棒でカユをかきまわす。この棒をカユカキ棒という。済んだら神棚に上げておき、田植え前になつて、田圃の水口にさしておく。（戸室）

一月十五日の朝、小豆ガユをにして神様に供える。そのあと、うちの者が食べるが、それをふいて食べると、田植のとき風が吹くといつた。（この日は、朝早く起きて、ふかないでもたべられるようにしろといわれた。かつて、エエダウエをしたが、田植のとき、風が吹くと、おめえのうちは、十五日のかゆをふいて食べたからだといわれた（中山原）。

とりのくち 白米を煎つてさとうつるべにして、紙に包んで田んばへ持つて行き、カイカキ棒の上に供えた。（新田）

千匹ガユ（一月十六日と盆月十六日）

ヒエ・豆 ヒエ・豆を煮てワラツツコに入れて三本辻に出し、動物の供養にした。一本の家もあれば、月の数だけ一一、三本出す家もある。十六日にはカイバ桶を洗つてきれいにして、馬にえさをくれた。（新田）

千匹がいは正月十六日、ヒエと少しの豆を入れて煮たものをツツコに入れて上げる。

コに入れる年には板の上に十三カ所置く。

十六日にはかいば桶を洗つてやる。（新田）

無縫の家畜を供養してやる日。（新田）

千匹ガユは正月十六日と盆の十六日に、稗と麦と大豆を煮て、藁づとに入れて三本辻に送り出した。馬の供養だと言い、馬を飼っている家で行なう。（利形）

馬のえさ 一月十六日に、ヒエを煮て、わらのツツコに入れて、

馬の料として、観音様にあげた。（中山原）

十王様 正月の十六日と盆の十六日の日に十王様に供えものをする。正月十六日は仏だんに、茶わんにめしを盛つて、それに箸八本を差して供える。盆の十六日には、きょうばし（さんだわらの意）の上に灰を盛つて辻又は門の四つがど（すみ）に供える。（五浦）

オミタマ様 正月十六日、八本箸をさす。（五領）

十八日

十八ガユ 十五日ガユの余りを利用して、小豆ガユを食べる。（新田）

正月十八日には十八粥をつくり、ナリコダマ（実のなる木のこと）に粥をかけたり、ゆで湯をかけた。（役原）

一月十五日に煮たかゆを、十八日あつめためで、うちの神棚にあげたり、うちのものが食べたりした。これを十八ゲエ（かゆ）といった。

（中山原）

観音堂 正月十九日に馬を連れて馬頭観音を拝んだ。（新田）

一月十八日は危除けとして大塚の観音様にお参りした。馬の好きな人は馬に乗つて行った。この日アズキ飯を作る。また危除けのお札を受けた。（戸室）

一月十九日には、馬頭観音に、ウマノワラグツを二つと、

馬頭観音

「ちそうをつくつてあげた。(中山の梅沢)

二十一日



エビス講（中山）
（佐藤政雄撮影）

シマイ正月 正月のしまいは一月二十日である。一月二十八日をシマイ正月とはいわない。しかし、「二十八日だ、尻まくりの『用心』」といつて子供が遊んだ。(新田)

二十日正月と恵比須講、二十日にはお粥をおろして、正月はこれで終わりになる。この日は、朝げが難煮で、夜はお恵比須講なのでケンチヨン汁をつくる。特別な餅はつかない。(五領)

マユカキ 一月二十日にマユ玉をはずして置き、春先に焼いて間食にする。(新田)
エビス講 一月二十日はマイダマをかく日。マイダマをかいて収穫をすまして夜エビス講をする。白いごはんを山盛りにして豆腐汁、お頭つきにマスクタイをそえ二膳作る。エビス膳は木目をタテにして供える。お金も上げる。下げる時お金で買うという。上げたものは縁遠くなるから出世前の子には食べさせない。親が少しとて食べててくれる。

のものにやるな、やると縁遠くなる。(新田)

エビス講は一月二十日、家にある金をありつけ出してエビス膳に入れる。働きに行くのである。十一月二十日かせぎから帰ってくる。

二十歳過ぎの人をエビス講が過ぎたという。(五領)
エビス様は正月にかせぎに出かけて、年末に帰ってくるという。(関

田)

一月二十日はエビス様の朝祝いといって、この日、朝早く起きてイワシ、テンブランなどをエビス様にそなえる。また財産がふえるように、マスの中に金を入れてそなえる。マスの口は西に向けてはいけないとわれている。また、そなえものは未婚の人に最初にくればならぬ。縁が遠くなるといわれている。だから他の人が少しでも箸をつけようにやる。(戸室)

二月

一 日

二郎の一日
いわない。(北之谷)

卯の日待ち 春の筋分が過ぎて初卯日の前夜、寅の晩の宵待ちにしたが、二月一日になつた。秋は農作業が終つて、ハバキヌギをする十一月初卯日の日だつたが、十二月一日になつた。宿に集まつて米の飯を病に山のようになつたが、十二月一日になつた。宿に集まつて米の飯を病に山のようになつて、無理に責めて食わせオオマクライ(大食い)をして、お日待しながら起きていて、ジッケッコウ(くじ)をして時間をつぶした。火伏せ・火災除けにお天狗様を祭る行事で、ヒノエやカノエを嫌い、日を飛ばした。(北之谷)

エビス様に供えたものは独身来る日。

節 分

(戸室)

八 日

豆まき 節分の豆まきを、坐つてまく家例がある。(北之谷)
節分の豆 自分の年令だけ食べる。また、その豆を圍炉裏で焼いて、天気占いをする。十二個の豆を焼くが、白く焼けると天気、黒色は天気が悪い、半分黒いのは半晴れという訳で、その結果を紙に書いて貼つておいた。(本宿)

ほうろくに豆を入れて、豆木を燃していり、豆木でかき回す。(新田)
節分の豆は紙に包んで、イロリのかき竹のところへつるしておいた。

夕立が来たときこれを食べる。豆まきの時、投げた豆は自分の年の数だけ拾つて食べろといわれている。(戸室)

天気占い 節分の晩に、豆をイロリに十二粒(十一カ月に割当てること)ならべて、大豆のはね具合で、それぞれの月の天気のよしやしを判断した。大豆がはねるとその月はよい天気だとし、はねないとその月は天気がよくないといった。

それは、各家庭で行ったもの(中山山原)

ヤキカガシ 節分に、豆の木の二股に、イワシの頭を二つさし、ユルリ(圓が裏)で焼き、「作り耕作の四十二色の虫の口を焼く」とか、「万の作物の虫の口を焼き申す」とか唱えて、トウトウとつばをはきかける。(本宿)

豆木の枝にイワシの頭をさして、「農作物ノ虫ノ口焼き」「ヨロズ虫ノ口焼き」といって、ペベツツバをかけた。入口にさして置き魔除けにする。(新田)

ホウロクで節分の豆をいる。イワシの頭をマメギにさして火のそばであぶり、「つくりこなさく四十二色の虫の口を焼きとめる」と唱えつぱをひっかける。これをヤッカガシといい、トボにさした。(戸室)
ヤッカガシにイワシの頭を焼くとき、つぎのようによく唱える。「作り耕作、四十二色の虫の口をやきとばす」といってツバをはきかける。

オコト 春のオコト(オコトハジメ)と秋のオコト(コトジメ)がある。春は二月八日、秋は十一月八日である。オコトボタモチといい、ボタモチを作つて食べた。春のオコトには、一つマナコが来るからというので、メケエ(カゴ)をケイド(街道)に出しておいた。目のうんとあるものを出しておけばよい。晚だから早く出せと親に言われたのを覚えている。この日は針供養の日でもあり、針を使わなかつた。(本宿)

コトハジメは二月八日、春のオコトには、細くて長いものをこしらえて食う。(五領)

コトハジメは二月八日、長く続くようにとウドン、ソバを作り神様に進ぜる。コトジマイは十二月八日、丸くおさまるようにとボタモチを進ぜる。両日共オコトバアがくるので、目の沢山あるものをトボグチに出しておく。するとたまげて来ない。この日ヒツマナクのものがくるという。(判形)

針供養 二月八日は、針供養だが、いくらかお針子でも持っている

ものでもなければ、気にとめない(五領)

初 午

初午 一月の初午の日(現在は二月十一日にきめている)には、個人の家では、赤飯を炊いたり、米の粉でやきもちをつくったり、まゆ玉をつくって神棚に供えた。まゆ玉は、一升ますにわらを折つて、そのあいだにはさんで供えた。これは、一年間、まゆが上等に出来るようになることであった。

ムラでは、金甲稻荷の祭りが行われる。同盟会の幹事と、青年団の幹事が各戸をまわって、もち米（三合から一升まで）と小豆（これは、一、二軒の家からもらう）をもらって役員の家で、赤飯をいたた。これを、当日の朝、おまいりに来た人にくばつた。これをせつたい（接待）といった。

おまいりに来た人は、ビヤッコサマをかりていって、翌年おまいりに来るときには、二つにしてかえした。これは、神棚のすみにあげておいた。（中山宇原）

二月の初午の日には、屋敷の稻荷様をまつる。稻荷様はかいこの神様。今は二月十一日にはまつっている。原の稻荷様の祭りもこの日、赤飯をあげて行った。ビヤッコをかりて来て、翌年二つにしてかえした。（中山宇梅沢）

屋敷稻荷（二月初午と十二月の稻荷祭りに祭る。お仮屋だつたが、最近は石宮になつた。赤飯・マユ玉・ヤキ餅・魚などを供える。赤飯は紙に包んでオヒネリにしたり、竹の皮にのせたりして供える。マユ玉は二、五個くらいを供えるが、あとで下げる食べる。食べる時は何もつけないか、砂糖をつけるかして食べ、しょうゆはつけない。ヤキ餅は二個、米・ヒエ・トウモロコシなどで作る。ウルチ米の粉をこねて、小豆あんこ入りに作りゆでる。あとで固くなると、焼いて食べる。マユ玉は米の粉で、殻が当たるようによく形のものも作つて、ザルに入れて神前に供える家もある。（北之谷）

十五日

涅槃会（二月十五日はお釈迦様のなくなつた日として、寺で涅槃会の行事を行つてある。この日、寺ではヤシヨウマをつくつて、おまいりに来た子供などにやつてある。ヤシヨウマは米の粉を湯でこねて、色をつけて輪切りにしたり、まるめたりしてつくつたもの。

ヤシヨウマを巾着に入れて腰にさげておくと、風邪をひかないといつた。

いた。

ヤシヨウマについては、お釈迦様が臨終のとき、ヤシヨという弟子にそれをつくつてもらつて食べたら、うまかったので、「ヤシヨうまかった」といつたので、ヤシヨウマというようになつたといわれている。（尻高）

二月十五日は、お釈迦様のおなくなりになつた日だが、この日、お寺では、米の粉に食紅を入れたヤシヨンマという小さなマユ玉を投げた。（五領）

ねはんさんのところ、（二月十五日）、熊野の泉竜寺でヤシヨウマを作り、米の粉にこまを入れてこねて細長い円筒形にしてふかす。薄く切つて食べる。（北之谷）

二十四日

天神様 天神待ちは、子どもの祭りで、春秋二回あつて、それぞれ二月二十四日、十二月二十四日である。同級生の組、補習にてぐる組、年齢に関係ない組などがあつた。組内で順次に宿を決めて、野菜などを持ち寄つて、宿になつたものの母親に料理をつくつてもらう。醤油飯がごちそうだった。太鼓をたいたりして愉快やつた。現在は、神主さんを呼んで拌んでもらつてある。（五領）

三月

三月節供

三月節供 ひな人形は沼田か中之条へ貰つた。中之条へ行くことはすくなく、ふつうは沼田へ貰つた。時期は二月の末ごろ。店にかざつて売つていた。これを主として初節供を迎える家庭へ贈つた。

この辺では、ひな人形はうちの子にはほとんど買つてやらなかつた。懸念な人と、近親者、組内の人など、初節供のときには買つてくれた。むかしは、生まれた子どもにはどの子にもひな人形を贈つてくれたが、最近では、新生活運動によつて、男女とも初子だけに贈るようになつてきつた。

ひな人形は、大正時代ごろまではすわりびなであつたが、昭和にはいつてからは、箱入りのひなになつた。

ひな人形を贈つてくれた家には、おかえしとして、もとほ紅白の餅を菱形に切つてかさねにしてやつた。最近はさくら餅とか、菓子折をおかえしとしてやるようになつてゐる。

三月節供は、もとは旧暦であつたが、おはえて（明治の末ごろから）新の三月に行つてゐる。ひな人形は、ひな段にかざつた。ひな人形をかざるのは三月一日。

ひな人形に供えるものは、ひし餅（いねいな家庭では紅白、ふつうは白だけ、明治の末ごろには、花餅をつくつてあげた。花の型があつて、うるち米の粉でつくつた。食紅で色つけをした）、菓子類、煮（ゴボウ、ニンジン、大根、イモなど）、花（梅とかアサツキなど）などを。餅は、一日について、二日につきたりあげたりした。

三日のご馳走は、朝がアベカラ。これをつくつてひな様にあげたり、うちのものが食べたりした。昼はとくにきまりがなく、夜はうどんとかそばをつくつた。

八日がしまいの節供で、あさげになにかしらえて、ひな様に供えてから、ひな人形をしまつた。「馳走はとくにきまりはない。白飯などをつくつてあげた。（中山字新田）

嫁の里帰り 三月三日に、嫁は婿と一緒に里帰りをする。このとき、せんの餅を一枚（かさねて半紙をあててわらでしばつた。これにこんぶをはさんだ。一枚が一升分）持つて行つた。

親のあるうちは、三月の節供には里へお客様に行くものだとされてい

る。このとき、二晩ぐらい泊つて來た。（中山字新田）

おひな様は、売りに来たのを買つたり、近くのひな市に買つて行つたりした。尻高の火の口というところに、山田善さんという人がいて、この人が人形をつくつていた。この人のつくる人形のことを、善さん人形とよんでいた。二月のはじめごろから、ひな様をかざるころまで、各戸をまわつて売つてあるいた。大正時代のころのことである。ひな市は沼田、中之条、渋川にたつた。ここからは、中之条へ買つて行く人はすくなく、沼田か渋川へ買つて行つた。

初節供のうちには、親類縁者からひな人形を贈つてやつた。二月のなかばごろには贈つた。嫁の里からは、初節供には、今では段びなか贈られる。初節供をむかえる嫁には、もらい方で高砂を買つてある。おひな様は（箱の中から）出たがつてゐるといつた。おひな様をかざるのは早いほうがいいといふ。二月の末にはかざる。おひな様をしまうのも、早いほうがいいといふ。五日ころにはしまう場合もある。遠くまでかざつておくと、女の子は結婚がおくれると云つた。古くなつたおひな様は、屋敷の稻荷様とか、神社へおさめた。

ひな様をだし飾つたときには、お菓子とかお茶をしんぜる程度。三日には、ご馳走をつくつて供える。三日の朝には、アベカラをつくつてあげたり、うちのものが食べたりした。餅は二日のうちにつくのがふつう。菱餅をつくつて、おひな様に供えておく。おそなえひとかさねつくり、その上にひしもちをのせて供える。大・中・小それぞれ四枚ずつ。

ひるはすしをしらえてあげる。夕飯にはうどんをしらえてあげる。

四日にはとくべつのご馳走はない。五日には、おひな様をしまう前に、なにかご馳走をつくつてあげた。

嫁さんは、三日にせんのもちをもつて里へお客様に行つた。餅は二枚

もって行く。お金も持つていった。包み紙に「節供」とかいてもっていく人もあつた。餅は、一枚が米一升分ぐらい。節供のときは、里の親たちが丈夫なうちは嫁は行くものだといわれている。一晩か二晩泊つてきた。三月八日がしまいぜくになる。この日はすしでもつくつて祝う程度。

なお、むかし、三月節供のとき、近所の子供があつまつて、外でひなまつりの真似をして遊んだ。木の葉をつかって餅をきる真似をしたり、すしとかもちをもちだして、外で食べたりした。(尻高字閑田)

ヒナ送り 古いヒナは十二様を持って行って捨てた。(戸室)

彼 岸

彼岸 彼岸には、春秋とも同じような行事をする。「くされ彼岸が七日ある」という。

彼岸の最初の日のことを、いりくちという。四日目を中日、七日目

彼岸のうちかならずばたもちをつくる。中日にはたいがいの家ではたもちをつくる。あき口にもつくる。彼岸のうち、暮まいりをする。たんごをつくつてあげて来る。本家とか新宅のあいだがら、あるいは兄弟のあいだで、暮参りに行き来る。

なお、彼岸のうちに社日のある。そのために、社日と彼岸とをこみにして、ばたもちをつくる。これを社日ばたもちという。(中山字新田)

彼岸の墓まいり 家からよそへ行つてゐる子どもは、親がなくなつてゐる場合には、彼岸のときには墓まいりに来る。このとき仏様に供えそめん、ろうそく、お茶葉子などを持つて来る。(中山字新田) 彼岸の入りには、朝ばたもちをつくる、仏様にあげる。中日にも

同じ。彼岸の最後の日のことは、しめえぐちとか、しめえびがんといふ。この日にもばたもちをつくる。この日、うち中のものがそろつて墓まいりをする。よそへ出でるものも帰つてきて墓まいりをする。線香・水・花・だんご・ばたもちをもつていく。

新しい仏様がでた場合には、あらひがんといって、近所の人とか、親戚の人などが、彼岸のあいだに墓まいりに来ててくれる。このとき、小麦粉とか、うどんを二把とか、お金を持つて来てくれる。(尻高字閑田)

そ の 他

社日 地神様は百姓の神だから、初物をあげるという。社日に種まきをするのはよい。虫が食わねえという。社日に人を埋けると、近所に災がある。(本宿)

十二講 三月十一日の晩から十二日にかけて、十二様のまつりをした。

宿はまわりばん、もち米を五合(それがふつう)とか一升ずつあつて、もちをついた。もちは両親のそろつているもののがついた。このもちは、一夜餅はよくないとして、十日の晩についた。もちはきりもちにして、十二様のお宮(石宮)のところへもつてつて投げた。十二日の晩間、神主をたのんでおかんでもらつてからもちなげをした。現在は十二日の晩間だけの行事となつていて、現参加者は閑田の中の上組の男だけ。二十軒ほどの家のものが参加。

十二様は山の神様という。前は、二月十一日が契約で、そのあと(よく月)十二講となつていて、参加者が同じなので、今は十二講の宿で契約を兼ねた行事としている。(尻高字閑田)

駒形の觀音様 旧三月十日、七月十日、十月十日は新治村の駒形の觀音様のまつりだった。馬を連れて行き、帰りにクマザサを取つて来

て、馬が病氣のとき食べさせた。(新田)

不動様 三月二十八日、北之谷稲荷の裏の不動堂を祭る。稲荷様を拝んで、オミクジを引いて景品を分ける。(景品は出し合つたものでせつけん・ほつきなど)。(北之谷)

四 月

春祭り 中山神社の祭りは四月一日に行なう。氏子五〇〇戸で三月三十日に道がりをしてのぼりを建てる。祭りの日太々神樂を本宿と権現の人々が踊る。赤飯、うどんをつくる。(新田)

三島神社の祭りは四月十五日、静岡の三島からもつて来たものである。(新田)

四月一日が中山神社、四月十五日が三島神社の祭典。

中山はこの二つの神社の二重氏子の形をとつてゐる。

中山神社のことは明神様といい、旧社格は村社。美濃の一の宮から勧請した神社という。祭神は金山彦。四月一日には式典のあと、太々神樂の奉納がある。

三島神社は旧社格は無格社。山の神、交通の神として信仰されてゐる。(中山字新田)

諏訪神社の春祭りは四月十五日。

この日は特別の行事はない。(尻高字閑田)

花まつり 四月八日には、寺では、本堂にお萩迦様をかざつて、子供たちに甘茶を飲ませた。

四月八日はお萩迦様の生まれた日という。(中山字新田)

中之条の安市 四月十六日は中之条町の安市。この辺の人も、「二へ種物、苗木、花などを買ひに行く。(尻高字閑田)

城明神 城明神は中山城を守る神。四月十九日に赤飯をつくる。(新田)

五月夜 八十八夜のはじめ。「八十八夜のわかれ霜」というが、この邊では、八十八夜すぎでも、霜はよくふつた。八十八夜には、特別の行事はない。九十九夜についても、特別の行事はない。(中山字新田)

八十八夜に霜よけとして、ばたもちをこしらえて祝う家がある。ここでは、九十九夜の行事はない。(中山字新田)

五 月 節 句

五月節供 のぼりなどの飾り物は、初節供の場合には四月のなかば頃から飾りはじめる。初節供の場合には、親元からは吹きながし(嫁方ともらい方と双方の紋をつけた)嫁方の紋を下側に、もらい方の紋を上につける)を贈つてくれる。近い親戚とか近所の人たちはのぼりを贈つてくれる。近所の人たちは、むかしは鉢々で贈つてくれたが、最近では、近所の人がお金を出しあつて、まとめていいものを贈つてくれるようになつた。このおかえしとしては、かしわ餅を、五日くばる。

ふつうの節供の場合には、五月一日か二日ころにのぼりをたてる。旗じまいは、雨でも降ると早くしまうが、ふつうの場合には、五月八日をしまい節供といつて、この日にもしまうようにしてゐる。しまい節供には、うどんとかそばをつくりて祝つた。

節供のときの贈り物は、長男長女を中心とした。

五月の節供のときの供え物は、赤飯とか餅である。餅はあんびんにしたり、切り餅にしたりした。この日の家族の「走は」特別にきまつたものはないが、米の飯とかうどんをつくり、煮めをつくつた。

五月の節供のときには、風呂の中にショウブを入れて、ショウブ湯

をたてて入った。

旧五月五日には、軒下にヨモギ、ショウブをさした。

五月の節供のときには、嫁は婿と一緒に里帰りをする。赤飯とか酒を持っていった。はじめのうちは婿と一緒に行った。子供でも大きくなると、代りに子供をやるようになり、嫁は行くことがすくなくなる。

このときは、一晩か二晩泊つて来た。里が近い場合には、日帰りにする者もあつた。(中山字原)

初節供のときには、四月末からのはりを立てる。ふつうは五月一日ごろに立てる。のはり竿を倒すのは五月八日、この日をおしまいぜつとかしめぜつくといふ。

初節供のときには、近所の人たち、本家・新宅、近親者(おじ・おば)、嫁の実家からのはりなどが贈られた。昭和八年のときにはまだのほりだけで、吹きながしは贈られなかつた。のはりだけ贈られたので、木綿の「ち」を買ってうちでつけて立てた。庭のはりの枠を組んで立てた。

五月の節供のときのご馳走は、赤飯とかうどん。

お祝いをもらった家には、五月に入ると、かわ餅をおかえしとしてくばつた。これをのはりがえしといつた。

四日の晩のことを宵節供といった。このとき、ヨモギ、ショウブをとってきて、トボロのところ、星敷稻荷様、神棚などにさした。主人がさすのがふつう。魔除けのためといふ。このことを屋根ふきといつた。また、この晩、ショウブ湯をあわねて(小さく束ねて)風呂の中に入れて、ショウブ湯をたてて入った。これも魔除けのためといふ。主人から順に入つた。

五日には、嫁は里帰りをした。この日は五節供の一つとして、節供礼とて行つたもの。赤飯を持って行つた。泊つて来る場合もあつたし、日帰りの場合もあつた。婿も一緒に行つた。親のあるうちは行くものであるといわれている。(中山字新田)

初孫の場合は、のはり立ては早いほどいいといわれ、四月のうちに立てた。初に立てるときは、隣組の人たちが手伝いに行つた。このときは、お祝いとして、お金とか、こいのはりの小さいものなどを持つて行つた。施主は赤飯とかそばなどをつくつてもなした。のはりをしまうのは、五月八日、この日のことを、しめえぜつくといつた。

初節供のときには、おじ、おば、嫁の実家、きょうだいなどがのぼりなどの贈り物をした。昭和のはじめのころまでは吹きながしはなく、のはりを贈つてくれた。

餅は草餅をつくつた。贈り物をしてくれた家には、かわ餅をくばつた。赤飯をやつたこともあつた。このおかえしとして、重箱に大豆をいれてよこした。めめになるようにといふことであつた。

ヨモギ、ショウブを四日の宵(晩)に(宵節供といふ)、おもて側の二階の屋根(軒下)にさした。ヨモギ、ショウブとも一本ずつ、三ヵ所にさした。そのほか、星敷稻荷とか、神棚、仏壇、おそうせんさま、

かまがみさまのところにも一緒にさした。なにごともないようになると、つづつ風呂の中に入れた。そのやまいにならないようにとショウブ湯をつくつて飲む家もある。

五月の節供には、嫁が里帰りをした。赤飯を持って婿と一緒に里へお客を行つた。ほかに「節供」と書いて、お金も持つて行つた。一晩か二晩は泊つてきた。親のところへ行くもの。親が丈夫なうちは行くものだといわれている。

五日のご馳走は、朝が赤飯、昼も同じ。夕飯はうどんかそば。(尻高字閑田)

藤を飾ること 旧五月五日に、山から藤の花をとってきて軒端(とば口のところ)に桶を置いてその中に入れてかざつた。藤の花をとつてくるのは、おもにうちのとしよりの人。

この藤の花は、八日までかざつておいた。なんのためにかざつたのはわからぬ。(尻高字関田)

ヨモギとショウブ 旧五月四日の夕方にショウブとヨモギを軒下に三ヵ所さした。

また、この晩、夏、病いにかかるないとか、夏うち、元気に働けるという。(中山字原)

六月

六月朔日

きぬをぬぐ 六月一日は衣をぬぐ(衣がえ)といふ。正月のお棚の藪玉をメンバに入れて取つて置いたのを、じり焼きにして食べる。前日に水にほとばしておき、油を敷いて炒る。その際、粉を入れるとしつかりするが、水を切つて、粉を入れないで焼く方がうまい。

この日には、青草刈りをする。水っぽいマサアキや、その他セニイの少ない草を刈つてきて、押切りで切つて、堆肥にする。ヒエ、アワ、ソバ、キビの肥料には、これが一番よい。馬の堆肥では駄目である。

(本宿)

六月一日、お棚のめんぱにあげておいた藪玉を、前の晩ほとばしてやわらかくなつたのを、水を切つて、油を引いて、じり焼にして食べる。キヌヲヌクなどといふ。(本宿)

水もち 旧六月一日を水もちと言つた。昔富士から水を持ってきて公方様に差上げた。正月におそなえを凍らせてとつといたのを焼いて食べさせられた。(新田)

水餅は旧六月一日、昔、幕府に水を献上した日だという。お供え餅の残り物を水にひやかして、ほうろくでやいて食べた。(新田)

旧六月一日に水餅をして食べた。

六月一日に二度年取りはしない。(北之谷)

八丁ジメ この辺(中山)ではやらない。(本宿)

風神祭の祭 この辺(中山)ではしない。(本宿)

テンキマツリ このころ、雨ばかり降つてしまつて年寄が言い出しへ区長がフレを出す。神主を頼んで浅間神社で拜んでもらい赤飯をしんぜた。(役原)

七月

マンガ洗い 酒をマンガにかけてやる。田植えのものはよく洗わないと田づかれする。(五領)

半夏生 半夏生には何もない。(五領)

七夕

七夕 七夕には、七回水をあびて、七回飯をくう。女の人はこの日には髪を洗うといふ。また、洗濯物の汚れもよく落ちるといふ。里芋の葉の水をとつてきて、墨をすり、手習いをすると手があがるという。

七夕の竹は、川に流す人もいたが、そのまま大根畑に立てておく人

むかし、この日、公方様(將軍様)に水を獻上するならわしがあった。民間では、それにもんで、水餅をつくつて食べたといふ。

水餅は、正月のおそなえ餅をとつておいて、六月一日にはうろくでやいて食べたものである。(中山字新田)
キヌヲギツイタチは六月一日で、蛇がキヌ(から)をぬいで、イツチヨウメエ(一人前)になれる日だから、人間も一人前になれという。正月のお供え餅を水の餅にして、取つて置いたものを、水にほとばして、ほろぼろになつたものを、ほうろくの上で固めて食べる。マムシにかじられない匂いになる。(北之谷)

も多かった。そうすると虫がつかないという。(本宿)

七夕は七月七日、七回飯を食つて七回水をあびる。清掃をする日、

井戸がえ。(新田)

井戸がえ、七夕には井戸がえをした。その井戸を使つ人が出でする。

石垣を洗つて水をかい出す。

用水の掃除も村中出でする。(新田)

七夕には朝仕事に井戸替したり、用水の掃除も村中の者が出てやつた。

井戸は大家にしなくて、六、七軒で使用した。井戸替は呼パワ

リをして人寄せをしてやつた。(新田)

七夕飾り、盆中の七日にやる。短冊の字は、子どもに字が上手にな

るからといって書かせる。サトイモの葉にたまたま朝露で墨をするとい

うのは、よほどかたい家でないとやらぬ。近ごろはセットでき

あがつたものを飾つたり、折り込みの広告で網を切つたりする。

七夕の日には、十時前に井戸替えをすれば火をみないとか、洗濯す

ればどんな汚れもおちるとかいって、真っ黒になつたトウスミを夢中

になつて洗つたりした。飾りは、この日の夕方、五領川に流したり、

ダイコンやハクサイの烟にさす。(五領)

七夕飾りはササの葉に短冊をつるす。済むと川に流す。大根の烟に

虫よけとして刺す家もある。

七夕の日は、七回飯を食つて七回水あびをするといわれた。

また髪の毛を洗うとよく汚れが落ちる。(関田)

七夕は八月七日で、朝、墓掃除をする。七日火は焚かない。

六日の夕方、シンコ竹に短冊、色紙などを飾り付ける。七日に軒下の柱に飾る。広田マケは七夕飾りをしない家例である。七夕飾りには木の枝を取つて、大根畠に立てる。虫が食わぬといふ。(マンジュウやうどんなどをつくり、「七回食つて七回水浴びろ」という。(熊野))

むかし、七夕のときに、水浴びを七回して、飯を七回食えといった。(中山字原)

七夕は七回食つて七回浴びろつて水あびをした。

七夕には水で髪を洗つてもよく落ちる。(熊野)

七夕には、竹でおかざりをつくつた。色紙に字を書いてさげた。「天の川」などと書いた。このおかざりを、七夕のおかざりという。おかざりは、七夕の前の晩に、縁側の中柱のところに立てた。

七夕の日には、七度食つて、七度水をあびろといわれた。子供はこの日、水あびをした。

七夕の日のご馳走はうどん。

七夕の日には、フロウはたけに入るなどと、前日にフロウはとつて来ておいた。その理由は、七夕の日に、七夕様がフロウはとつてからだだといった。

七夕の日に三粒雨が降ると、天の川があふれて七夕様が会えなくな

るという。雨が降らないと七夕様は会えるといつた。七夕様が会うと

その年は陽気が悪いといふ。

なお、七夕の短冊には、「七夕やあかのわかれの涙かや」というのを

きまつて書いた。

七夕のおかざりは、むかしは川へ流したが、最近は田へかかるのか

わりに立てるようになった。(中山字原)

大根を八月七日頃まくと虫がつかないといわれた。(関田)

土用

土用のかわりもの 土用には、土用もちをついたり、土用ばたもちをつくつた。現在つくづくする家はほとんどない。(五領)

土用干し 梅干しは、土用に干すと上手に仕上がる。古い国語の教科書に「二月三月花盛り、五月六月実がなれば、枝からふるい落され

て、七月八月暑い盛りに三日三晩の土用干し」という歌がのつていた。

近ごろは梅干しをつける家もその量も少なくなつた。(五領)

土用には昔の人は丑湯といつて、温泉に湯入りに出かけた。女衆は土用干しで、着物をたんすから出して家中の中に干した。

土用三ツメに薬草取りをした。モチ草・ハコベ・ゼニツル・ドクダミ・ゲンノショウコなどを取つて、干して置く。

土用餅といって、おはぎを作る。(熊野)

紙園

紙園寄り 七月の十日までぐらに、区中の若い衆の意向を聞いて、神輿や屋台を廻した方がいいかどうかを決めた。(本宿)

中山では、ブラックによつて紙園の日をちがえている。

原と本宿が七月二十三日。

五領が七月二十四日。

新田は七月二十五日。

判刑は八月一日。

紙園の翌日のことを、紙園がらといつて。(中山)

紙園祭り 七月二十五日に行なう。正月の四日のケイヤク日(若い衆七人が役員になり、十日前から準備にとりかかる)ケイヤク日は今は

三月末。二十四日にオカリヤを作り、祭りの日は、昼間は子どもも神輿が出る。夕方から天王様が出、上から一軒一軒左めぐりで回り、次年

度は下から一軒一軒回る。神輿は明治八年西南の役で西郷隆盛が逆そくであるとの接札が残つており、この時つくられた。提燈は三十、太鼓二(大・小)で先頭を神主が清め歩いた。カサボコが新田の上、中、下に建てられ、今年とれたきゅうり、ナスなどをオカリヤに供えた。各家では赤飯、うどんをつくりた。原・五領・本宿などからも來た。

(新田)

ぎおんには八坂神社をまつる。稻の穂の早生を取つて来て供える。まだ出ないときは株を持って来て割つて穂を見つけて供える。(新田)

紙園祭りは七月二十三日に共和會の人々が中心になりカサボコを二つ作り、提燈は四十くらい沼田の伏見屋から貰つて来た。半月前から準備を始める。祭りは二十四日で昼間子ども神輿が出、夕方から八坂神社の紙園祭りになる。西五領と東五領と一年交替で神輿は回る。カサボコの花はとつておいて家のなげしにひつかけておく。判形(新田からも祭りに来た)。(五領)

紙園祭りは八月一日で、八坂神社の祭礼が行なわれる。

神輿を出して村の若い衆がかづぎまわる。昔は村中の家を一軒一軒かづいで廻つたから、ひと晩中かづいた。翌日はドウギョウバライで、酒肴で一杯やる。祭費は世話人が奉賀帳を持って、各戸をまわり、寄付をつくる。

祭費が余ると、ソウケンの通常会の予算にくり入れる。(判形)

八坂神社は八月一日に紙園祭りで、笠ボコを二個作り、行灯も飾つて祭る。若い衆が集まつて酒を飲む。神官は役原から来る。(火の口)

昼夜紙園 八月一日は紙園だが戸室では昼夜紙園で何もしない。中之条へ行く。(戸室)

中之条の紙園にみな行ってしまうので、当地では「ひるねぎおん」といつて。(閑田)

諏訪様の祭り 四月二十七日と七月二十七日が諏訪様の祭り。

七月二十七日には、カヤの箸をめしをくくといわれてゐる。

諏訪様の祭りの前に、山へ行って弁当を食べるときに、カヤの箸で食つてはいけないといつた。

祭りをすぎれば、カヤの箸をつくつて食べてもよいといつた。(中山字梅沢)

八月 盆

盆

盆行事 以前は、ここでの盆行事は、九月十三日から十六日までであった。昨年（五十二年）から、八月十三日から十六日に変更した。その理由は、世間なみにしたこと。親戚の者がお見舞に往来する都合によること、仕事の都合によることなどである。

盆月の一日のことを、カマップタヘガシとよんでいる。墓の掃除は七夕の日。盆買いの人は、沼田へ行つた。沼田までここから三里ある、むかしは馬をひいて貰いもんに行つた。盆の一週間ほど前に行つた。各家で思い思いに行つた。篠尾越えて沼田へ行つたが、わらぞうり一足では足りないくらいであった。桐下駄も一足はきつぶした。

盆用の品物は、荒物屋で買つて来た。
買つたものは、盆提灯、線香、ろうそく、盆ござ、履物、着るもの、日用品など。

盆花は売りに来たものを買った。（中山字原）

カマップタ 盆月の入り口をカマップタといい、昨年までは、九月一日だった。この日にはじりやきをつくる。（五領）
カマップタは八月一日で、ジリヤキの大きいのを作つて供えたり食べたりする。小麦粉をこねて、ほうろくで焼く、盆を迎えるしるしだが、意味は不明。（熊野）

カマップタヘガシとて、九月一日の朝け、仏様が十万億土から出でくるので、遅くならないようにと、仏様へじりやきをやいてあげる。これは、仏様がじりやきで地獄のかまのふたをひつべがえして出で来るのだといつてある。そのため、このことを、カマップタヘガシ

とよんでいる。じりやきは、ほうろく一杯の大きさのものをやいた。

（中山字原）

墓掃除 盆前の墓掃除は、七夕の日にする。これは、家一ことにする。盆のこえ出し 盆中のこえ出しについては特にいわない。（五領）

盆月 中山では九月十三日～十六日に盆をしたが、昨年からくり上がつて、八月十三日～十六日になつた。（火の口）

盆棚 十三日に盆迎えの前に盆棚を作る。組立式の棚を組み立て、仏壇の位牌を移して置く。盆棚は前に新コ竹一本（または四本）立て、ミチシバの繩を張つて、ヒノキ（テンバク）杉の枝を七本ぐらい前に下げたり、生のそろめんを下げたりする。盆棚は座敷に作るが、仏壇の前に作る家もある。（熊野）

盆棚の上に買つた盆ゴザを敷く、盆花はキヨウ、カルカラなどの花を飾る。昔はミソハギを飾つたが、今はなくなる。
ナス、キユウリに足を四本付けて馬を作る。里芋の葉にご飯を広げて進せる。
線香、こうがん寺ろうそくを立て、造花の盆花を供える。盆提灯に火をつける。

高灯籠や百八灯はしない。ノマワリも聞かない。供え物は十三日に取つてきて供える。（熊野）

盆棚は十三日、昼食を食べてからたてる。盆棚は表座敷にたてる。盆棚ではなく、給桑台をつかつたり、かいこのわくだなをつかう家もあった。

盆棚には、位牌を全部出してかざつた。

棚のまわりには、新竹を四本立てる。
クズ葉のつるを棚のまわりに、一まわりまわした。棚の柱のところに、盆棚をかざつた。
棚には、机をあげて、その上に位牌をならべた。

どんぶりか皿を棚にのせて、水を入れておいた。ミソハギの枝を位しばつて（束ねて）、どんぶりにひたして、おまいりするときに水を位牌にかけた。

棚の上には、イモツバをして、その上におはぎとかフロウ（二本、これが箸がわりという）をあげた。

ナスとキユウリの馬をつくって、それも、イモツバの上にあげた。

盆棚の下には、ムエンボトケをまつる。台を出してかざった。ムエンボトケにも、上と同じものを供えた。なお、ムエンボトケというのは、人にならない者（結婚をしないもの）のことである。

新盆の場合にも、盆棚にべつにつくることはなかった。新しい仏様も古い仏様と一緒にまつる。（中山字原）

盆花 元は、キキョウ、カルカヤなどの盆花は、草刈りついでに、山へ行ってとつてきたが、近ごろは少なくなつたようだ。たいていは手近の花で間にあわせている。（五領）

昔は馬をひいて朝草刈りに行つた時、キキョウ、カルカヤ、オミナエシなどを盆花として採つて来た。今は草刈りをしないので、家庭に花をつくっている。造花は使用していない。（役原）

盆花はキキョウ、カルカヤ、オミナエシが中心。

盆の前日あたりに、山へ盆花取りに行つた。草刈りの帰りがけに取つて来たのがふつうであった（中山字原）。

ナスのソウリヨウ切り ナスのソウリヨウ切りといって、ナスを一センチあるかないかの真四角に切つて、ハスの葉か、それがなければサトイモの葉の上に進せる。わけなぞは知らないけれど、昔からそうしてきた。（五領）

無縁仏は、盆棚の下にまつる。縁の下様ともいう。盆棚の供え物は、ばんきり進ぜたものをとりかえるのがならわしだが、無縁仏のそれは、盆中、また進せまた進せして、下げずにためておく。（五領）

盆棚の前に小さな棚を作つてまつる。無縁仏といつて、ほかに呼び名はない。春秋の彼岸や盆・正月には、自分の烟の中にいる無縁仏を墓参りをする。線香を立てておがむ。この地には昔、飢饉があつたので死んで無縁仏になつた人が多い。（役原）

盆棚の下に、盆のうちだけ盆棚と同じ物を進せる。ルス仏と呼んでいる。（熊野）

すいはとけといって、盆棚には古い位牌を二つぐらい残して、るすいをさせるうちもあるし、全部の位牌を盆棚にかざるうちとある。どちらの形にしても、るすいはとけには、盆棚にあげたものと同じものを供える（中山字原）。

盆中の仮壇 すべての位牌を仮壇からうつして盆棚にまつる家が多い。なかには、お留守居様として一つだけ残す家もある。どれを残すと特定なものはなく、順序にする。天正年間の頃からのもので、真っ黒になつて誰のものとも分らぬものが決つて残される家もある。（五領）

盆迎え 盆迎えの準備は、盆月七日の墓場の掃除からはじまる。いんきよやひまのあるひとがこれにある。十一日頃にはそうめんを買つたり、盆花を採つたりする。（五領）

盆迎えには家庭の庭と墓でわらをもす。お寺へは行かない。線香とおさじ、盆ちょうちんを持って墓へ行きおがんで、生きてる人が案内して連れてくる。（火の口）

盆迎えは八月十三日の夕方、お墓に行つて小麦わらを燃し、提灯の火をつけてくる。三本辻へ来て、また火を燃して、家のカドでも火を燃して家に入る。

盆棚のろうそくに提灯の火を移す。寺の墓地をラントウというが、寺には仏迎えにはいかない。（熊野）

盆迎えは、それぞれ個人の墓へ行く。提灯をもつて行って迎えてくる。

墓参りをしてから墓で火を燃して、その火を提灯にうつして来る。

仏様は、縁側から迎え、提灯から、盆へ火をうつす。

盆迎えに行くのは、許さかぎりの人数。留守番を残しておくだけ、十三日から十六日までの間、かど先でムギわらをもす。これをかど火をたくといった。

新盆迎えのときには、「百八灯をたてる」。

百八本のろうそく（シノ竹などの先に立てる）を、家から墓までの間に立てる。これを立ててくれるのは、親戚とか近所の人。

墓で火を燃してから、掃りがけに、ろうそくに火をつけてくる。その火を盆棚にうつした。（中山字原）

盆札 十五日か十六日ごろ、寺へ盆札に行く。粉やうどんなどを持つて行つたから、寺では半年分もの粉をもらつた。今は金だけを黒い包み紙に入れて行く。（熊野）

盆札に本家へ線香あげて来る。何も持たなくて、同じマケの家で行き来をして、線香あげる。仲よくするため、遠くの親類も来る。「結構なお盆です」「お盆になりました」となどと挨拶をかわす。

「くされ盆」ということもあり、天気が崩れる。（熊野）

盆中のあいさつは「お盆様でおめでとうございます」とか「たちまちお盆様になりました」などと簡単になります。

新盆の見舞いは、十四日であるが、そのときには、「新盆でおさみしいございます」という。（五領）

盆の見舞 親戚の者、近所の人たちが、線香を立てて来てくれた。これを、「盆札」といった。このとき持つて来るのは、人によってちがう。果物、うどん、菓子、スイカなど、様々であった。新盆の場合には、縁故のある人たちが、品物にお金をのせて持つて來てくれた。

このときのあいさつは、「おさみしゅうございます」という。

ふつうの盆のときのあいさつは、「おばんさんになつて、おめでとうございます」という。（中山字原）

盆市 沼田までザマをしょて買物に行つてくる。

馬を連れて、明神様の境内に馬をつないで、そばに醤油だるだの、買ものしてきて正油だるを漬して、正油はこぼれてしまつね。買ひものは

きたりして正油だるを漬して、正油はこぼれてしまつね。買ひものは汚すわ。困つた人がいたそだ。（北之谷）

お盆には浴衣、帯、げたなどを買つてもらうのが楽しみだつた。背中にうちわでもさして遊んだ。（北之谷）

品物がいいにしろ、悪いにしろお盆にはひとえもんを買つてもらつた。（熊野）

盆には切りこぶと砂糖を買ひに中之条へ行つた。（火の口）

新盆 セまい五領でも、多い年には、新盆を迎える家が十軒もあることがある。新盆の家では、墓地から家までの間にミノタケに指したコウガシジという小さなろうそくを百八灯立てる。迎え盆の夕方、墓地に新盆様を迎えて行つた帰りに、順々にこれに点火して、家に案内する。送り盆にも同様のことをする。（五領）

新盆棚は特別には作らない。近い親戚や隣保班が見舞に来る。（熊野）

百八灯 これは、あらほんのおりほんのときに立てるところと、むかえほんのときに立てるところとあつた。

梅沢では、むかえほんのときに、百八灯を立てた。墓からうちまで、組の人とか、親戚の人が立ててくれた。シノダケにこうがんじろうそくをさして立てる。（中山字梅沢）

盆送り 八月十六日の朝ヶに盆棚をこわして墓地へ持つて行く。墓に線香を上げて挙む。夕方、家のカド、三本辻、墓地の順に麦わらを燃して行く。カド火を燃すという。（熊野）

十六日の朝、朝飯を食べてから仏様を墓までおくつて行く。

盆棚にかざつた竹、くすば、花、線香、ろうそくなどをもつて行く。

お供えしたものを全部持つて行って、墓で、一ヵ所にまとめて置いて来た。

おくつて行くものは、留守番を残して家族の者が全部墓では、火をいた。それぞれの石塔に線香をあげて来た。

無縁仏も同じに扱い、ほかの仏様と一緒におくりだす。(中山字原)

なお、盆棚はこわしてから、仏様(盆様)をおくりだす。(中山字原)盆の十六日はガキの首も許される日という。「盆々と仏に上げて私は満腹」

「養子の盆腹」ばた餅は夏なので早くいたむから、「それ食え、それ食え」と食べさせるので、満腹するのをいう。(熊野)

千匹がゆ 盆送りの日には、オムギ、マメ、ヒエなどを入れたかゆをつくり、親音様とウマやウシなど千匹の家畜の供養をする。これ

を「せんびきがゆ」という。(五領)

千匹かゆは盆送りの時、わらを二つに曲げて入れ物にして、モミがらを入れ米をのせて、盆棚をこわして墓地へ持つて行く時に持ち出し、途中に置いていく。カドの先の方に一個だけ置く。(熊野)

盆中の禁忌 盆中にには、殺生はならぬといい、子どもたちは、セミやトンボをとることや魚とりのための川かえもしてはならぬといわれた。しかし、西五領では、十六日には若い衆が總出で壇をとめて魚とりをしたことがある。(五領)

盆中の食べ物 盆のあいだの食べ物(供え物)は、家によつて若干

十四日の朝ははたもち、ひるはうどん、夜は米のめし。

十五日の朝ははたもち、ひるはうどん、夜は米のめし。

十六日の朝は、まるめたもの。まんじゅうとかはたもちをつくつてあげた。ひるはざんばらいでそれぞれの家で好きなものをつくつてあ

げた。夜はべつにきまりはない。

十七日はほんがらといって、あすんでいるだけで、「ちそくは過当なものをつくつた。俗に生き神様(人間のこと)にあげる」といった(中山字原)。

盆踊り 学校の庭で、青年会・婦人会が主催で、八木節・四方小唄などをやる。(熊野)

むかしは盆踊りをした。盆のあいだ、公民館の庭などでやつた。八木節が主で手拭おどりもあつた。(中山字原)

八海山 八月三十一日各家で御燈明をあげた。(新田)

九月

一日

八朔 八朔には、ヨメが赤飯を持って実家に帰る日である。野菜を持つて行くことはなかつた。現在は、手みやげだけですましてしまつようだ。この日は実家にとまるともとまらぬとも定まらない。

実家の方からのお返しの品物は、土地によるが、定まっていらないようだ。(五領)

八朔は遊び日なので、赤飯をたく。初嫁が初婚と実家へお客様に行く。

ショウガは持つて行かない。(北の谷)

八朔の節句は九月一日で夫婦で嫁の生家へ赤飯を持ってお客様に行くわけだが、夫婦で歩かない。「先へ行つてろ」なんて言われて連れ立つて歩いたことはなかつた。(熊野)

八朔は九月一日、新嫁は赤飯を持って父母にくれて来るため、里帰りをする。仕事を休むくらいで、ショウガを贈ることはしない。(熊野)

十五夜 ススキは供えるが、特別な物を作つてあげることはない。その日に作つたものを供えるぐらいである。シノミ（箕）に入れて供えた。供えたものを子供たちがとつたが、この辺では、激しくなく、面白半分にやつた程度である。（本宿）

十五夜には、もちをついたり、ほたもちをつくたり、まるめたものをつけたり、「いたきなど」とつづいて歩いた。厄払いといった。五領では、比較的例が少なかつた。（五領）

十五夜にはススキを三本か五本、「升びんにさし、大豆、酒、まんじゅう、ばた餅などを縁側に供える。（北の谷）

十五夜は旧八月十五日月の祭りで、屋外にむしろを敷いて、枝豆、大根・餅・里芋などを箕に入れて供える。ススキはあける家とあけない家とある。（熊野）

秋の彼岸

地神様 秋の社日には地神様がめぐり歩く。稻を一株刈って軒端や神棚に下がる。麦を播きおえると地神様にしんぜるとして穴を掘つてボタモチを埋めた。アナバサギといつてゐた。（役原）

地神様の野回り 九月一日ごろ、地神様の野回りといふことがいわれる。この日、地神様が野回りをして、作柄をみてまわるという。じりやきをこしらえて、神棚に供えた。これは、地神様の弁当だといった。ただこういうわけで、誰も実際に野回りに行くことはない。（中山宇原）カリカケ 秋の社日には、稻を一株刈ってきて、地神様に供える。お勝手の天井の梁などに吊しておいて、馬が病気の時にこの稻の実を食わせる。これを馬が食えば、病氣は治る。今でもカリカケはやっている。（判形）

十三夜 豆、里芋を供える。ススキは供えない。（本宿）

十三夜は十五夜とだいたい同じに祭る。（五領）

十三夜にはばた餅・まんじゅう・酒を縁側に供える。昔は庭へ供える家もあつたようだ。ススキはもう立てない。（北の谷）

十三夜は旧九月十三日、十五夜と同様に祭る。（熊野）

お月見の天候 十五夜と十三夜どがともに晴れるというのはまれで、「十五夜に曇りあれば、十三夜に曇なし」とか「十五夜に曇りなければ十三夜に雲りあり」という。（五領）

屋敷稻荷

オクンチ 旧の九月九日をハジメクンチ、十九日をナカノクンチ、二十九日をシメエクンチといつて、赤飯をふかして、屋敷稻荷様にあげる。どの九日に祭るかは、家によつて決まつてゐた。大津家だけは、十二様の近くの屋敷稻荷に、お仮屋を作り、赤飯を供える。「オクンチは、鳥鳴きが悪い。」といふ。また「子を育てるのに百日かかり、そのあと、子が親に百日お札をして別れる。それがオクンチである。」といふ。（本宿）

秋、旧九月九日、十九日、二十九日を、それぞれ初クンチ、中のクンチ、末のクンチといふ。屋敷稻荷のお仮屋を作るのがオクンチである。旧名久村のオンボウ山へ早く行つて天狗を祭るしきたりがあつた。（熊野）

オクンチに屋敷稻荷を祭るために、お仮屋を作り替え、赤飯・オサゴ（米）・水を供える。オクンチが三日あるうち一日だけ祭る。屋敷稻荷を祭るのは、初午とオクンチと年一回。初午にはマユ玉を供える。（熊野）

オクンチとは、旧九月九、十九、二十九日のこと。三日間、赤飯をたいて祝つた。

九月のことをお殿様の稻荷様のまつりといふ。

十三夜 豆、里芋を供える。ススキは供えない。（本宿）

十九日のことは、ナカノクンチといい、百姓の稲荷様のまつりといふ。

オクンチには、赤飯をたいて、屋敷の稲荷様にしんぜた。豆腐を供える家もある。（中山字梅沢）

オカリヤ 屋敷稲荷のオカリヤは旧暦九月十九日のナカノクンチにこしらえる。（閑田）

社日 田の稲をひと株とて来て作柄様に供える。（新田）

十 月

神無月

神無月 旧十月のこと。

九月三十日が神おくり。この日、神様が縁組のために出雲へ出かけるという。ムラの人は、この晩、明神様へオサゴとおさいせんを持つておまいりに行つた。十一月に、神様は帰つて来るという、このときは、神社（神明様）

（はおまいりには行かない）。

神様が、出雲へ行つてゐる間に、留守居をしている神様は、諏訪様という、諏訪様はへビだから、しこう（姿）が悪いので、出雲へは行けない。そのため、留守居をしているのだという。なお、神無月には、神様が留守で、縁がうすいからといって、縁組はするなどといった。この期間に結婚すると離婚の率が多いともいわれている。（中山字梅沢）

神送り 中山では明神様に集まつて祝つたが、尻高ではない。（熊野）

お留守居様 八百万の神様が出雲に集つていう神無月に、家で留守をするのは、稲荷様と恵比須様である。この二柱の神様をお留守居様たたいて回つた。ミョウガをしんに入れるといふ音がした。モグラが

という。（五領）

神無月の留守を守る神は諏訪様であり、出雲の神から蛇体が大きいので出雲に来ることをことわられた。神無月に結婚式はない。（五領）

神無月の十月は神様が出雲に出かけて留守なので、稲荷様が留守を守る。（新田）

神無月の留守神は諏訪様である。諏訪様はへビで、あまり姿が悪いので、出雲の神様から、おめえは出雲へ来るなどいわれたので、留守居をしているのだという。

えびす様は、出雲へ行くが、帰つて來るのが一番先だといった。（中山字原）

山字原 神迎え 三島神社は熱心に祭る。鍋ヅル回りの先の手前に神主が住んでいて、ショウ・ヒチリキもあり、伊勢皇太神宮のお札を配る。（熊野）

神無月は十月は神様が出雲に寄りあう。小屋では神迎えのときにハバキヌギをやつてゐるが戸室ではやつてない。（戸室）

庚申講 七、八月を除いて、暮れになると毎晩のようになつた。食いつくら、しいつくらをした。（本宿）

十 日 夜（旧十月十日）

月祭り 十日夜は旧の十月十日にやる。餅をついて、お月様に供えた。月祭りであるという。また、大根の年取りといつて、大根もお供えする。さらに、薬ニユウの祭ともいつてゐる。

ミョウガをしんとうに入れて薬磯を作り、「朝ソバキリに、昼ゲンゴ、ヨウメシ食つちや腹太鼓」と唱えて、子供たちが地面を叩く。モグラが土を起こさないためといふ。（本宿）

十日夜の餅は夕方つく。十箇、お月様に上げる。（閑田）

十日夜は旧十月十日、わらでトオカンヤを作つて、子どもが地面をたたいて回つた。ミョウガをしんに入れるといふ音がした。モグラが

ほらにいように地面をたたくもので、よそまで回ってたたく。その時の唱え言「十日夜十日夜、十日夜ハイイモンド、朝ソバキリニ昼ダンゴ、夕餅食つチャ腹太鼓」

月見だから月が見える所—縁側や二階、庭のワラボッチ三、四東の上に、餅を十個くらい盆にのせて供えた。庭先に草刈り籠を伏せた上に供える家もある。子供が竹棒に釘を付けて、供え物を取って回る。

取られた方が稼起がいいとか、わるいとかいう。(北之谷)

十日夜は大根の年取ともい、大根一本と里芋を羅葉に入れて餅と一緒に供える。餅は新米やアワ・ヒエでついた。一臼つくだけで、十

日夜につく。(関田) 関田では九日夜をする。(北之谷)

十日夜は旧十月十日に立白で餅をついて、餅を一重ね箕に入れて大根とともに庭へ台を置いた上に上げて進せる。「大根の年取り」という。

十五夜、十三夜、十日夜と三回月見があるが、十日夜が一番大祭りをする。

子供はわらを巻いたもので、庭をたたく。モグラが土を起こさないようにななくと、モグラが退散して作物を荒らさないという。子供が

三五人そろってたたき回る。(熊野)

十日夜の歌 「十日夜十日夜、十日夜はいいもんだ。朝ソバキリニ昼ダンゴ、夕餅食つチャ腹太鼓」と唱える。(熊野)

十日夜は旧十月十日。九日の晩に餅をついた、あん入りのまるいもち十コを、十日夜の晩に供えた。

わらでつぼうをこしらえて、子供たちが庭などをはたいてあるいた。そのときの唱え言とは「十日夜いいもんだ。あさそばきりにやひるだんご、夕めしくちやはらだいこ」という。これは、モグラが土をおこさないようになうことであつた。(中山字原)

九日夜 関田の飯塚マケと小瀬マケでは九日夜をしている。源義経が奥州へ下向する時に十日夜ができなかつたので九日夜にするようになつた。(関田)

麦まき

穴ブサギ 秋、麦蒔きが終ると、餅をついて神仏にあげ、近親者に

配つて祝う。(新田)

麦をつくっていた頃には、どの家でも、穴づぶきげといふことをやつた。麦をまきおいて、一段落した時期である。(五領)

「十日夜、穴ツブサゲ」といい、十日夜と一緒にしたり、別にした

の餅をつき、あんこを入れて丸め、神棚へ供えた。餅を烟へ持つて行つて供える家もある。(北之谷)

穴ツブサゲは秋に麦マキが終った時のお祝いで、各戸別に、餅・おはぎ・お酒(うどん)などを供える。(北之谷)

穴ツブサギは秋に麦を蒔いたあと、十日夜とかち合うころ、小さい

供え餅を一重ね、烟に埋めて来た。(熊野)

油餅はしらな。(熊野)

十一月

山のクチアケ 十月初旬、入会の山については、誰がどこを刈つても自由であった。(判形)

カヤは十二月一日以降に刈る。(判形)

十五日

七五三 昔は、ほとんどしなかつた。近頃、ぱちぱちやるようになつたといどだ。(新田)

十一月十五日の七五三は、最近やるようになつたことだが、山の中では、あまりやらない。(五領)

二十三日

太子講 十一月二十三日に小豆ガユを煮て、カヤのピッコ箸（長さ一尺以上）で食べる。カユ柱として米の粉のダンゴを入れる。太子様はピッコで目ッカ（片目）だという。この日は「太子講荒し」という雪が降る。

カヤの箸は子どもが本を読む時に字つきにすると、よく覚えられるという。娘が反物の織り始めに一本入れて織り始めると、はた織りが上達するともいう。（新田）

職人が寄り合い、貢金を決める太子講もある。（新田）

だいし様におかいを上げビッコの箸を上げる。ビッコだとネッコの神様だそうだ。（新田）

オジユウヤ 十一月二十三日の次の日曜日（新田）

十二月二十三日は太子講で小豆がゆに、カヤの箸で供える。又、八がはき様ともいつた。長い手で、節が八つもあつたという。この日に供えた箸を折って、子供に与えるとよいという。（五領）

川比タリ餅 馬におにぎりをくれる日。馬は一年中待ちかたびれている。（熊野）

三十日

ツジユウダンゴ ミンカダンゴともいつた。日は決まっていないが、落穂を拾ってきて、粉にして、ダンゴを作る。米とヒエ（朝鮮ヒエ）の二種類のダンゴを作り、蓋にさし、それを戸口にさした。家の子供がさげた。（本宿）

ツジユウダンゴは十一月三十日、ミンカダンゴともいう。秋のこなし」として、足もとに落ちた泥まじりの根を、鍋ぶたに布をかぶせてなせて根だけはり付けてえり分ける（根をツルという）。その根を粉にひいて、だんごや焼き餅を作り、カヤの棒にさして神棚



ツジユウダンゴ（中山）
（井田安雄 撮影）

一二二月

一日

川びたり餅 嫁ぐ前に、里の方（新田）で「島流しにされたひとに」といって、十一月一日に餅を供えた。（五領）

や稻荷・トボ
などに供えた。
だんこは丸形や
握りだんこにし
た。（新田）
つじゅう団子
は昔は、旧の十
月のみそか、い
まは、粉がひき

おえたところで、でたところ勝負である。（五領）

ツジユウダンゴを窓にさしておくと、子どもが朝早く起きて取つて焼いて食つた。意味は不明。（北の谷）

ニワコロガシをして、足元に落ちこぼれた米を粉にして、ツジユウダンゴを作りカヤのカブを細かく切ってさし、家の戸口ごとに進せる。カヤ一本に握りダンゴを一個さして十一月三十日に戸口にさす。（十二月）

月は鬼が来る月なので鬼除けにした。（熊野）

ツジユウダンゴは、うちの秋のとりいれかすんでからやつた。だんごをつくつて、カヤにさして、とほ口、物置、屋敷稻荷様などにさした。これを、近所の子供がツジユウダンゴをぬきに来た。だんごをさげて食べた。だんこは虫のよさをしていた。（中山字原）

オコトじまい 十二月八日のオコトじまいには、宵にメのあるものを外に出しておけという。たいていはメカイを表に出す。でかいマナコをした魔性の鬼がやつて来るという。その鬼には名前がないが、鬼はもう悪いことをするに決っている。(五領)

十三日

ススハキ 十三日は日を見なくともいい日で、ススハキをして、松迎えをした。松は山からもらつて来る。(熊野)
十二月十三日と二十三日は、日を見なくとも、ススハキをしてよいといわれた。正月のおかざり用のお松も、この日ならつて来てもよいという。
ススハキは、ササbaumをつくつてやつた。一番先に、神棚、つきに仏様を出した。

十五日

このときは、勝手が使えないもので、簡単な昼食をした。(中山字原)



オカリヤ (新田)
(金井庫治 撮影)

稻荷祭 星敷稻荷様の祭は十二月十五日で、カマギヨメと同じ日にである。お仮屋を作る。石宮があつてもお仮屋に出す。お仮屋はサンマタ(二股のこと)の木(何の木でもよい)を使って作る。屋根には藁を使う家が多い。稻荷様への供え物は、赤飯、尾頭付、スマド

ウフ(豆腐の四隅を切ったもの)である。カマ神様には、お赤飯だけを供える。(本宿)

秋にも十二月にお仮屋を作り替えて稻荷様を祭るが、祭る人は少ない。(北之谷)

カマギヨメ 十二月十五日にカマ神様を祭る。これをカマギヨメといふ。カマ神様に注連縄を張る。この日は、稻荷様のお祭りでもあり、稻荷祭ともいう。(本宿)

カマギヨメは十二月十五日。稻荷祭りのときいっしょにする。昔大釜のあつたところ(今はへつついになつてゐる)にしめをはる。稻荷様にはオンペロを四枚、釜の方へは八枚縄につけて下げる。飯塚イツケではしない。これをすると釜がうなり出すといふ。(中山字原)

カマギヨメは秋の稻荷祭りのこと。赤飯を作つてワラツツコに入れて十五、六本も作り、本家新宅・道祖神・墓地などに供えてくる。初午には星敷稻荷を祭る。(新田)

釜きよめは旧十一月十五日で昔元服をした日でめでたい日。何を見なくともこの日はいい日になつてゐる。屋敷稻荷をまつる日。家によつては新わらでおかり屋を作る。赤飯をふかし、すみどうふ、尾頭つきに煮干を二、三匹上げる。(新田)

カマギヨメには稻荷様にオンペロを切つてあげ、オカリヤをつくる。十一月十五日。(五領)

十一月十五日は釜清めといふ。この日に星敷稻荷のお仮屋作りをした。供えるものは、赤飯だつた。又、穀物を収穫するときの、最後ものを「足元」といい、これを集めて粉にして、団子を作つて供えた。なお、足元は神様に供えるものでないといふ。(五領)

釜きよめは十二月十五日。へつついに注連縄を張り、これにオンペロを八重下げる。塩をまいて清める。(判形)
かまど祝い 十二月十五日は、星敷祭りで、かまど祝いといふ。毎年、竹の柱を立て、稻葉で新しいお仮屋をつくる。正面には、二本の

竹を立て、半紙で切ったオーバーロックをついたこれも新しいシメを張つて、お稲荷様を祭る。夕方には、油揚げ、豆腐、お頭つきなどを進ぜる。

進ぜに行くものは特定していない。また、特別な作法はない。

現在では、石宮がほとんどで、竹を立ててシメを張るだけだ。しかし、石宮があつても、そのわきにお仮屋を毎年こさえるかたい家もある。(五領)

歳暮 十月二十日すぎにお歳暮を持って行く。さかな(アラマキ)がふつう)を持って行く。(中山字原) 稲や麦の初穂を取つて来て、カマ神に供えた。ルスンギヨウなどといわない。(熊野)

冬 至

トウナス トウナスを食べる日。ナス木を燃してあたると、シミ(寒氣)が通らないという。(新田) 冬至には、冬至トウナスといって、トウナスを食う。また、「トウナスには、歳をとらすな」というが、冬至を越せば、トウナスもしみる。また、この日、ナスがらを燃すと、しみがとおらぬ(かぜをひかぬ)という。ユズのことは、土地にないせいか、いわぬ。(五領)

正月の用意

お松迎え 正月の用意やお松迎えは、三のつく日、即ち、十三日、二十三日からはじめる。その日は、曆をみなくともよいという。(五領) 松むかえは十二月二十日すぎに、日の好い日を見て取りに行つた。三蓋の枝松をとつてきて日陰に置いておく。(戸室) 門松 一本の家も、三本の家もある。シン松を立てたが、途中で枝松になる。カドに松と竹を立てて、回りにナラマキを付け、きれいに飾つた。門松にシメ縄を張り、ミカンや豆がら(マメで暮らせるよう

に)を付けた。(新田)

門松は、歲徳神、稻荷様をはじめとして、屋内外のすべての神様に飾つた。また、庭の真ん中には、ナラの木を坑として、高さ三尺の松を五本立てた。上の方は三本だった。

松は、若い者頭のサハイで共有山から切り出した。五十年も前の話である。

近年は、森林愛護が徹底して、刷り絵で代用している。一時、新松を切つたこともあるが、これも禁止された。(五領)

松ぐいにナラの木を使うが、青柳マケはちゃんとしくいが立てられない。(熊野)

正月棚 常棚と別に年神棚を作る。棚板は家例により新しい板にする家と、同じ板を毎年使う家とある。茶の間に飾る。オミタマ様は祭らない。(新田)

正月棚は常備の神棚のはかに、棚を組み立てた家もある。ナラの木を決めて伐つて、皮をむいて割つて、七、八本を使って繩で編む。歲徳神の方位を考えて向けて、棚を吊す。

年神様のお供え物を供える。歲徳神の方向を向いて小便もするなどといわれた。(熊野)

八勝神 正月様の子が八人いるので、正月棚にシメ縄をはるという。(新田)

八将神は、正月かざりの一つ。しめを八本くり、半紙を三角に折つてかける。これは座敷にかかる。(中山字原)

オヒガミ様は、便所の神様で子どもがうんといふ神様だ。茶の間のめぐりにしめをめぐらせ、しめを八つ飾つて八しようじんを飾つた。子どもが八人いる神様ではないか。(新田)

正月様の松とシメ縄 松を四本とつておき、五月(養蚕前)に大掃除をするが、その時に開炉裏でもす。また年越のススハライの日に、火をたきつけるのに使う。燃し始めに使用する。

オシメは、田植えの苗取りで、苗をしづるのに使用する。(本宿)
カマ神様の松はさげすにおいておき、次の年の松ととりかえる。(本宿)

シメ飾りのわらを取つておいて、田植えの時に苗をたばねるナエバ
に使う。

麦などを束ねるわらを、タバツラ・ツナギなどという。(新田)
餅つき 一夜餅をつくものではない、といって、暮れの二十八日、

二十九日頃つくようにする。(五領)

お供え餅は、お正月様、神棚、仏壇、恵比須様、おそうぜん様など、
ていねいな家で、七重ねつくった。ふつうの家では、五つ位である。
現在は、何事も省略で、神棚にすらつと並べる光景がみられる。(五
領)

餅つきは十二月二十七、八日、昔は、アワ・モロコシなどの餅をへ
ラ(やたらに)ついた。今は半分になった。モチモロコシはコウリヤ
ンに似た赤い色で、どういう畠でも取れた。トチバングエロ(ヒキガ
エル)の背中をたたくように、バッタソバッタソバと餅をついた。モロ
コシ餅を食べると、身体が暖まるので、夜尿症の子でもとまる。(熊野)
餅がつれない家 中山の佐藤マケは暮に餅がつけなくて、あけて正
月一、二日につく。(熊野)

正月の買いもの 暮にミカンと鮭を買ひに中之条へ行つた。昔は正
月に上げるだけしか買わなかつた。(火の口)

三十一日

地神様 十二月三十日に煙に飾りをする。地神様をまつる。松を
立てて、さく切りのまねをする。(新田)

大晦日 門松や屋敷縁側に、雄煮の餅の切れっぱしを神の鉢に入れ

て行き、供えてきた。(新田)
大晦日の十二月三十一日に晦日ソバを食べる。飯に年取り魚を食べ
る家もある。(熊野)

年中行事一斑

年取りは大晦日、六日年、十四四年、節分年などという。馬の年取
り、女の年取りとか、菜ツ葉と大根の年取りなどという。(北之谷)

ここでは、としとりは次のときに行う。

大晦日はとしとりという。

一月六日は六日年というが、そういうだけで、今は特別の行事はみ

られない。

節分もとしとりという。(中山字原)

一年のうち、としとりといつているのは、次の日である。
十一月十三日はすすはきの日で、すすはきどしといふ。この日は、

アズキの「ほんかうどん」をつくる。

この日か二十三日にお松むかえをする。十三日と二十三日なら、暦

をみなくとも、お松むかえをしてよいといった。

十二月三十一日、大晦日。としとりといふ。としにそばをつくつ

て神様にしんぜた。

一月六日、六日としといふ。女のとしとりであるという、ご飯をた
いて神様にあげた。

よそへ行つてゐるものは、この日にはうちへ帰つてきた。

六日爪ははなすもんだといつて、六日に爪を切つておけば、そのあ

とは、いつ爪を切つてもよいといつた。

一月十四日のことは十四日としといふ。この晩早寝すると、しらが

になるといつた。

クワの木の根っこをイロリでもした。かいこのよくあたる家のいち
ばんよくとれたクワの株(二年ごろといふ)をだまつてとつてきて、

十四日の晩から十五日の朝にかけてもやした。火を絶やすなどといった。また、十四日の晩には、米を一合ぐらい、うちの旦那がたいて、山もりにして、それに箸を十二本さして、おみたままにあげるとて、仏壇にそなえた。これをさげるのは一月二十日。これを水らしておいて、あとでいって食べたり。丈夫になると、風邪をひかないなどと二月の節分のことは、としとり、せつぶんどし、まめなげどしなどといった。豆を豆がらをもやしてほうろくでいった（豆がらでかきまわした）。これをするのはおんなし。いった豆は一升桶に入れて神棚にあげておいた。

豆を投げるのは旦那。「福は内、福は内、鬼は外」といって、ツボ（部屋のこと）から物置小屋から、ほうぼうへなげた。なげきると豆は神棚にあげる。福茶といいて、豆を入れたお茶を、夕飯を食べながら飲んだ。また豆を家族の者が自分の年だけ食べる。

豆まきの日には、豆をイロリにならべて、年占いをした。

豆をいるときには、豆木ではうろくをかきまわしたが、その豆木に、正月様にあげたイワシの頭を二つさして、それをイロリでやいた。旦那さんからはじめで、うち中のものが、ツバをかけながらそれをやった。そのとき、「四十二匹の虫の口やき」といってやいた。コリコリにやいた。これは、夏の虫がふえないようにとってまじないであつた。豆木にイワシのあたまをさしてやいたものを、ヤッカガシといった。あとで、とば口のところにさしておいた。こうしておくと、厄病がまわつて来ないと云つた。（中山字原）

モノビのかわりもの。おほんのときうでまんじゅうをつくつた。彼岸にはほたもち、七夕にはアズキのごはんをつくつた。赤飯が出来ないから、アズキのごはんなどといった。（中山字原）
盆、彼岸と嫁親が丈夫なうちは、盆や彼岸のときには、嫁を実家へお客にやらない。（中山字原）

口頭伝承

はじめに

ここに挙げられた資料だけで、この村の口頭伝承が乏しいといふことは言えないが、収録されたものは、残念ながら僅かであった。三十年以降続いているこの民俗調査では、発見されなかつた鉱脈が、その後の調査で見出された例もあるので、昔話その他の今後の発掘を期待したい。

生活様式の変化から、ほとんど姿を消したわらたき石やひしやくが、家中の大焼き餅なんぞ、でつかり男に長わきざしなんぞと、かつては頭の体操に役立つたが、今はなぞなぞの中に、その姿をとどめている。

「おたまじやくし」のことを、判形ではババッコということは、先年「日本言語地図」作製時の言語調査で知つてゐたが、マンゴロウ・マンゴロン（熊野）マメンゴロ（原）ということばを知つたのは、私にとって収穫だった。これらは、これまでどこからも報告されないので。

他の地方の「はてなし話」では、くりかえし、川端の柄の実が落ちたり、大きな池に蛙がとびこんだり、蜂が巣から出たり入ったりするが、高山村では、栗の実が落ちる。その栗が、くりかえし、ボチカチ、ボチカチと音をたてるのも、ほほえましい。無論この語も「日本国語大辞典」「擬音語・擬態語辞典」にも出ていない新語である。

（上野 勇）

一、昔 話

桃太郎 むかし、むかし、あつたとき。

おじいさんと、おばあさんがあつたとき。

おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行つたとき。

おばあさんが洗濯をしていて、川上から桃が、「どんぶりこ」、どんぶりこ」と流れで来たとき。

おばあさんは、それを拾つて来て、おじいさんと食うべえと思ったら、中から子供が生まれたんだって。

桃から生まれたら、桃太郎と名前をつけたとき。

おじいさんとおばあさんが大事に育てて、桃太郎は力持になつたつ

それで、むらの宝物を、鬼が持つて行つてしまつたんで、むらの人気が苦しんでいました。それを、きび団子をつくつてもらつて、桃太郎は鬼退治に行つたとき。

桃太郎が鬼退治に行くと、途中で、イヌが出て来て、

「桃太郎さん、桃太郎さん、お腹につけたきび団子、ひとつください、お供します。」

といったつて。それで、お供にしたとき。

そのつぎに、きじとさるが出てきて、同じようにいつて、お供をしたとき。

山へ行くと、門があつて開かなかつたとき。

桃太郎さんが困っていたら、きじが高いところへ飛んで行って、中から鍵をはずして、門を開いたとき。それで、犬はかみつく、さるはひつかく、きじは目をつづいて、鬼共を降参させたとき。

鬼は

「こんどは、悪いことをしないから勘弁してくれ、宝物を持って帰つてくれ」

その宝物を車につけて、大がひき、さるがあとおしをし、きじが綱をひいて、家へ持ってきて、おじいさんとおばあさんは、一生安樂に暮したとき。

それでおしまい。(中山山梅沢、唐沢はま 明治45)

蛇鳴入り 曽々、おじいさんとおばあさんがいてね、「お前蛇どんの所へ嫁に行つてくれ」といった。そしたら「いやだ」という。次の娘にもそういったらいやだといった。三人めの娘が度は蛇どんの所へ嫁に行つた。そしてね、針に糸を長くさしといて、どこまで行くんだかつてんで娘が糸を持って、針を持って行つたら、蛇どんが岩穴の中へ入つていった。それでそのなぞがすっかり解けて、そこから帰ってきた。五月五日のショウウバ湯はそういういわれだなんていう。(熊野) 節分のいわれ(鬼製入) 曽もかしあつたとき。ある所におじいさんとおばあさんがいて、娘が三人あつたとき。鬼どんが出てきていたらずするで、おじいさんが大きい娘に言つたとき、「いやでも鬼どんの所へ嫁にいとくれ」つて娘は「いやでござる」って言つた。今度は二番目の娘が言つたとき。「いやでも鬼どんの嫁になるなあいやだけどおれ」つて。一番目の娘も「鬼どんの嫁になるんはいやでござる」つて断つたと。今度は三番目の娘が言つたと「いやでも鬼どんの嫁になつとくれ」つて。三番目の娘が言つたと「私も鬼どんの嫁になるなあいやだけどお

じいさんが困るから行くべえその代り麦を一升くれとくれ」つて言つて麦を貰つてずっとまきながら行つたつて。

それでこんどは、お正月が来て、うちへお客様に来るのに、麦がはえているので、麦をしるしに家へ来たつて。すると旦那のほうも鬼だがお客様に来たつて。

すると、家の中で、「福は内、福は内、鬼は外」。そういうふうにいわれたので、鬼は家へ入らないで帰つたつて。

それで娘は無事に助かつたつて。娘は親孝行したつて。

そういうはなし。(尻高字熊野、登坂きま 明治37)

三人娘おじいさんに子供(娘)が三人あるけど、仕事がこわくなつて、だれかはたけをうなつてくれるもんがあれば、娘を嫁にくれるとねえといふので、娘に立白ごと背負わせて來た。

こんど(娘を嫁に)くれなくなやなんねえ。

それではかの娘はいやだつたが、一番しまいの娘が嫁に行つた。

その里帰りに、餅をついて、それで、「餅に」手をつけるとうんまくねえといふので、娘に立白ごと背負わせて來た。

娘は、藤の花がほしい、藤の花をとつてくれ、といつて、だんだん、娘を高げえところへあげて、娘もいくらか木のぼりは上手だけど、へたあけられたから、立白ごとのぼらせられたんで、下へおっちやつて、娘は、臼につぶされて死んじやつて、娘は家へ帰つて來たつて。

それだから、「おじいさんはひとりでとをつて、娘のところへ娘を

嫁にやることになつたんだから」おおくつまんねえことはいうもんじやねえといふことだ。(中山山原)

笠地藏 曽々ある所におじいさんとおばあさんがあつたんだよ。お

じいさんはいいじいさん、おばあさんは欲の深いばあさんで、二人で貧乏ぐらしくしていきそうだ。それからおばあさんがハタを織つちや中山に持つて行つて売つていた。お正月まじかになつたから、ばあさんがハタ織つたのをじいさんが持つて行つて売つて買物すべえと思つ

たところがいくらたつても売れねえだそだ。これ売らにやお正月ができねえんだけど困った。仕方なしに反物持つてとほとま宿場から中山の方に上つてきた。すると峰に地蔵様がいて、運悪く雪が降つてきて、峰に上るまでに大分雪が積つてた。それで売れなかつたら地蔵さんに呉れてしまった。家に帰つたら日がとつぶり暮れてしまつていた。待つていたおばあさんは、さぞ正月の買物をして帰つてきたと思い、とほとま帰つてきたので、「おじいさんどうい売れたかい」といつたが、てぶらで帰つてきたので、「おじいさんどうしたのか?」はあさんこういうわけで地蔵さんが可哀想だからくれてきただよ」といつたばあさんは欲深いのでおこつた。じいさんは寝たけどおばあさんが怒つてねむれないが、よふけになつて騒やかな音がして、車の音がする。そのじいさんはヤジさんという名前なのだけど、「ヤジがどこへよんやさ、ヤジがどこへよんやさ」といつている。「はあさん、はあさん、ヤジがどこへよんやさ」という声がするぜ。そして「こんばんわ、こんばんわ」と戸をたたく音がした。あけてみると昼間たすけた地蔵さんが先に立つて、車に餅、お金などお正月の飾り物を一杯もつてきて、助けてもらつたお礼だといつてくれた。「ああよかつた、おじいさんのおかけでお正月が迎えられる」と喜んだ。そして地蔵さんが一人だけ残つて「床の間に飾つてくれ」とい、「じや」というので地蔵さん一人借りて床の間に置くと、毎日毎日がボロンボロンとおへそから落ち、集めておくと二人がたべるだけはちやんと米がたまつた。ばあさんは欲が出て、じいさんが山に行くと、ボロンボロンといふこの位のことではちらがあかねえ、へそをでかくするうんと出るに違ひねえと、へそをえぐつたらびたりと止つて出なくなつた。じいさんが帰つてみたらいつの間か地蔵さんが消えてしまつてた。そしたら貧乏になつてしまつた。ダイロクじいさんの話してくれた話（判形、尾見あけ 明治30、7、27生れ）

盆花取りの話 むかし、お寺のお小僧が、坊さんに盆花を取つて来

いといわれて、出かけたけれど、いくら行つてもなかなかいい花がねえので、だんだん山の奥へ行つて、道に迷つてしまつた。遠くにあかりが見えた。そこへ行つてみたら、おばあさんが頭をとかしていた。お小僧は、道をおそわるべえと思つたら、暗くなるから泊つていけといふ。

それで、小僧さんは泊つていると、坊さんにおつあるからと思うたが、暗くなつてはしようかねえつていうので、泊る気になつた。それで、夜中になつたが、おばあさんが頭をとかしているのでおかしい。頭の中に、大きい、たまげるような口があるので、おつかなくなつて逃げだした。

小僧は、行くところがわからず、便所にかくれた。それでも駄目だった。そこから逃げだした。おばあさんがまた追つて来る。

小僧は井戸の小屋の天井にかくれた。おばあさんは追つて来て、たしかにここへ来たわけだ、といつて、井戸をのぞいてみると、井戸にうつつっていた。こんなところへえつてやがつたつうで、おに（おばあさん）が井戸へはいりこんだという。

それで、小僧は、夢中でえつて来たつう。市がさけかって、やいちがひんのんだ（それでわざり）。だから、盆花取りには、あんまり運く行くもんじやねえという。（中）山字原 平形政雄 大正5・1・4。

食わぬの女房 むかしあるむらに、欲の深い青年があつたつうだいね。あんたもなから年のになつたから、女房をもらえてすめでも、欲がふかいから、仕事をしてもらつても、食べ物を食べる嫁さんはもうねえといつたつて。そこへ、行商か何かで、きれいな娘さんが來たので、その娘さんが、食べ物を食べなくともいいつうんで、それじゃもううべえといふので、嫁にもらつたつうだいね。

この女は、野良へ出ても、野良仕事でもなんでも、出来る人だが、

しかし、どうも、米櫃の米が余計減ってしまうつうんだいね。それで不思議に思って、その男は、屋根裏にあがって、けぶぬきからお昼ごろのぞいてみたら、釜に一釜ご飯を炊いて、それでもむびにして、頭の毛をといたら、口がそこにあつてね。そこへむすびをみんなぶつこんで、みんな食べてしまつたつて。それでたまたま、その男は屋根からおちやつたんだつて。

物音でその男はめつからつて、「みられちや、ここにいらねえ」ちゅううんて、肩へのせられて、山のほうへ流れいかれたんだつうんだね。それで途中でなんとかして逃げべえと思うんだけど、出られなくつて、そのうちに松の枝が出ていたんだいね。そこへひよいととびつて、女の肩から離れて、その女はもとは鬼で、その鬼はずんずん行つたけどね。

それで、途中で松の枝からおりて、ショウウブとヨモギの茂つている中へ入つてかくれたんだいね。

そうしたら鬼は男がいなくなつたから、めつけにきたけどね。それで鬼が「そこへえつちやよわつた。ショウウブとヨモギにさわると、おれの体はくさつちまつ」といつた。それを聞いたので、ヨモギとショウウブをおつくじて鬼のほうへ投げて助かつたつう話だいね。

それで、五月四日にはショウウブとヨモギを山からとつて来て、軒端にさす風習が残つているんだいね。(中山字原 原要 明治43・3・1)

シヨウブとヨモギ 大蛇が化けて娘のところに通つて子供が生れた。菖蒲のお湯に入ると、蛇がきても子供はできないといふ。昔沼田の方の三峰山から毎晩大蛇がきて、沼田の大尽の娘の許に毎晩来て娘も困つた。易者に見てもらい剣道の達人をたのんだ。大蛇が来たので斬つたら血を流して逃げ、あとをつけていた三峰山まで行つたそなへは娘は平気になつたといふ。(判形)

馬鹿娘 むかし、あるところにちよと知恵のたりない子どもがい

て、婚に行くとき家を出るので、親が心配して教えてやつたつて。ご飯を食べるときに、お湯があつくて飲めないときには、たくあんを入ればさめるからといわれて、みんなより(食事が)おそくなると大変だから、そうしろといわれたつて。

そして、風呂入るときに、お湯があつくて足が入らないので「たくさん持つてこう、たくあん持つてこう」といって、笑われたつて。

(中山字原、大塚ため 明35・2・14生)

むかし、馬鹿がいて、嫁さんのうちへ行くことになつて、「だんご」をもらつて食つた。それでうまいもんで、「だんご、だんご」といながら来たら、せきを「どつこいしょ」とてとんだら、うちへ来て「どつこいしょこしらえろ、どつこいしょこしらえろ」といつたんで、「どつこいしょなんてしらねえ」といわれたつて。(中山字原)

ホトトギス ホトトギスは、一日に八千八声鳴くといふ。あかるくなると一緒に鳴きだすといふ。それには、つきのような話がある。妹は、おれにこんなものをくれるのだから、妹は、もつといいものを食つているだろうといふので、妹ののどをつつきつてみた。

そしたら、妹が、自分と同じものを食つていることがわかつた。そのため、姉は、そのつぐないのために、鳥になつて一日に八千八声鳴くといふ。

ホトトギスは、鳴くのがいそがしくて、子供を育てられないの、モズがかわりに、ホトトギスの子供を育ててくれるといふ。

モズは鳥の王様といふ。かわいそだといふので、モズは、ホトトギスの子供を育ててくれるのだといふ。(中山字原)

長い話(その一) 蛇の伊勢參り、蛇が伊勢參りに出かけたが、チヨロチヨロと出て行つては帰つて来た。また、チヨロチヨロと行つては帰つて来た。(それを何べんでもくり返す) (熊野)

長い話（その二）長いふんどしある所に長いふんどしがあつて、たぐつてもたぐつても、たぐつてもたぐつても、たぐりきれない。

「まだかい」というと、また、たぐつてもたぐつてもたぐりきれない、いくらいつてもたぐりきれない。（と、くり返す）（熊野）

はてなし話 山へ栗を拾いに行つたら、栗がボチカチ、ボチカチ落

ちて來た。ボチカチ、ボチカチとくりかえして、眠るまでしてられるから、子どもは「そんな話ならいいよ」という。（本宿）

長話 ふだん、長話をしていると、「お尻に足がはえる」といわれた。

「長話はお日待の晩にしる」といわれた。（尻高字熊野）

話の結語 話の終りに、「市がさけかった」という。（中山字原）

二、伝説

説

弘法の足跡 尻高の関田というところに弘法の足跡といわれているところがある。これは、弘法大師がここへ來たときの足跡だという。

大師が岩に足を踏みつけ、大きな穴があいたという。それが足跡のようになつていて、そこへ水が湧きだしてきて、その水をいばりつけると治るといわれている。（尻高）

弘法の投筆 弘法大師が行脚してこちらへ來たとき、高い岩山などがあつて、非常におもしろいと思って、その岩に

一仏成道

観見法界

草木園土

悉皆成仏

と書きつけた。ところが、書きつけたあとでそれを見たところ、一点の字の画が落ちていたという。大師は並木というところまで来て、筆に墨をつけて、その字の足りないところを、筆を投げておぎなつたといふ。それで、そのことを、弘法の投筆といつようになつたといふ。なお、そのとき大師が使つた硯石もあつたが、道普請のときにこわしてしまつて、今は無い。（尻高）



鏡々湖（尻高）（井田安雄 撮影）

その穴だけが残つてゐる。その穴のことを、けんずり穴といつてゐる。

なお、雨乞いの時にも、神主を

頼んで鏡々湖の石宮のところでおがんだ。ムラの人がその場に参加

した。（尻高）

鏡々湖の話 むかし、尻高に与

五右衛門という人がいて、名久田

川の測へ藤を取り出しこへたつて、

藤を切ろうとして鉈を川の中へ落

してしまつた。

与五右衛門が鉈を取ろうとして、

川の中へ入つて行つたら、川はま

すます深く、川の中にお姫様がい

たつうんだね。そして、その与五

右衛門を大変よくしてくれたとい

子持山の話（九十九谷伝説） むかし、弘法大師が子持山へやつて、谷の数を数えていた（谷が千谷あれば寺をつくるわけだつた）。

ところが、九十九谷しかなくて、一谷たりなくして寺がつくれなくて、

弘法大師は高野山へ行つたという。（中山字原）

鏡々湖の祭り 鏡々湖のところに石宮が建つてゐる。かつては、毎年五月五日に、ここでおまつりをした。神主におがんでもらい、ここに赤飯を供えてから、鏡々湖に赤飯（ホカイに入れて）を納めたといふ。その年の平稳無事、五穀豊穣を祈つたもの。

鏡々湖には大きな龍が住んでいて、度々天にのぼつたという。天にのぼるとき、勢いをつけるために尾で岩を搔つた。その勢いで天にのぼつたという。岩には大きな穴があいて、その穴の中にいつも二つの玉が入つていたと。

ところが、いつの時代だかに、その玉がぬすまれてしまつて、今はその穴だけが残つてゐる。その穴のことを、けんずり穴といつてゐる。

うので、与五右衛門はそれですうつといで、もう、よくよく駆走にもあきて、家へ帰つたつうんだいね。

そうしたら、家でお葬式をしていたんだね。与五右衛門が誰がなくなつたんだと聞いたら、あんたがなくなつたんで、三年もたつといつたんだって。三年忌を今日するところだ、といったつて。それで、そこにいた人が非常に驚いて、これは与五右衛門がお化けになつてきただろうと、ムラの人は非常に驚いたつて。

ところが、与五右衛門が、実は、これこれこういうわけで、川の底の御殿で、歓待にあすかつていて、毎日楽しい思いをしていたが、家が恋しくなつて、今日帰つて来たと。ところが、なんだがな、供養をやつているんで驚いたつて。

ムラの人たちは、与五右衛門がお化けになつてあらわれなんじやないかと、一度は驚いたが、坊さんがお経をあけて、これで、化け物はないなくなるんだといった。与五右衛門は不思議に思つて、そんな馬鹿な話はない。おれは、今日こうして、今帰つてきたんだ。三年もたつてゐるとは驚いたと。

そこに立ちあつていた坊さんが、お経をあげたかなんだかしたら、本当の与五右衛門ということが、そこにいた人たちにわかつて、大喜びをして、今度はおまつりのような宴會をしたつて。

そういう話があるんだね。(尻高)

槐賃伝説 もかし、祝儀不祝儀の際に、姪々ガ瀬へ、膳椀を借りに行くことになつていたつて。

たとえば、膳椀を一人分貸していただきたいと、口でいって頼むと、姪々ガ瀬の岩の上にそれだけの膳椀が揃えてあつたつて。それを借りてきて使つたつて。

ところが、あるとき、例のとおり借りてきたのはよいが、膳だかお椀だかを一つこわしてしまつたつて。それでなしに行つたところが、白竜がどこからかあらわれて、すごい目でその人をにらめつけて、も

うおまえたちにはかさないからそう思え、不届きなやつだといつて、それからのちは、いくらおねがいしても、貸さなかつたつて。

それで、ムラの人はそのため、不自由したという話があるんだね。(尻高)

鎧々湖 関田の石古根に近い所に、むかし滝があつた測がある。そこから竜宮へ通じていたといい、むかし膳椀を借りに行くと出してくれて貸したという。ある時

借りた者が一枚いたため返さなかつたら、それからいつさい貸さなくなつたといふ。(熊野)

添わづか森 添うが森は尻高と中山の境のあたりにあり、添うが森は尻高分にある。

小太郎瀬に身を投げて死んだお姫様親子の話を聞いて、ムラの人は氣の毒に思つて、森に親子を葬つて、お宮をたてた。それで、いやな縁談とか、いやなことを

などと二へお参りをすれば、やめさせてくれるという。目的を達したときは、鳥居をお札にあげた。それで、いざを添わづか森といつて



添わづか森 (尻高)
(井田安雄 撮影)



添うが森の石宮 (戸室)
(金子雄一郎 撮影)

また、べつのところにお

姫様をまつてお宮をたてた。そこにおまいりをすれば、頬いがかなえられるという。そのお宮の縁の下の土をもつていて、相手にわからぬようふりかけると、目的を達することができる。その場所を添うが森とよんでいる。（尻高）

小太郎湖

判形地区の名久田川に、小太郎湖というところがある。

この湖の由来は次のとおりである。
むかし戦争に出かけた夫をあるお姫様が自分の子供の小太郎をつれて追つて来た。ところが、その夫は、仲間に武士の群れに連れてしまった。そのため、仲間に申訴ないので、頭を剃って泉照寺の坊さんになってしまった。それで、お姫様が会おうとしても、おれは仏門に入ったんだから、会うことは出来ない。

それで、お姫様は、泣く泣く、一子小太郎を連れて、その湖へ身を投げて、死んでしまったという。お姫様の連れてきた子供が小太郎というので、その湖を小太郎湖といいうようになったという。（尻高）

常盤の塔

常盤御前の墓といわれる石塔が塔ノ坂といわれる所にある。



塔ノ坂
(北之谷)

固くなつた所の中から桜の根っこが出た。「光林寺の桜」と言つたからここが寺のあとだと思われる。（火の口）

すずり石

法樂寺の後の岩に弘法様が経文を書いた時、点を打つたの

を忘れて、弘法様の足跡のある所から筆を投げて、点を打つたという伝説がある。間は約2kmも離れている。弘法様の足跡にたまつた水をいはに付けるといはが取れるという。（北之谷）

要塞 小屋（地名）に尻高の要害城があつた所を、ユウゲエという。

女の人の因縁烟があり、そこで昔、腰元が死んだので、烟を作ればたるといわれ、木を植えてある。曲輪つきの山城だったので、地名に

観音曲輪、木戸脇、宿脇などがある。（北之谷）

八か寺 舊、尻高城を建てる時に、八か寺が無ければ城が建てられなかつたといい、八つの寺がある。（熊野）

塙原太助の接待茶屋 中山峠にある。その家には太助の朱塗の位牌がある。その位牌は、今は新田の中野一郎さんの家にある。中野さんは茶屋と親戚であった。太助は沼田を通つたというが、ここを通つたろうといわれている。太助は、茶屋で世話になつたお方に、茶釜と金を贈れ、この茶釜で通る人に接待してくれと頼んだといわれている（本宿）

俵藤太の植えた杉 三島神社の境内にある。（本宿）

中山神社の氏子はゴマをつくらない 中山神社の神様がミョウガのからすべつてゴマの木で眼をついたのでつくらない。中山生まれのものは片目小さい。（新田）

大水が出た時、なめつ田（土の層が

源氏の伝説が残る。（北之谷）

光林寺のあと

地面に耳をつけ聞いていた。毎晩なので恐しがつた。みんなが

それは永宝八年信道貞庵大師（ごぜ）の墓で大正十二、三年頃掘つて見た。あとではムササビの鳴声だとわれた。（五箇）

ウナリ仏 生き仏の行人塚が、唸り出したことがあつた。みんなが

道祖神（その一） 道祖神はきょうだい夫婦という。（あるいは、心

むかし、いいきょうだいがあつて、おながいに嫁と婿をさがしに出かけた。一人で全国をめぐつて、あるとき、でくわして、それ

で夫婦になつた。ところが、一人はきょうだいであることがわかつた。



道祖神(尻高)
(井田安雄撮影)

そのため、みせしめとして、道端に立たせられるという。また道端に立て、道教えをしているともいっている。(中山字梅沢)

道祖神(その二) 道祖
神はきょうだい夫婦という。

むかし、兄妹があつて、あにいのほうは、美人をみつけようと思つて出る。妹のほうはいじ那さんをみつけようと思つて出る。(中山字原)

三、世間話

怪力馬之丞 尻高に馬之丞という大力持の者がいた。

あるとき、名久田川が氾濫して、熊野というところで、名久田川にかかる橋が落ちたと。そのとき馬之丞が、それじや、おれがいいことを教えてやると。それで、ムラの人たちが、どんなことだと不思議に思つたところが、やがて、一〇人でも持ちあがらないような石を、南山から背負つてきて、その石を橋にかけた。(尻高)馬之丞 関田見沢の平泉寺に馬之丞という強者がない。沼田領の本宿橋の石橋をひとりでかけたという。立白などを作るので、太い木から二つ取りに頼んだのを、三つどり分にして、山から一人でしょつて来たという。山田川の橋普請の時、水車が邪魔だから片付けろといふと、山田川にぶん投げろといった。

干草刈りの手伝いに出て、朝飯と昼飯を一度に食つて山で昼寝して

いて、カチ荷を担いで来る時は草が動いているほど狙いだ。(熊野)

海史坊 幕末のころ、人をあやめたため、頭を坊主にして北之谷の薬師堂に逃げて来た人がいた。風のようになって、風のようになつて、逍遙を楽しんでいた。追っかけたら屋根に登つて逃げた

人がだが、剣術が上手で、話が残っている。若い者に向かい、いつ打ち込んで来てもいいといつて、追っかけたら屋根に登つて逃げたりして身軽だった。若い者がクルリ棒でこなし物をしていた時、たた

く棒の間をくぐつて返しことをしたという。(熊野)

力もち 本宿の小野儀衛門は石を原の立石という所まで持つて行けばくれるといつたので持つて行った。途中石でかけたところができたが、その重さが二十貫あったという。(新田)

越後屋のおじいさんは、越後から来たマサゾウをつれて渋川のわた

しにさしかかった時四十二貫ある石をかつがなければ、わたるのに金を出せといわれて、「こつらの、ここに置いておけばじやまになるから」と言って川に投げた。(新田)

こうできさま 朝草刈に出かけたけれど、山に着いてみたら鎌を忘れて草を刈つて背負つてきた。力が非常にあつたんで、いまいさまとれてしまつ、こうできさまは少々困つたが、棒があつたので棒を使つてしまつた。(五領)

こうてつぼう 一年中鉄砲を打つ人がいる。禁じられているのだから、どうでも止めなければならない。本気で聞いていたら、それは、でつぼう(うそつき)のことだった。(五領)

飯が仕事をする むかし、作番頭は、山へメンバ(弁当)を持って行って、一番先に、それに箸をさしてみて、弁当鉢(メンバ)から箸が抜けなければ、飯が一杯はいいているので、仕事を十分したといい、箸が抜けた場合には、仕事はちゅう(中途半端)にしたという。(中山字梅沢)

作番頭は、「飯が仕事をする」つうから弁当を山へ持つて行って、本につるして置いて、自分は昼寝をしていて、

「一日たつても、飯はすこしも餘なかつた。」

（中山字梅沢 大正三年生）

「アズキトギが出るといった。」

（中山字原）

「アズキとこうか、人とつてくおうか、ざっく、ざっく」といった。

主人に「飯が仕事をする」といわれた番頭がいた。

（中山字原）

この番頭は、めんぱにめしをつめて、はなけうないに行き、エンガの柄にその弁当をしばりつけておいて、自分はなにもしないでいた。

うちへ帰つて来て、主人に「めしが仕事をするというのはうそだ」といつたという。（中山字原）

やめんさあ 悪いことをするとやめんさあがくるって言つた。やめんさあは正義の味方で子どもなんかおつ放り出して逃げると、逃げた者を追つかけてくるそだ。おかんば沢によくいたそだ。（北之谷）

（中山字原）

山犬様 山犬のことをヤメンサアと呼び、オカンボ沢にいたという。子どもがおおく泣くと、取つて食われるぞ、とおどかしたものである。

（中山字原）

山犬は正義の味方で、山道などで行き会つて、子どもを置いて逃げ出

すと、逃げた方をおこるという。（北之谷）

（中山字原）

見越シ入道 イタチが化けて、見るほどに大きくなり、のどに食いついて血を吸うという。下の三本辻に出たという。（北之谷）

（中山字原）

ムジナとタヌキ ムジナとタヌキは同じだという。（中山字原）

（中山字原）

怪音 昔の人は大きい音も聞いた。山小屋にいると、夜、えらい音がしたので、小屋がぶれるかと思つて、アシタになつて見たら、何でもなかつた。（北之谷）

（中山字原）

モミの木 昔、夜になると、若い女の泣き声がしたり、木の枝から生首が下がつたのを見た人がいる。（北之谷）

（中山字原）

かくしばあさん 子供が夕方おそくまで、かくれんばをやつてていると、大人が、「かくしばあさん（かくしばあともいう）」にかくされるから、お今までかくれんばをするな」といつた。かくればは昼間やれといつた。（尻高字熊野）

（中山字原）

アズキトギ 子供が遊びに行つて遅くまで遊んでいるのではないと

（中山字原）

四、謎

謎かけ 謎かけは何人かの者が集つてやつた。

（中山字原）

「謎かけすべえ」といつてやつた。

「謎をだすときには、『謎なあに、葉つ切り包丁、切り包丁』

というと、

「まないた」

と答える。そのあと、題を出して解いてもらう。分からぬ時は、「降参」という。そのときは、謎をかけた者が答えをいう。答えられなかつた者が、次の問題をだす。それをくりかえして、謎かけをした。(中山字梅沢)

なんぞをするときには、「なんぞなんぞなあに、なつきり包丁、きり包丁」といってからはじめた。(中山字原)

なぞなぞをはじめるときには、「なつきり包丁、切り包丁、おつそつれて(そろえて)ちよっきんしょ」といった。(五領)

謎かけの例 次に、今回の調査した謎の例をあげてみる。便宜上ア

イウエオ順に配列した。

朝早く起きて細道通るものなあに……雨戸(梅沢)

家の中の力持……白(五領)、かぎ竹(原)

家々の大てへ……すえふる(風呂)

池にそり橋十五夜お月さん……ほうろく(新田)、鍋(原)

池にそり橋だんごちゃん……鉄瓶(梅沢・原)

一本道わらくわえて来るもの……むじろ織りのさん(原)

家中の大まくれえ(大食い)……唐箕(熊野)

家中の大やきもち……わらたたき石(五領)

家中のひびきらし……あらかべ(原・五領)

上で大水、下で大火事……すえひろ(据風呂)(五領)

おさんどんのケツから出たり入りたりするもの……かぎ竹(五領)

お竹さんのケツから出たりへえたり……かぎ竹(原・新田)

きつてもきれない五本の指……兄弟(原)

きどう、かねどう、かなくりどう、いそいで走る奉公人……鉄砲(新

田)

白壁土蔵にとばうなし……豆腐(梅沢・原)

竹にチン車にギッチンバツタシ……そろばん(熊野)

でちり男に長わきさし……ひしゃく(新田)

菜の上にクルミの実一つ……なぐるみ(名胡桃のこと)(五領)

一つのけさを一人で掛けているもの……火ばし(新田)

ますの中にボタン一つ……いろり(新田)

みそ玉一つに穴六七つ……顛(新田)

五、謎

人事関係の謎 日常生活一般に關係した謎をまとめてみる。いわば生活の知恵的な内容をもつたものである。

・ 小豆は馬鹿に煮らせろ(小豆を煮るのにほもしたり消したりでもいいということ)(中山字原・本宿)

・ ヒエめしは早く食え(ヒエめしはさめるとまずいからいつたもの)。(中山字原)

・ たっくり一升(たっくり、たっくりと落ちる水)清水のこと。すこしつつ落ちる水でさえも、時間がたてば一升にもなるということ

で、一生懸命に仕事をしろということである。(中山字梅沢)

・ びつことたつこはどつちがい(びつこは遅くも来るからいいといふこと)。たつこの意味不明。(中山字梅沢)

・ 上州のべええ言葉がやんだらば、鍋やつるべはどうするべ。(中山字梅沢)

・ 上州名物かあ天下にからつ風。(中山字梅沢)

・ 親馬鹿子んじきしよう(親が子を思うほどに子供は親のことを思つてはいないということ)。「親馬鹿子畜生」ともいう。(中山字梅沢)

・早起きは三文の徳。(尻高)

・アブは益まで。(火の口)

・惣領十五が貧乏世ざかり、末子十五が身上世ざかり。(中山字原・尻高)
死なば十月なか十日(このころは米はとれるし、野菜はあるし、時期もいい。このころになくなつた人のことは、せいにんだという)。(尻高)

・親の意見とナスピの花は、干に一つの無駄がない。(尻高)

・娘三人持てば身上がつぶれる。(中山字原)

・お天道様と米はついてまわる。(尻高)

・一合ぞうすい二合げえ三合めしに五合もち。(尻高字関田)

・一合雜炊二合げえ粥、三合飯に五合うどん。(中山字原)

・一合ぞうせえ二合げえ三合めし四合だんご五合餅(これが一食の基準であるといふ)。(中山字梅沢)

・はやり神とアワめしは早いほうがいい(さめないうちに食べろといふ)。(本宿・原)

・餅は乞食の子に焼かせろ(乞食の子は、早く食べなくて、餅をやきながら、ひっくりかえしてばかりいるから)。(本宿)

・飯が仕事をする(飯をたんと食べる者は、仕事もたんとするといふこと)。(中山字原)

・馬鹿の大飯ぐい。(中山字原)

・夜繩朝藤(夜は繩をもすな、朝は藤をもすな。はやは藤でまるつたり、繩でまるつたりしたので、それを燃すことをきらつたものといふ)。(中山字原)

・うだつがあがらない(知恵おくれの子供が生まれると、うだつがあがんねえといった。また、あのは一生懸命仕事をしても、効果がすくないと、うだつがあがんねえといった)。(中山字梅沢)

・きたきりすすめ(一枚しか着物のないもののこと)。(中山字梅沢)

・一見葬札火事見舞(一枚しか着物を持っていない者のこと)。(中山字梅沢)

・一見葬札火事見舞、その他ちょいちょいお茶もらい(一枚の着物で間におわせること)。どこへ行くにも同じ着物で行く者(ことをいつたもの)。(中山字原)

・寝巻おきまきよそいきまき(これも一枚の着物で間に合せる(ことをいつたもの)。(中山字原)

・年寄とカナクギはひつこめ(あまりでしゃばるのはよくない)。(こと)。(戸室)

・はだかでバラしようか、役原へ嫁に行くか(どちらにしろ容易でないことだ)。(役原)

・はだかの嫁(はだかでバラを背負か、森原の〇〇〇さん家の嫁に行くか)といつた。それは、仕事に使うのがはげしかつたからといふ)。つまり、重労働をさせられるからどちらにするかとのたとえ話)。(新田)

天候関係の諺 天候に關係した諺をまとめてみる。

・虹は川から川へかかる。(北之谷)

・朝虹があると天気が崩れる。(北之谷)

・浅間山の煙が北へ崩れると降る。(北之谷)

・夏北風は常降りのもの(長じけのきざし)。(北之谷)

・北西の雷はすぐこちへくる。北で鳴ると東の方へ行く。(火の口)

・日照り蜂(今年のようによく照る年はハチがいる)。(火の口)

・蜂が地面近くに巣をつくると台風がくる。(火の口)

・馬鹿と雷は中山からくる(これは名胡桃の人のいつたもの)。(中山字梅沢・役原)

・馬鹿とオカシダチ(強い雷)は入須川からくる(乾の方向からくる

雷は早いので、烟に出ていて逃げるのに急がしい)。(北之谷)

・寒九の雨(お正月のころに雨が降ると、寒九の雨といつていいとい

う。（尻高字関田）

・十三夜に疊りなし。（尻高字関田）

農事関係の謡 農事に關係した謡をまとめてみる。かつての農業の様子を知る資料としている。一部の謡には、この地域に根ざしたものもみられる。

・ナスは浅間山の見える所に作るとあたる（風通しのいいためとう）。（北之谷）

・ナスはコサに作ってはだめ。（北之谷）

・ヒエは野バラの花ばかりが蒔きしん。（新田）

・苗間桜（彼岸桜）が咲いたら苗間をつくれ。（新田）

・南山の雪の消えきらねそうちごぼウを蒔けばはずれない。（新田）

・大豆は日がかけつからいつまでも明るいところがいい。（新田）

・ツツジが咲く時田植をしろ（このツツジのことを田植ツツジといふ）。（新田）

・苗半作（苗がよければ稲はいいといふ）。（中山字原・尻高）

・農の五月（田植時代が一番忙しいことのたとえ）。（尻高）

・桃栗三年柿八年、柚子の馬鹿が十八年。（尻高）

・土用布子に寒稚子（桑の手入れの方法をいつたもの。夏は桑の根元に土をかけておけ、冬は根を掘りだしておけといふこと）。（中山・尻高）

・桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿。（尻高）

・照りゴマ。（尻高）

・麦は十七を刈れ（麦は早刈りすればうまいといふこと）。（中山字原）

・稻の花をしおって草をとれ（稻の花は苦にならないといふこと。稻の花をさかりでも、草をとることが大切といふこと）。（中山字原）

・木もと竹うら（木や竹を割るとときのコツをいいたもの。木はもとのほうから、竹はうらのほうから割ればよいといふこと）。（中山字原）

・肥岸すぎての妻の肥。（中山字原）

・曲り八石くねつて九石、まづくぐ植えつけりや十石（むかし、繩を

ひづばつて田植えをしたときのこと。まづすぐ植えれば沢山とれる

という）。（中山字原）

・南山が鹿の子のとき、牛房をまけばはすれる（鹿の子とは、山のてつべに雪のあること）。（中山字梅沢）

・ここみなたとそり鎌（柄のすげ方をいつたもの）。（中山字原）

六、比喩・その他

オオクマドンボミテエダ オオクマドンボは、行つ来たりして飛ぶので、道を行つたりしている者のことをいふ。「オオクマカエレ、クマカエレ、三里イッテ、マタカエセ」

アワシマサマサミテエダ はろを着ている様子にいふ。

テラノニンソクノヨウダ 仕事をぶらぶらやつてゐる様子。

トンビノハネノヨウダ 御祝儀のあと、仲人の所へ、おこわをヒトホケエ持つて行く。それを「トンビノハネガ、オリタヨ」といつて近

ホケエ持つて行く。それを行しすくなる。

ワタリゲエノヨウダ 建前の時食べるワタリガユ（小豆がゆ）は柔

いので、かゆの柔いのをいふ。

イチゲンサンゼンキノヨウダ 一見の時、お茶が出て座づけが出て本番

になるが、どれもごく少しずつ出る。（以上本宿）

ニワトリ 早寝早起のもののことは、ニワトリといふ（中山字原）。

ヤンカンジ ゆずの子供のことは、ヤンカンジとか、内弁慶といった。（中山字原）

日陰のミニズ おとなしい子供のことを、日陰のミニズといつた。

世の中はタイコたたくな笛吹くな、獅子舞う人の後足になれといふ。頭になればいも頭だつて容易じやねえ。（新田）

かけすなげす 両方どっちも、どっち。同じようなものだの意。（五領）

栗けえ（栗）の煮えたつたよなことをいうな グツグツいう人に

対してい。（本宿）

大黒柱と小黒柱 夫婦であるとい。その家のカナメになる。（本宿）

うまいのはムジナ汁、ありがたいのは善光寺。（本宿）

ネンジユウ 沼田の川田にネンジユウという所がある。今井という

所と縁組する場合、ネンジユウを通らないでいく。「年中いまい。」と

いう訳である。（本宿）

きたままごろり・北国のかみなりともに一枚しか着物を持つてい

ないことをいつたもの。

北の海から来るかみなりのことを、きたなりとい。着たなり（着

のみ着のまま）と同じい方なので、両方の意味をもたせたものであ

る。それを応用して、「きたなり」「こりだから、きょうのかみなりは大し

たことはない」という言い方をする。（中山字原）

糸井貝野瀬屋づくりやよいが、蓋のふたとりや、鬼が出る（中山字

原）

なにがよいと女によばい、男後生産寝てまちろ。（中山字原）

地口 むかしから「ソバと水のほらをふくのはお里が知れる」とい

う、水の出るところと、ソバのうまいところは、山の中であるとい

ので、そういわれた。（中山字梅沢）

役原にすぎたもの 一つは半鐘かね。二つ目に、武田兵部、三つ目、

ししのあたま。（五領）

名久田の学校ぼろ学校細くて長くてさつまいも。（戸室）

子供の悪口 むかし、子供が悪口に次のようにことをいっていた。

おつちやんど……ちだい、中山だい。

商売なんだい、炭焼だい。

道理でお顔（おけつ）が真っ黒だ。

おつちやんど……ちだい、中山だい。

おかずはなんだい、ひいめしかい。

おつちやんど……ちだい、中山かい、商売なんだい、炭焼かい、弁当は

何だい、冷めしかい、どうりでおけつが真黒だ

悪口 「かみこ……（役原のこと）の奴らはヒエメシ食つて身が軽いか

ら石を抱いて風呂にはいれ」（役原）

俗謡 「ミカン、キンカン、酒のカン。親のセツカン、子がきかん。

相撲とりは裸でも風邪ひかん」（戸室）

トンビがでてくると、「羽がなければミをおろせ。」と子供たちがい

う。（本宿）

七 方 言

ムシ……敬語で目上の人に使う。

むらさき……醤油。夕方五時すぎるとい。

なみのはな……塩。右に同じ。

ふきと……ふきのとう。

ふうき……ふき。

ゆて……湯に入る時使う手ぬぐい。

おろぬく……野菜など程よく抜きとること。

さらあさって……三日後のこと、あした、あさって、さらあさって

とい。

あのとおや……あのころは

おばんし……台所仕事

ふろう……いんげん

はたけいも……里芋

じょうや……たぶん

じょうや様……地主のこと

はだっちやしない……特別にはしない

にんにん……めいめい、誰もが
へら……舌

こわい……大儀なこと

しばらく生き……以前

じばを切る……自腹を切る

中途はんと……ちぐはぐなこと

おねええし……くり返すこと

照りよわる……日照りが続いたあと黙ってきた時言う。

だぶろく……どぶろく

はずつて……取りのぞく

ようはん……タメし

あんじやあね……心配ない、大丈夫

えぶ……歩く

たな……店

のめしもん……急けもの

おかた……妻、おかみさん

おつづられる……叱られる

買いごやし……買った肥料、金肥

のう……おさら

けなりい……うやましい

ぶつ……さやえんどう

おつす……わな

はんさん……流産

めごんせ……家とかものがこみいっていること

まなんごろう……お玉じやくし

むぐつちやあ……くすぐつたい

いいかん……いい加減に

おおまくれそ……大食漢

すぐつ……早道で最短コース

そらつきかず……人の話をよく聞かないこと

おてえろ……ヒザをくずして樂にして下さい。

とおし……いつも

おどす……叱る

飛行機まんじゅう……飛行機がそばを通ったくらい、少ししか甘くないこと

あやんご……お手玉（以上、中山・尻高）

オタマジヤクシ……バツコ（判形）

ゴウリキ……力持ちのこと。

オオメシグイ……大食漢のこと。

クライヌケ……大食いで仕事をしないこと。

スズスリナ……アラゼミのこと。

ミイヨン……ミンミンゼミのこと。

天保錢……頭の足りない人のことを天保錢といった。（以上戸室）

カマキリ……葉っぱの中に白いわをつけてその中に卵を産みつけ

る。カラスのキンタマという。（火の口）

尺取虫……クワックイがなまつてカックイと言った。（火の口）

こいど……川があつて橋のないところを渡る。（五領）

スグジ……早道、真つすぐに踏み固めた道

ジョウヤ様……田を貸して、小作料をとる人をいう。地主様のこと。（熊野）

トウジユウ……当主のこと

ヒネオジイ……曾祖父（火の口）

ショウゼン鳥……セキレイ、馬の神様ということ。

マンゴ……オタマジヤクシ

カツトイ……尺取虫

カラスノキンタマ……カマキリの卵（以上、火の口）

ネッポウ……脛のことをいう。（本宿）

スマッコ……隅のことをいう。（本宿）

「エトリ……カマキリのことをいう。よくイナゴをとる。（本宿）

ムシ……この辺では、「そうだムシ」などと使用する。なんとなく聞

きよい。高山小唄にも「ムシ」が入っている。ムシは目上の人に對し

て使う。尊敬に使う。沼田の川田町では「そうだメ」と、「メ」を

使用する。（本宿）

ハヤス……桑を切ることを、桑ハヤシという。また、正月に、のし

餅をきることを、モチハヤシという。ふつうの場合は、餅を切るとい

う。（中山字原）

ゾガテ……植物を交せて作ることをゾガテという。例えは田圃にヒ

工があると、ゾガテが威勢がいいとか、ゾガテの方が元気がいいなど

と使う。（本宿）

アブ……ブーン、ブーンと鳴く。

蚊……カーン、カーン。ビーン、ビーンと鳴く。（判形）

蚊……カーンと鳴いてくる。（火の口）

オタマジヤクシ……バッコ、足の出ないのは、マンゴロウ

セキレイ……オショウヒン、川端の崖の壁土のような所に横穴を

掘って住む。生魚ゲエロ、カジカ、ドジョウを捕る。

オソウデンは、淡黄色で歩きながら尻尾を上下に振る鳥、土の中に

卵を産む、グシの芝の生えた所の土の中に穴を掘って住む。益鳥で、

これを捕ると馬が病気になるという。（判形）

オヒキガエル……判形ではドンピキ 中之条 マンカチ 糸之瀬

ママッコ……炎をすえたあとみたいに、葉の中に小さくでる。若芽

を揃んでうでて醤油をかけて食べたりゴマあえにする。（新田）

八、命名

不動免
八幡田

田の名（北の谷）

地名 西沢、古戸（堂）、平林、宿裏、赤坂、西清谷、ぬるゆ、前峯、

広町、御干場（おほしば）（新田）

十日平（稻荷）の下に稻荷様がある。（新田）

地形名 ヤチ、じめじめしたところ。

南方の山のうち中山峠東は子持山があるが、峠西は東から南山中之

岳、十二岳と呼ぶ。これらは小野子山である。（中山字原）

山の地名 「山犬の巣」「むじなくば」「馬入らず」「オイヌサマ」な

ど地名があつた。（新田）

耕地名 下の宿、城内、城外、天神、西五領、山室（やまむろ）橋

倉、山口、十二前、清水、塔背戸、倉畠、笠原などがある。（五領）

本宿の小字 権現、十二平（上・中・下）横町田中、上宿、下宿、

寺前口。（本宿）

チヨンマゲ

マゴさん、この人は、大正になつてもチヨンマゲをしていた。チヨンマのマゴさんといわれていた。（本宿）

九、わらべ唄

子守り唄

ミツはよい子だ

ねんねしな

ねんねしておきれば
乳あげる

お乳のではなが

いやならば

お米のごはんに

ととそえて

柳のお著で

さくさくと

ミツはよい子だ

ねんねしな（新田）

ねんねんこもりはつらいもの

雨風吹けど宿はなし

人の軒端で日をくらす

家いっちや叱られ子にや泣かれ

おかさんんにやよこ目でにらめられ（役原）

泣くな泣くなキジの子

泣くとお夕方にとられるぞ（役原）

ねんねんねこのけつ

ガニがはいこんだ

一つだと思つたら

二つはいこんだ

おかさんんがたまげて

お茶こぼした（役原）

まりつき唄

一番はじめは一の宮、

二また日光中禪寺、

三また佐倉の宗五郎、

四また信濃の善光寺、

五つは出雲の大社、

六つは村々ちゃんじゅさま、

七つは成田の不動様、

八つは八幡の八幡宮、

九つ高野のこうぼう様、

八つは八幡の八幡宮、

九つ高野のこうぼう様、

十で東京心願寺。（五領）

手まり歌

てんとさ

てんとのおしょさま

あらなんだ

白鳥 黒鳥

新倉街道 通る時は

お山が三げん 小山が三げん

高崎やしろで

奴が来つき

小熊がはね出し

いちょめこさっさ（本宿）

とんとん叩くは 誰さんじや

新町米屋の おこまさん

おこまは今頃 何に来た

草履が切れたで 買いに来た

今頃草履があるものか

はっかけ下駄でも はいてぎな（本宿）

郷土芸能

一、尻高の操人形芝居

概要 大字尻高に伝わる操人形芝居は群馬県の重要な文化財としてカラなどの有形のものを昭和三十年一月十四日に指定されているが、他の道具や技術その他の括したものも指定対象になっていない。県

下の操人形は一人遣い、「二人遣い」、「三人遣い」の三様式があるが、尻高人形は一人遣いの様式であるが、利根郡利根村青木砂川人形、沼田市沼須人形などと比べると人形自体が大きい。それは他の一人遣いと違つて、「差し金」とよばれる補助具をつけるため、人形の動作が三人遣いに近い動き方をする巧妙なものだからである。この型式のものは埼玉県秩父市の横瀬人形にも見られるし、県内でも尻高の近くの吾妻郡東村新巻人形にも共通している。しかも由緒がはつきりしており、また現在も上演できる点で貴重な文化財である。終戦直後は県下あちこちで操人形が動いていたが、その後の後継者がなく、姿を消そうとしているなかで貴重な無形文化財である。

由緒と来歴 尻高人形は系統的には「豊松流」である。豊松流は江戸と関西の人形芝居の大きな中心地の中間に位置する名古屋市から起きたといわれる。元祖は豊松伝七という人物で江戸時代中期の人形である。この豊松流の人形座が地方巡業しているうちに各地に定着したのか、伊勢参りなどの副産物として地方に持ち運ばれてそこに土着したのか、一概には言えないが、関東地方では埼玉県北埼玉郡新郷村と企都松山町東平に豊松流の痕跡があると伝えられている。本県では勢

多都赤城村津久田の上の森八幡宮に掲げられている人形芝居の江戸時代の絵馬に描かれた人形遣いに豊松の芸名を冠しているから、本県にも豊松流が伝播していたであろうことは推測に難くない。尻高の人形は豊松伝三から伝えられたことは尻高人形一座の錦松会に保存されている伝授書で明らかである。伝三は初代伝七、二代伝次、三代綱七、四代伝三となっている。

免状

豊松家流儀、窮理雖為秘事、足下數年流儀深仰御行修、因不浅、
依之今令伝授之事、他言有之間敷者也

豊松家之祖

豊松伝七
豊松伝次
豊松伝三（花押）

明治十九年
仲春（二月）吉日

豊松与伝次殿

芸名与伝次は尻高小字火の口の山田与平という人である。錦松会の元座長の故町田亀吉さんの話によると、伝三郎（豊松伝三）が大きな荷物を背負って与平の家の草鞋を脱いだが、その晩操人形芝居を村人に公開した。これをみた村人は、義太夫は前からやる人がいたので、一人人形芝居をやってみようということになり、伝三は頼んで夜昼人に形の使い方の指導を受けた。こうして、伝三は与平の家に一ヶ月ほど滞在した。村を去るとき、伝三は人形、衣裳、舞台一式を村に譲った。

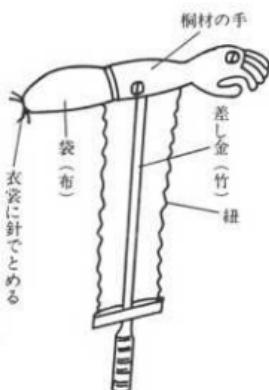
それが尻高人形のもとになった。伝三郎という人は阿波國か大阪辺の人だというので、村では阿波人形とか伝三人形とかいっていた。それから数年後に伝三がひょっこり村に現われ、村人がすっかり上手になつたのを見て伝授書を書いて座頭格の与平に与え、芸名も与伝次と名乗らせたという。明治十九年のことであった。村人は豊松座という名で一座を結成した。明治二十三年に豊松伝三が三度目の村訪問となつたが、そのときは三人違いの人形を持ってきたそうである。

豊松座はその後ますます盛大となり、村内はもちろん近村にも招かれて興行したが、昭和期に入りだんだんやれなくなり、昭和八年に人形ほか一式を中之条町の古物商野田源太という人に金十一円で売つてしまつた。そのことをきいた町田亀吉さんは、二代目座長の古伝次（中島春吉）と金工面をして買戻しにゆき、結局金二十五円で買い返したもののが現在の一式である。それから町田さんが座長となり、座名を錦松会と名乗り、ときどき上演したが、第二次世界大戦中は休んだが、戦後復興して現在に至つた。町田亀吉、荒木大太郎、割田勇三といつた有力者もすでにないが、現在は中島寅氏はじめ次の世代が完全に継いで現在保持されている。

カシラ 操人形の主役はカシラである。尻高人形のカシラはいわゆる「豆人形」で、頭頂より顎までの高さが九センチから一二センチ位の小さなものである。大部分は一〇・五センチ位である。小さくならぬ塗は三人違いと同じに水に溶いた胡粉を何回も塗り重ねたもので光沢もある。彫りも深く見事である。種類は立役、老け役、女役、娘、茶利などすべてで五十個ほどある。顔面の難などは線彫りになつて、巧緻のものが見られる。耳から耳の周囲が一〇センチぐらい。眼は逆「ハ」の字、口は「ハ」の字型であるが、女役のカシラはそれほど極端ではない。目、眉、口の動くカラクリのカシラもあり精巧である。カシラは桐材を使つていて、芯串はカシラに付着し、長さは一二センチほどで、下位置にコザルが付いており、左手の指で操作すると目や

眉毛や口が動く。

差し金 尻高人形の構造上の大きな特色はこの「差し金」といわれる補助の用具である。一人道いによる人形の手の動きを自由に多方面の表現ができるよう、人形の右手と左手に連結している竹材でつくられた細い棒である。長さは平均四一センチ位ある。使い手は左手で



人形の芯弾を握り、右手で二本の差し金を持ち、人形の右手と左手を操作する。差し金にもコザルが付いており、手先の指を動かすことができるようになっている。複雑な人形遣いの場合は、いま一人の補助器を使うこともある。差し金の上から二九センチほどのところに付いているコザルを引くと、手の先の指が開いたり閉じたりする精巧の機構になっている。これにより、突込み式の一人遣い人形のように、両手の可動範囲が局限せられるのと違い、三人遣いのような大振りの人形操作ができる。地元ではこの差し金を「さし」としている。肩板と胴輪は桐材でつくられている。カシラと肩板は固定しない型式である。

特殊なカシラ 歌舞伎芝居や人形芝居では演じものによって動物の狐、猿、竜などのカシラを持っている。尻高人形にも、日高川の安珍と清姫に使う竜や、幽靈のカシラ、白狐のカシラなどがある。珍しいのは木でつくった陽物があり、昔は脚本にない奇奇的な仕草に使われたというが現在は使われていない。

舞台 尻高人形は広大な舞台で上演しない。一般の民家の座敷を利用してするのが原則である。したがって、舞台は座敷の中に組み立てつくる組立式舞台である。組立式であるから平素は分解して格納し、上演の際に組み合わせができるようになっている。組み上がったものは間口（正面）が二メートル二一センチ、奥行が一八二センチ、高さ一八二センチ、前面の腰の高さは九一センチである。二重の後に背景がある重にもあり、書き割りや背景の絵柄が演じ物で変わることはない。図は遠近法で描かれている。一番奥に、「御殿」があり、奥深い感じを出すようになっている。

幕は前面の腰幕、上の水引幕のほか、舞台の袖にも張られる。照明は原則としてろうそくであるが現在は電燈を使うようになった。舟底（平舞台）は二重と書割で仕切られている。主として腰幕の上を利用しても人形を遣うが、二重のときは仕切りの下をくぐって奥へ移

動する。

人形の遣い方 県下の突込式一人遣いで遣い手は腰幕の線より上に顔を出さないで、舟底で膝まき、左手で上体を支え、右手で差し上げるようにして人形を操るが、尻高人形の遣い手は立って姿を見せる。同じ一人遣いでもこの点が大きく変わっている。遣い手は黒ニ（黒い頭巾）をかぶるものとかぶらないものと一様でない。やはり格で差別する。いわゆる三人遣いの「遣い」に当たる者は黒ニをかぶらなければ、との似ている。三人遣いでは主（おも）遣いの者は素顔を見せるのと同じである。もちろん袴（かみしも）姿である。

原則として、一人で一体の人形を操るが、左手で芯弾を背中の割れ目から差し込んで握り、右手で二本の「さし」を持つ。芯弾と「さし」にはそれぞれコザルがついていて、これを指で引っ張ると、芯弾では眉、口などが動き、「さし」では指が動くようになっている。一人でこの複雑な操作をするのは相当むずかしいとされている。しかし、「安達三三」の「袖萩祭文の場」の袖萩が三味線を彈くときにはいま一人が別に助手として加わる。この一座で最も至芸とされる袖萩の三味線弾きのくだりは絶妙である。

背景と幕類 舞台装置を飾る幕については一部記しておいたが、小さいながら地芝居の歌舞伎舞台と全く同じの大道具も備えている。二重を仕切る書割も種類が豊富であるし、二重の背景も上から吊す仕掛けで、幾通りも風景を替えて見せることができる。ことに一番奥の「御殿」は遠近法を用い、舞台の奥行きを深く見せるようになっている。幕は、「引幕」「袖幕」「水引幕」「腰幕」などがあり、古くなると「ひるき」などと染抜いた新しい幕が寄進されておりかえっている。

下座 清瑞庵語りと三味線の下座は、舞台に向かって右斜前に高い床がつくられ、そこで演じられる。したがって、地芝居のように、屋根をかけ、すぐれた下を下げるような下座敷はつくられない。最近義太夫と三味線をやる人がほとんど村に居なくなり、時には他村から招くこと

もあるという。幸い練習はテープにレコードしたものでやれるが、人形芝居はすべて義太夫の語りに応じて人形を動かすだけに練習量が自然と必要となってくるため、一座の人びとの平素の練習が大変な負担にならなくて済む。

保存の現状 維持費は、村ぐるみの保存会が結成され、各戸からの醵出金と村費の補助でやっている。人形一式は高山村西小学校の体育馆の一隅を保存庫としてそこに格納してある。

上演の期日 現在は不定期で、一月頃の農閑期を利用して練習をし、四月頃実演するが、頼まれれば老人の集いなどにも随時出演している。幸い後継者もでき、ここ当分は存続が可能である。

二、役原の獅子舞

由緒 大字尻高字役原の獅子舞は、中世の土豪尻高氏が、信仰する信州の諏訪神社に伝わる遠州流獅子舞を習わせてから始まつたといふ起源伝説がある。しかし、古い時代のことは記録や資料を欠くので明らかでない。この頃の獅子は戦国時代の戦火によつて焼失し、その後の獅子頭なども大火で焼かれたといつ。現在使われている獅子頭は幕末の弘化三年に新調されたものであるといつ。明治四十四年にカシラの大修理をし、頭部に植毛をし、中獅子の歯が黒かつたものを金箔塗りとしたといつ。もちろん「一人立ち獅子」で、雄獅子一頭の三頭によつて演じられるもので、県内に最も多い獅子と同じである。

雄獅子の一つを「先獅子」とい、一つを「後獅子」、雌獅子を「中獅子」と称している。

カシラ一般に多いマスク型で、カシラの後に竹で編んだ帽子がつき、これを踊り手がかかる。ウルシ塗で、歯や眼が金色になつてゐる。カシラの後には白紙でつくった鳥絆（とぶざ）またはホカンがついている。

曲目 赤い淨める系統の曲目、悪魔を伏する仕草の曲目、神を忠める興舞の曲目、祝いの曲目となる。道中をするときの道行きと、各戸の庭に振り込むときは別の曲を用いてゐる。特にこの獅子舞では興舞の「獅子隠し」が得別の曲目であり一般に親しまれてゐる。そのときの歌は次のようである。

今まで連れし獅子をば

これまでお山にかくし取られた

あなたも雄獅子男獅子

此の君も雄獅子

心合わせてたすね女獅子

松にからまる草葉実も

縁が切れればからみほぐるる

七夕にかりて借ぞよあや錦

錦を借りて七夕

あの山に松を育てて身をすれば

つたはよせもの松にからまる

神社の庭で舞うときの「宮入り」の曲目の唄は次のようである。

この森に鷹が住むげで鈴の音

鷹は住まねど御樂の音

此の宮は飛驒の匠が建てたげで

くさび一つで四方を締めたよな

此の宮は四方の柱は白金で

黄金ひやくだんでお庭輝く

十七の袖やたもとに糸つけて

思ひ思ひに引くや友達

次は「掛川」という曲目につく唄である。

掛川の宿の娘に目がくれて

立つに方たれぬ掛川の宿

白さきが海のと中に登寝して

波にゆられてはらはらと立つ

舞の構成 舞は一人立の三人のほかに、付人としてササラ摺りといふササラを両手にもつて獅子の間に割り込んで舞う者である。以前はヒヨットコ面をかぶつた者とオカメ面をかぶつた者が加わって演じられたという。

獅子はタツツケ袴でわらじばかりである。腰に腰太鼓をつけ、両手のバチで打ちながら舞う。舞は「道ゆき」のときは一列で進むが、先頭に大きな太鼓を持つた者、次が万燈、その後に獅子が続く。本格的な舞の演じられる獅子場では、神聖なしめなわを張った中で、囃子に合わせて舞われる。このほか、毎戸を訪れてその庭で祓い淨めの舞が舞われる。

その他 舞いの獅子は氏子の中の長男が当たることになっている。満十六歳になる獅子をやるものとされていた。しかし、もし親戚に不幸のあつた者は遠慮することになつていていた。こうした制約は獅子舞の神事的性質と深いかかわりがありがみられる。

三、神 樂

(一) 三島神社の神樂

大字中山の三島神社に付属する里神樂で、創始は江戸時代の享保七年とされている。座の数は表十二座、裏十二座の計二十四座あるが現在はその全部はやれないという。この神樂の曲目は里神樂の他の例と変わりは見られない。神事舞と興舞に大別される。特長の一つとして、囃子方が横笛でなく笛を用いる。そのために舞そのものが横笛のよう

(二) 尻高神社神樂

由緒 尻高村民が金を出し合い、慶応年間に面、衣裳その他一式を

購入して始められたが、その後廃絶したままになつていていた。明治二十二、三年頃中之条町折田から尻高の火の口に婿に来た荒木栄吉といふ人が、中之条町折田の神官から教えを受けて再興し、荒木半十郎、竹測島吉、知高慶福、荒木金作といった人びとが資金を出して新しく衣裳などを購入して神樂を再興した。その後絶えることなく演じられてきたが、昭和十二年から二十二年まで終戦を中心にはざんだ戦中戦後に休んでいたが、そのあと竹測佐太雄、竹測真一といった人たちが有志を募り再興した。昭和三十二年頃から見事に旧にもどり、林利雄、佐藤伸吉、竹測梅夫の人びとによって現在も続けられている。

座の名称と内容 尻高の神樂は現在次の二十座が演じられる。

(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
春日大神命	宇佐大神命	大野佐命	佐佐佐命													

(18) 恵比寿命・ひよう神命・河童子命

(19) ひよう神命・仲仕姫命・ひよう神命

(20) ひよう神命・河童子命
座の呼称がすべて神の名にしてゐるのが特色である。これをほかの里神樂の座の名称でみると、(1)は四方固め。(2)祓い淨め。(3)は鏡作り。(4)は鍛冶の舞。(5)は種播の舞。(6)は地神の舞。(7)は醜女の舞。(8)(5)と同じ。(9)弓矢の舞。(10)不詳。(11)(12)(13)大蛇退治。(14)媚女の舞。(15)天の岩戸。(16)猿田彦の舞。(17)春日の舞。(18)網釣り。(19)(20)該当不詳。以上からみてもわかるように、尻高の神樂は興舞が少なく、神事舞が少ないことがわかる。

四、地芝居

高山村も、近世から明治期にかけて義太夫が盛んで、昭和三十年頃までは村に六十人も義太夫を語れる人がいた。大字中山の閑賀一（芸名野沢喜遊）、星野やす（芸名鶴沢政千代）、尻高の松井ちようといつた人は特に有名だった。當舞台はなく掛け舞台であった。煙草の取扱所や公会堂が利用され、村人の手で地芝居がやられたが現在はやれなくなってしまった。しかし、尻高の人形芝居に義太夫は生かされ、地芝居は減んでも人形芝居にまた郷土芸能が生かされている。

五、むすび

高山村の郷土芸能は人形芝居のはかは「高山村誌」（昭和四十七年刊）に負うところが多い。このほか同村誌には「春駒歌」などが採録されており、かつて春駒も行われていたが現在は春駒は行われていない。本稿では民謡やわらべ唄などは省くこととしたが、参考に同村誌を併せて参照してもらいたい。

（郷土芸能・調査資料）

(一) 太々神樂

太々神樂 北の谷・熊野にあって、鎮守の春祭りに奉納した。北野谷稻荷神社（二月初午か十一日）、熊野神社（四月一日）、尻高神社（四月三日）、のちに十五日）。神樂殿は仮設で用意し、十時から夕方五時ころまで、十五、六人で演じた。二十四座あるが、天岩戸・國常立命・酒造り・鍛冶屋などの種目で、松井芳雄家に神樂記録がある。（尻高）熊野神社に組立式の舞台があり、一年おきくらいに太々神樂を奉納する。種目は十四、五種類ある。天岩戸・國常立・スサノオ・イザナギイザナミ・お夷様の魚釣り・地神様の禊詩（雄狐が開闢し雌狐が祓刈する）。鏡とき・戸隠・宇須女・天狗の掛け合いで問答をする。何のために出来来たか、天孫降臨の案内のためにと、オロ子退治など。（熊野）

(二) 人形芝居

人形芝居 初め名古屋から豊松伝三が来て教えたのを、尻高火の口の与伝次が習って、引き繼ぎに当たり矢の絵を書いて始めた。それが段々東の方へ移り閑田などでもするようになつた。（尻高）人形 尻高人形は明治のはじめころ、豊松伝三が来村して伝えたもので、昔は熊野の人も習つたが、現在は閑田や戸室の人達が継承している。豊松伝三がやつたので、伝さん人形ともいう。（熊野）

(三) 芝居

芝居 春祭りに太々神樂を奉納する年には芝居もやつた。渋川から錦枝や大黒座・岩井座を招いて興業した。村の人が人足に出て竹を寺の竹藪から伐り出して、アーチ形に組んで屋根を作り、名久田村大塚から垂れ幕を借りて掛けた。小屋掛けが祭り騒ぎの中心になつた。入沢口の田んぼに竹矢來を結んで仕切り、モミの木を組んで舞台を作つ

たが、三十一四十人で三日間ぐらいかかった。

芝居は三日契約で一日日延べをして、計四日間開演した。遠くの親戚にまで沙汰をして客を集め、木戸番を置き木戸料を十銭か十五銭くらい取つた。勧進元から、札をギョシヨして自分で払つたが、下戸の芝居で損をする芝居はなかつた。ドウギョウバライをする時、ほとんどの時余りが返つて来る。人足はソコミだから、資金は出さなくもよかつた。役者は勧進元の名主宅に、二日も三日も泊まつた。(尻高)

地芝居 昭和初年ころまで義太夫のグループがあつて、法川の錦枝などの先生が来て教えた。舞台は碓氷社の建物を利用したり、大きい家を借りて設けたが、小屋掛はない。日ごろ習つたことを見てもらうので、無料だが、お祝い金(花)が出た。出し物は太閤記・鎌倉三代記・二十四孝などで、農閑期の一月にした。(尻高)

明治初年に遠州の人佐藤為吉が来て、住みついた。この人が親方で、振り付けをしてやつた。義太夫や三味線を習い、冬稽古して、大きな家の空き屋を借りて舞台にして出演した。(熊野)
ひいき花 好きな芸人にあげる花。(新田)

四 村に来た芸人

村に來た芸能 虚無僧・神楽・猿廻し・春駒・ゴゼ。(新田)

万歳 正月が終わると名古屋から才蔵・太夫が来た。(新田)
座敷万歳は家を決めて、茶の間で行なつた。重箱に米を一ぱい入れてやつた。

台所万歳は毎戸回つた。土間でやつて見せた。本宿の江戸屋に泊つた。(新田)

万歳は三河から来た。本宿のイドヤに泊つていて貰つたものなどそこに置いた。茶の間から上つて演技したあと米一升とか、五銭や十銭もらつてゆく。一月から四月ごろにかけてやつて来た。一人組になつて来

ている。(原)

万歳は三河から。ダイドコ万歳は座敷に上の資格のないものである。

(判形)

ゴゼ 眼のよいのが先、眼の悪い方が後ろにつかまつてやつて来た。甘いミソシルをつくるのを「ゴゼの小便のようだ」といつた。(新田)
ゴゼはなかやに泊つた。後家の家に泊つた。(新田)

ゴゼは越後からきた。味噌汁のうすいのをゴゼの小便のようだといふ。(本宿)

ゴゼは、三人ぐらゐが組んで、手引きの案内で来た。毎年来つけの家に泊つて、三味線をベンベニして客を集めた。昼は軒なみ回つて歌い、夜は宿に集めて歌つた。投げ銭をやつた。(熊野)

ゴゼは、越後から回つて来た。村の家に泊りこんで歌つた。子どもたちのころ、うすいおみおつけのことを「ゴゼの小便のようだ」といつた。(北の谷)

ゴゼは六十年前まで新潟県魚沼郡あたりから来ていた。ゴゼは年配の人で手引きはオジイサンであつた。ムラの家を宿にして三味線があわせて歌をうたつた。うたが終わるとメンバがまわり、金を少しづつ入れた。うたが終ることにメンバがまわり、ムラ人が心づくしの金を入れた。ゴゼは歌をうたうので塩氣をひかえた。今でも塩氣のうすいものを「ゴゼのしょんべんみたい」という古老もある。(関田)
ゴゼは、新潟から一人一組(盲者と見える人)あるいは四人揃つて、正月の寒い頃くる。民家に泊るが毎年來るのでその家は決つていて、昔はカドヅケ歩いて米や金錢をもらい、夜は泊る家の歌を唄つた。世話役がお盆を廻してホウガ錢を集めた。一人一二十銭である。一夜に二〇~三〇人は集まつた。大正の中頃まで來た。蒲原郡柏崎の人だといつていて。(判形)

昔、新潟からゴゼが來た。ゴゼは目くらで、三、四人組になつて来た。三味線を引き歌をうたつて、五銭から十銭くらいもらつていた。

大きなマンジュウ笠をかぶり、ハバキをつけてワラジをはいていた。また背中にコウリをしょっていた。中に薬が入っていて、これも売っていた。

ゴゼの杖のことをゴゼノボウという。目くらなので手引きがついていた。ゴゼの歌は口説きが多く、また講談もやった。春駒をやるゴゼもいた。(戸室)

ゴゼは、一、三人組んでやって来た。浪曲師、船屋、軽業師、神楽、獅子舞等。(原)

祭文 かつて、リロリン、リロリンと錫杖の短いやつを持つて村にやってきた。(本宿)

祭文読みは、ほら貝を吹き、錫杖をカチカチ鳴らしながら、奥利根の方から来た。年寄りで、デロレン、デロレンと拍子を取った。(熊野)

祭文は越後から来た。(利形)

春駒 利根郡から来たが、馬の頭に着物を付けて、蚕の歌を歌つた。尻高の竹渕菊市氏が覚えている。宇妻(中之条町横尾)の蚕の先生から二十五、六歳ごろ教わったのを今でも覚えている。(熊野)

春駒は、春先に回って来たから、地元の人も覚えて余興の席でやつた。(北之谷)

春駒は、大正頃に正月、二月各戸を回り、唄をうたい、米、金をもらつていった。(新田)

春駒は名久田村大塚(現中之条町)の原沢恭次氏がやつた。(新田)

春駒は、正月一日ごろから来る。利根郡から。(原)

戸室に都屋といふ宿屋があつてそこへ春駒や墨屋(ばくや)が泊まることもあつた。春駒は小正月頃にやつてくる。渋川市の祖母島からやつてきた親子できた。母親が太鼓をたたき娘が馬の頭をもつて「のりこめ、はねこめ、春の春駒、オカイコがある。ひとはきはいたら……ふたはきはいたら……」と歌をうたつた。もらつた米を売つて金にして帰つていつた。(関田)

儀つころがし千儀、二つころがし万儀などと唱えて家々を回つた。

その他、チョボクレ、三河万歳、仁丹売り、アメ屋などが村にきた。

万歳は江戸屋に泊るとか、宿がきまつていた。(本宿)

虚無僧 尺八を吹きながら來たが、支度がよかつた。ワラで作ったかぶりものをかむつていた。(新田)

かんばら獅子 女が二、三人して來た。一人が太鼓を打つてはやしをやつていた。(新田)

越後の蒲原獅子がよく來た。子供が宿返りをする。(熊野)

ギリギリあめ 白いあめを売つた。太鼓をたたきながら頭上にタラ

イのようなものをのせて來た。(新田)

農園期の楽しみ 冬は御年貢やるゼニがありやいいつて義太夫や芝居を開つたとして遊んでいた。中之条の大塚で借りて舞台ごせえ

をした。五十人で三日もかかって小屋を作つた。入りきれない程人がきて賑やかだった。太夫さんを頼んで一の谷だの習つたりさらつたり見て見せる。(火の口)

丁半 わしが若い頃は百姓なんざしねえで丁半べえ打つてる人もいた。(○○さんは丁半の親方で有名だった。丁半は二人からできる。サ

イコロは何かのつので作つてあった。二つ出でや丁、三つ出でると半だ。わしも丁半して五両分けた。家の者には話したくなかったから内緒で返した。中之条まで炭を馬につけて出した。一回で二十銭だった。返

しきるまで容易じやなかつた。それつきりかけことはしない。(火の口)

ジッケッコウ 人が集まつた時、余興にくじを作る。カンゼヨリを人數より一本余計に作り、余つた一本が神様(お天狗様)のものとなる。十円ずつもらつてくじを引かせ、当たりくじは次の人のものとなる。鉄びんの蓋を腹にそつと当ててはると当たるという。一回当れば元が取れる。(北の谷)

すもう大会 不動様の庭で秋まつりにした。(五領)

盆踊り　九月十三日から十六日まで太鼓をたたいて踊った。盆だ、

盆がんにナスのぞうせ（ぞうせい）があまりてつこもりで鼻につかえた。」「踊らぬやは、川に流れ死ねばよい。」「踊らぬやつは、子でもはらんだが、しょうざん（流産）したか。」と言つたりしながらした。（新田）

遊び　きしやー、竹なんー、うしおい、くい打ち、け出し、こまなげ、戦争（二つ）。（五領）

あやん　「むこう横町のおいなりさんよ。ちいとおがんで横目でみれば……。」と言つてやる。（五領）

女の子の遊び　竹なんー、まり、あやん。（新田）

なまり（テンカ、キリックラ）　地面に田という字を書き、四つの領地に自分のなまりでできた人形をおき、少しほなれた所からなまりを投げぶつける。ぶつけることを切るという。田の字から出たなまりはゴイ。（五領）

返しくら（ぶつけ）　なまりがかえるともらえる。（五領）

子供の遊び　カルタ、めんこ、しようき、あやとり、まりつき、けだし、くにとり、すごろくなど。カンソウを使って、カンソウ嫁御を作つたり、トウモロコシで人形など作つて遊んだ。（五領）

男の子の遊び　すうろく、うしおい、うでずも、竹馬、碁、将棋、ねくいなど。（新田）

力石　お宮の灯籠の竿の部分（三十六貫）を組んで石段を上つた人がいる。登坂喜藤次という強力で、宮を一回りしてそとおろしたといふ。大麦の焼き穂を作る時、一握りずつでなく、一束ずつ焼いたといふ。（熊野）

力くらべ　二十三貫、三十二貫の石をかついた。（五領）

（資料）

春駒の唄

春の初めの春駒なんぞ

夢に見てさえおないとや申す
ましてこづはじようねの駒よ

年もよし世もよしお臺も当る
こがいにとてはみのの國よ

森のこうりやおの山里で
とめたる種はさてよい種よ

結城こだねか茨城種か
かかでとよはら越前種よ

三とこの種を寄せ集め
買ひ女女郎衆にお渡しなさる

買ひ女女郎衆はほめよろこんで
はかまだけなるあつあたんぞ

手にかいきりとしたためこんで
ひだりの小脇に三日三夜

みきの小脇に三日三夜

両方あわせて六日六夜

六日六夜のそのあいうちには
あため申せばぬくとめなさる

三日にみずいて四日にあおみ
五日にさざりとおいでのおこよ

おいでよければくべきはねは
そらに千しゅうちゅうまろとよりよ
やつつの風きる手にぬきもちて
ちよの小羽でそろりとはけば
一はねはいてはせんまいかいこ

ふたはねはいでは二千枚かい
みはねよはねとはきましょならば
かみにもあればかごにもあまる
あまりそろやひろまります
このおさまにはなにがなしんじよ
これより南はみな桑原よ

桑のめぐみがよいと申す

十七八なるねえさんたちが
かみはやりにこじやんというて

銀のかんざしまきえのくして
しまのまいかけはなぞめだすき

しちこ小竹のめきるをもちて
桑の若芽におてうちかけて

しんなたためてそありとこけば
ひとこきいてはめざるへつめる

ふたこきいてはおやどへかえり
おこさんに向いてあのおこちらり

このおこちらりとしんせて廻る
あのおさまのくわめすようは

ものによくよくなとえてみれば
むかし源氏がよだんのときには

こうじくりけがまきばおりて
ものや草をのにでしとこを

あさひに向いてうらやそよと
夕陽に向いてもどりやしやんと

くうのものにたようはうのものにたよ
さらばこのお休みがみゆる
しじの休みはしんじつこめて

たけの休みはたかごにこぎる
ふなの休みはふんだんかいこ
ふんだんかいこ

にわの休みはにわかにふえる
よたびの休みもなんくせなくて
なんなくせなんまぶしにのはる

まぶしにのはりてつくりしまゆは
かもやかわらや片品川の

あらせによんだる小石の重さ
重さも重しかたさもかたし

ちゆうなるやまかたけつこまゆよ
おめや喜ぶすぐりてはかる

おまゆ千石こまゆが千石
たぬまゆ共に三千石よ

三千石なるまゆやまかざり
三千石なるまゆやまかざり

おかげ(繁昌)とお祝いを申す
おかい(繁昌)とお祝いを申す

(資料提供　尾見力松)

春駒をうたう母娘は、正月になるとかならずまわってきた。(二百戸
ほどの中山を毎戸まわるのに、三日ぐらいはかかる。台所へ入って、
春駒の唄のひとくさりをうたつて、一錢、三錢、多い家で一〇錢もも
らうといった。

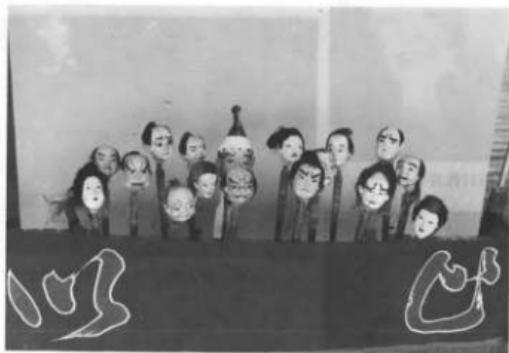
春駒の母娘は、母親が太鼓をはたくと、娘が駒をふつてうたをうたつ
た。二くだりずつうたつては太鼓と駒をふるのを交代した。駒には鈴
がついていて、振ると鳴った。太鼓はうちわのような形をしていた。

この「春駒の唄」は、尾見力松さん(明治三十七年生まれ)が、門
付けとしてまわってきた春駒の母娘から歌詞を教わって記録しておい
たものである。

中山へは、大正から昭和のはじめにかけて、利根郡川場村から母娘
の「春駒」が門付けにやってきたという。当時、中山では養蚕による
収入が第一であつたから、どの家でも、春駒を歓迎した。かいこがあ
たるようによ、春駒の唄をうたつてもらつたといふ。

春駒母娘の仕度は、絵などで見る旅芸人と同じで、手拭をかぶり、手甲をつけ、わらじをはいていた。母親のほうはふつうの仕度であったが、娘はきかぎっていた。

春駒は、台所の土間でうたい、金とか餅などをもらうと、うたをやめて、次の家へまわっていった。(中山)



尻高人形かしら（高山村教育委員会）



役原獅子舞（尻高）（井田安雄 撮影）



尻高人長芝居（佐藤政雄 撮影）



中山神社神楽殿（中山）（佐藤政雄 撮影）



役原獅子頭（尻高）（井田安雄 撮影）



三島神社神楽面（高山村教育委員会）



三島神社神楽殿（中山）（佐藤政雄 撮影）



三島神社神楽面（高山村教育委員会）



中山神社太々神楽（佐藤政雄 撮影）



三島神社神楽面（高山村教育委員会）



中山神社太々神楽（佐藤政雄 撮影）



三島神社神楽面（高山村教育委員会）

り	
離縁	119
離婚	146
危柱	34
隣保班	82
る	
ルス仏	180
れ	
礼服	13
恋愛	138
連中花	213
ろ	
ろうそう	54
六角塔婆	152
六算	71
様尺	151
ロクブガ塚	102, 115
六文銭	149
わ	
若い衆	78, 137, 163
若いしょ頭	78, 84, 122, 137 142, 143, 188
若い衆組	84, 121, 136
若いしょ契約	85
ワカイシ座敷	84, 85
若い衆理窟	142
若木迎え	162
ワカダンナ	93
若水汲み	160
ワカメ	67
若者集團	78
ワキザ	41
わくさ	71
別れ島田	152
ワカレトウベ	155, 156
和諧講	88
ワタシコ	166
わたり木	46
ワタリゲエ	34
わらぐつ	19, 20, 52
わら細工	52
わらじ	52, 58
ワラジガケ	11, 19, 20
ワラジヌギ	81, 96
薬鉄砲	185

麦こなし	62	や	ゆきぐつ	20
むこぎもん	14		ユズリ	150, 154
虫下し	70		ゆっこおび	16, 17
ムジナとタヌキ	199		ユナガシ	70, 116, 132
虫歯	70, 129		弓	133
虫除け	13		弓張提灯	142
ムシロ	41		よ	
棟木	34		夜遊び	121, 137
ムナギモチ	33		宵節句	175
村入り	81		ヨイマチ	114
村構成	78		羹蟹	44, 53, 54
村仕事	83		妻子	94
ムラ人足	97		養子っ子の盆腹	182
村回り	144		ヨカヨカアメ	67
村役	81, 87		ヨキ	27
め			ヨコザ	30, 40, 41
メイドマ	85, 106		ヨコメカキ	49
命名	120		よせいぎ	12, 14, 16
めかご	71		ヨッジロ	56
メケエ	158, 170, 187		四ツ身	12, 17
メクラジマ	14		ヨトオサレ	30
瓶が仕事する	198		夜泣き	132
メシヤキモチ	25		夜泣き石	116
メハジキ	123, 151, 152 153, 155		夜なべ	19, 62
メリンス	14		ヨバイ	121, 137
メンバ	24, 31, 58, 66, 67 166, 176, 198		夜番	83
も			よびかえす	146
モガリ	123, 152		余分児	71
モグラ	184		夜干し	132
もち	27, 33		ヨボリ	42, 61
モチ糞	48		よめぎもん	14
餅つき	189		ヨメゴ	54, 117
モチドドメ	63		嫁ゴッパタキ	158, 167
モチモロコシ	189		嫁のお茶	144
もどき	28		嫁のご年始	93, 162
尻針	149		嫁の里帰り	172
モノヅクリ	164		ヨモギ	175
モノビ	27, 52		ヨモノ	117
もみふり	46		ヨリイグルマ	32
桃太郎	191		ヨリイ袖	17
ももひき	11, 15, 16, 58		夜のひと	54
モロコシ	25, 189		ヨロク	95
紋つき	13, 14		ら	
モンベ	16		雷電神社	101, 106, 107
門牌	123, 151, 155		雷電祭	84
			ラントウ	155, 180
			ランブ	42
			雪	74, 79

帝神	120	前掛け	15, 16
奉公人	81	まえだれ	16
ほうそう神	116	磨崖仏	112
ほうそうだな	116	マク	59
ホオツキ	117	枕石	123, 151
豊年花	73	枕団子	46, 117, 122 148, 151, 153
ホウバイ衆	148	枕飯	30, 122, 148, 151, 153
放牧	56	マケ	98, 181
訪問着	14	まげ	18
ほうろく	31, 170	マケ墓	154
穂かけ	159	孫祝い	131
ボク	165, 166	マゴダギ	128
ほぐい	29	マス	33
牧草地	57	マッコブチ	40
ホケイ	138, 145	マッチ	44
ホゾ繩	53	マツバセン	85
保存食	29	松引き	157, 163
ほたもち	28, 174, 183	松迎え	187
ほた餅オゴリ	59	まないた	31, 163
ほっかぶり	18	間引き	120, 127
ホッタテ	12, 38, 90	マブシ	53
擺立小屋	45	雛子	94
ホトトギス	194	マンゴロウ	191
ホド焼き	166	マムシ	159
歩幅	75	まむしのキヌ	72
ボヤ	41, 44, 53, 55, 61	マムシよけ	20
盆	28, 145	豆木	170, 190
盆市	181	まめなげどし	190
盆送り	181, 182	豆人形	208
盆踊り	85, 182, 215	豆まき	170
ほんがら	182	魔物払い	150
盆行事	179	魔物除け	152
盆ゴザ	179	まゆ	53, 67
盆棚	156, 179, 180, 181, 182	まゆかき	54, 55, 158 165, 166, 169
盆の見舞	181	マユダマ	28, 53, 55, 58, 72 110, 157, 158, 159
盆花	179, 180	マラッシャマ	162, 164, 165, 167 170, 171, 176, 183
盆花取りの話	193	マユエ木	157, 161
盆迎え	180, 181	魔除け	123, 147, 167, 170, 175
盆札	181	マラン	116
ホンぐつ	20	まるき肥	50
本家	96, 97	マンガ洗い	47, 176
本膳	28, 150	まんがっこ	22
本裁	12	万才	213
ポンデン	104, 111, 146, 147	まんじゅう	28, 183
ポンノクド	133	マンジュウ笠	214
本厄	136	マント	20
ま			
埋葬	150		
埋葬法	53		

み

三日月様	71
ミカン	32, 56
三国街道	64
見越し入道	199
三島信仰	100
三島神社	100, 102, 174
水祝い	158
水ごり	147
水番	44
ミズブサ	34
水虫	69
水餠	157, 159, 160
味噌	11, 25
响日ソバ	189
ミソカダンゴ	186
みそせえ	29
味噌玉	11, 25
ミソハギ	180
みそふみぐつ	20, 52
味噌ヤキモチ	26
ミタマ祭り	158
道がり	174
ミチンバ	179
道しるべ	65
道普請	83
みづくい	55
ミツクチ	126
三ツ身	12, 17
三峯講	90
ミツメ	27, 121, 128, 129
三つ紋	13, 14
水口	45, 164, 165, 168
ミノ	20, 21, 58
身の丈太刀	102
巳の日	117
耳っぽさぎ	156
ミマイウケ	149
宮参り	17
ミョウガ	50
明神様	13, 103, 174, 184
む	
六日爪	163, 189
六日年	157, 162, 163, 189
無縫仏	156, 180, 182
ムギあげ	95
ムギまき	48
ムギメシ	22, 29

初誕生	133	ヒカリダマ	147	ふ	
初撃	56	彼岸	28, 145, 173	ふうきやきもち	26
初詣で	160	ヒキウス	24, 51	ふうこうかぶり	18
初寄合	163	引き物	148	ふかしまんじゅう	28
はてなし話	195	ひき割り	22	フキゴモリ	35, 90
馬頭観音	112, 168	ピク	24, 53	ブキン	55
ハナ	164	ヒクサ刈り	43, 58, 166	福守神社	110
花籠	151	ヒクサ小屋	38, 58	フシ	53, 77
ハナッサク	56	千草場	58	フジクラ	19
花まつり	174	ひくさやま	57	フジツル	50
はなむすび草履	19, 52	ヒグラオウツ	56	藤の花	175
花餅	172	ひじき	28	不祝儀	28
ハバキヌギ	112, 159, 169, 184	ヒシコ	108, 167	豚	57
ハイビック	191	ひし餅	172	ブタくつ	20
羽二重	14	ヒシュ	53	ふたとこどし	162
破魔弓	151	火種	145	二晩契約	111
はよ	61	ひっかけぎもん	17, 127, 131	ふだんぎ	12, 14, 16, 21
腹帯	123	ヒッコ箸	186	ぶつけ	215
腹切り道具	138	ヒデ	42	仮壇	189, 190
ハラミ箸	158, 165, 166, 168	ひとえもん	12	不動様	112, 174
針供養	13, 170	人玉	73, 147	フナ	76
ハリジマイ	13	一ツマナコ	170	フナ休み	54
ハリナワ	75	ヒツカ	44	冬橋	65
針休み	13	ひとつ身	12, 17	触れ役	81
春祈仙	118, 153	七日	155	フロウばたけ	177
春駒	214, 217	一七夜	127	風呂桶	32
春駒歌	212, 215	ヒドロ	21, 44	風呂敷よめご	141
榛名神社	72, 106	ひな市	172	分家	96, 97
春祭り	174	ヒナ送り	173	フンダギ	68, 123
晴着	12, 13, 14	ひな人形	171, 172	ふんどし	15
葉分け	49	ひねり餅	32	ふんどし祝い	135
ハンギリ	35	ヒノエのかかり	150	^	
半身上	56, 93	ヒバ	24	ヘエナタ	60
ばんだい餅	27	ひび	70	ヘソクリ	93, 95
半纏	12, 15	火吹竹	41, 135, 163	ヘソの緒	120, 125
ハンデ	47	火伏せ	71, 167	別火	122, 149
半人足	54	百觀音	107, 112	へび	72
半巾帯	15	百三十三とこぎもん	134	蛇の伊勢詣り	194
半めし	11, 22	百姓の祝い	165	蛇嫁入り	192
ひ		百姓の稲荷様	183	便所	118
ひいき花	213	百姓の神	173	便所の神様	111, 128
火入れ	82, 83	百八灯	159, 181	便所まいり	127
火打石	162	百枚ぼんでん	146	ほ	
ヒエ	11, 21, 23, 29, 44	ヒヤッコサマ	171	棒押し	137
ヒエゴメ	23	冷ヤ汁	25	ホウガ銭	213
ヒエダンゴ	25, 60	雀	75	防寒着	20
ヒエマイ玉	29, 165	肥料	49	詫	124
稗鉢	21, 48	昼夜紙團	178		
ヒエヤキモチ	25, 26	披露	144		
		抬い親	121, 134		

七つ坊主	121, 133, 136	ヌルメ	45	は	
七つ前	134			灰焼き	50
七日	154	ね		壳蒸	66
七日塔婆	155	ネエさんかぶり	18	ばくらさま	13
七日のダンゴ	155	ネエラ	110	墓掃除	177, 179
七日の念仏	155	ネギヌタ	143	博多帯	16
鍋すみ	19	ネコ	38, 41, 52, 53	幕なおし	123, 152, 153, 155
なべめし	30	ネコノシッポ	93	馬鹿婿	194
なますもの	28	ネコマタ	147, 148	ハカリサシ	54
生にしん	24	ネジリ菓子	25	はき物	19
なまり	215	ねじりはちまき	19	伯乗	56
ナミ仏	153	ネエシロ桜	74	馬喰	55
ナリコダマ	166, 168	ねずみがえし	54	羽子板	133
流れぜき	32	ねずみ除け	72	箱膳	30
繩帶	13, 16, 149	熱さまし	69	橋神様	65, 116
南京糸	29	ネノゴンゲン	112	橋人足	83
ナンコンサマ	116	涅槃金	171	ハシッパ	84
ナンド	36, 120, 124	年忌	155	橋普請	65
ナンマイダ	106	年季奉公	62	ハジメクンチ	183
に		捺持	70	柱子守り	135
におい袋	17	年始回り	160	ハズナ	21
ニギッコ	26	年中バライ	153	機織り	21, 55
二十一夜様	79, 89	ねんねこ	17	はたけいも	26
二重氏子	174	念仏	153	破談	146
二十三夜講	79, 88	念仏講	114	蜂	71, 74
二十三夜様	89	念仏衆	154	ハチヒラキ	98
二重廻し	20	念仏玉	27, 153, 154	鉢巻	18
荷繩	66	の		八幡様	105
二重ケイヤク	86	ノイヘイ	152	八勝神	188
ニュウ	58	農家組合	81, 87	八十八夜	46, 61, 74, 174
入家式	141	農家の年取り	157	八丁ジメ	81, 176
乳牛	56	農家の祭り	164	八幡神社	106
入梅田植	46	農具	50	初市	66
女人講	88	納税組	82	初卯	161, 169
ニワ	76	農の五月	43, 44	初午	26, 27, 53, 105, 106, 116 159, 166, 170, 183, 187
ニワオキ	46	農休み	28, 51	初絵	129, 161
ニワコロガシ	48, 186	の木	187	八海山	101, 110, 182
ニワ休み	54	のしもち	133, 161	二十日正月	158, 169
人形芝居	212	覗きこみ	137	初雷	117
妊娠	123	ノチノモン	125	ばっかりめし	24
ニンソク	83	ノッポ	44	初子	172
妊娠	118, 119	野辺送り	153	初肥い	163
妊娠の禁忌	126	のぱりがえし	175	バッコン	19
人別集め	166	野回り	110, 183	ばっこん下駄	20
ぬ		ノメシ	52	八朔	101, 145, 182
ぬいたび	20	野焼き	59, 82	初正月	133
穂い紋	12	のらぎ	12, 15	初節句	133, 171, 172, 174, 175
ぬか袋	21	乗合バス	65	はったん	47
ノンビ		ノンビ	59, 83		

て					
手うす	23	唐ちらりめん	14	トラド	58
出稼ぎ	62	トウナス	118, 188	トリアゲバアサン	121
できもん	70, 73	とうなすかぶり	18	トリイバシラ	56
テコ	35	とうなすぶうこう	18	鳥追い	158, 167
テダネ	53	トウネッコ	55	トリザカナ	142, 143
てっこう	16, 58	とうば	55, 135	とりのくち	46, 116, 168
鉄瓶	31	トウバッ子	132	トリの日	12
手拭	18	豆腐	117	ドロムシ	47
デハノメシ	122, 123, 141, 151	同盟会	83, 84, 85, 137, 171	トリムスピ	122, 137, 140, 142
出不足	83	同盟厄年	85	トロケブ	60
手ぼうろく	31	トウモロコシ	29	どろぼうかぶり	18
手間売り	62	棗塗送り	33	とろめし	162
てめえおり	21	ドウロクジン	85, 166, 167	ドングリ	29
寺の年始	157, 162	ドウロクジン焼	78, 167	ドンドン焼き	73, 84, 137, 166
寺詣り	153, 155	ドガテ	118	トンビノハネ	121, 138, 139
寺無尽	92	常盤の塔	197	春龍様	115, 133, 134
出羽三山	102	毒消し	67	春龍信仰	121
てん	62	ドコウジン	111	な	
天上げ祝	60	床の間	38	苗代	45
天気占い	170	床柱	38, 39, 143	苗日	46
テンキマツリ	72, 176	トコロ	23, 29	苗間	164
天気予知	75	としあげ	136	ナエマザクラ	45
天狗	158, 183	年報い	135	名占い	135
天狗講	86	年男	157, 160, 161	ナカジケ	73
天神講	89, 159	年神様	112, 136	中獅子	210
天神様	69, 105, 171	年神棚	163, 188	ナカジロ	45
電灯	42, 66	としこしそば	189	長袖	12
テン葉	49	成徳神	161, 188	ナカノクンチ	183
テンバ	59	とひとり	111, 134, 157	中日	114
天保錢	83		176, 189	長持	141
テンボシ	56	年取り魚	189	中薬師	114
と		戸立薬師	114	中山紙團	85, 104
トオネ	66	トチバシゲエロ	189	中山宿	64
十日夜	27, 114, 159, 185	トトクイゲ	121, 131, 133	中山神社	100, 174
どうぎ	15	トトックビ	130	中山陽氣	72, 74
同行パライ	213	ドドメ	54, 63	ナギナタ	44
冬至	160, 188	土鍋	32	投げ銭	213
同志会	84, 107, 137, 160	トネマブシ	53	ナゲモチ	33, 106
トウジュウ	97	ド葉	49	伸人	138, 140
ドウシン坊	23	どぶろく	28	伸入札	121, 138
ドウシンメン	23	とばぐち	190	疎かけ	199
同族意識	101	トマノツボ	38	ナタ	60
道祖神	101, 108, 137, 158	トマノデエ	143	なだれ	53, 77
	166, 187, 197, 198	トマリゾメ	121, 139, 140	名付け	129
道祖神人形	168	土用	27	夏振舞	93, 94, 145
道祖神焼き	85, 135, 136	土用干し	13, 177	夏祭り	85
鐘々渕	74, 195, 196	土用ばたち	177	七草	157, 161, 163
		土用餅	178	ななこ	13
		豊松流	207	七社参り	116

ゾガラ	49, 117	七タ	159, 176, 177	茶づけ	30
俗信	12	タヌキ	62	茶の間	38
俗謡	203	種馬所	55	ちゃんちゃんこ	15
底抜けびしゃく	119	種桜	45	中氣	70, 71
そば	27, 28, 44	種屋	67	中間	141
そばかき	26	頼母子講	92	中番	143
ソラッペ	52	煙草	44, 48	チュウマイ	53, 67
ソリ岬	65	タバツツラ	35, 189	ちゅうやぎ	13
反町の薬師様	136	足袋	11, 19, 20	中宿	141, 142
添わざか森	119, 196	だまう	66	ちょいちょいぎ	12, 14, 21
村有林	43	打撲症	69	チョイヒゲ	19
た		たぱつら	50	錦合せ	142
田植	27, 46, 117, 165	田堀り	45	ちようず場神様	116
田植つじ	202	タママイ	67	チョウセンビエ	25, 26, 165
タウエビヨ	54	卵めし	28	チョウセンヤキモチ	26
大区長	82	魂呼び	122	チョウチン	53, 77
大黒様	161	タマンマイ	53	帳場	149
大黒柱	39, 41, 203	田休み	47	丁半	214
大根の年取り	159, 184 185, 189	タラッペ	29	丁半屋敷	98
大根まき	52	梅入れ	121, 139, 140	チョウベシ	153
代参講	79	だるまぐつ	20	チョボクレ	214
大師講	27	タロウジ	45	ちょんまげ	18
太子講	90, 160, 186	タロベエモチ	45	チリメン	13
太子講荒し	186	タワラ	165	チンゲ	132, 134
大豆	44	俵ころがし	214	ちんくらさま	13
太々神樂	174, 212	俵藤太	197	鎮守様	131
ダイドコ	38, 138	だんご	23, 28	貨機	21, 55
大日堂	106, 115	男根	142	つ	
椎肥	57, 58, 164	誕生餅	133	ヅー	77
タイマツ	58	旦那座敷	40, 41	通常会	84, 137
ダイマナコ	158	胆苦炎	69	ヅカ	76
台湾米	29	地下足袋	19, 20	ツキウス	51
高機	14, 21	力石	215	月見だんご	28
高張提灯	141	力くらべ	85, 215	月祭り	184
たきりめし	161	力米	128	ツクレイ	56
タケ	76	力じまん	137	告げ	148
タケ休め	54	力もち	158	つき木	41, 42, 83
田シブ	21	チギ	76	つけひも	12
たすき	15, 16	地ぎょう	33	ツジュウ	51
立臼	40, 117, 153	ちきしょう	55	ツジュウダンゴ	28, 186
タチナワ	151	地芝居	103, 210, 213	土売り	18
ダチンヅケサマ	56	地神様	46, 48, 52, 88, 110 159, 173, 183, 190	筒袖	12
辰巳風	74	チゴイ	43, 45, 50	つつっぽ	15
タテジ	33	チショウ	98	ツナギ	189
タテソメ	33	血止め	69	チナギ	50
タテナガ	18	地まり	33	ツバキ	117
たてまえ	12, 30, 33	茶カジ	30	ツブレカ	99
だて巻	15			ツボ	38, 190
				ツミッコ	23

しまい正月	158, 169	暑気あたり	69	スリコギ	31, 138, 163
しまいぜっく	172, 173	食事の禁忌	161	するい	132
	174, 175	職人	18, 66	ズロース	16
島台	142	初手薬師	114	諫訪様	72, 103, 155, 178, 184
清水岬	64	初七日	155		せ
シメエクンチ	183	尻まくり	169	製糸場	62
しめえひがん	173	シリミナグチ	45	製炭	43, 59
シメ縄	98, 187, 188	じり焼き	25, 26, 110, 159 176, 179, 183	青年会	85
霜	74, 79	素人歌舞伎	103	精力剤	69
しもしらす	54	しきかき	45	せえめんば	24, 31
霜場	44, 53	シロケブ	60	石尊信仰	100
シモンヨケ	71	白無垢	13	吸止め	69
尺ジメ	76	ジワカサレ	92	せちもち	27
社日	47, 52, 110, 159 173, 183, 184	ジワゲ	81, 92, 97, 141	セツ衣裳	11, 13
社日ばたち	173	しんうどん	28	節供	27, 145, 173
ジャンボン米のめし	22	しんかん皿	33	せつたい	171
十王様	158, 168	芯中	208, 209	節分	163, 169
祝儀	28	神経痛	70	節分年	189
十五日がゆ	157, 164, 165, 168	神事舞	211, 212	背中当	52, 61
十五夜	28, 183	神社の年始	162	背ぼらみ	123
十三仏	114	身上わたし	95	セーミ	13
十三夜	28, 183	腎臓病	69	背守り	127
出棺	150	ジンタク	93, 97	セリ	29
十二講	79, 81, 85, 86, 87 107, 108, 173	新田宿	64	セリタタキ	163
十二講組	87	シンドメ	49	浅間様	105
	33, 34, 45, 60, 86, 87	シン松	188	染色	21
十二様	100, 107, 108, 124, 128 161, 162, 164, 173	シヤヤク	122, 150	先祖祭り	98
十二の餅	33, 34	シンルイマケ	98	仙台平	13, 14
十八ガユ	158, 168			センダンベエ	62
十四日年	163, 189	す		千とこ着物	121, 134
狩獵	62	すいき	26	千度詣り	122, 146
十六メーダマ	110, 165, 166	水車	51	ぜんのもち	93, 134, 145, 172
順養子	95	水神様	32, 110, 131	センバ	47
ショイコ	52, 66	すいとん	23	千羽ガラス	157
ショイ繩	66	スエヒロ	144	千匹がゆ	158, 168, 182
ショイハシゴ	61, 66	スキバラエ	21		
しょいめし	28	スケ	36	そ	
上越線	64	すげ笠	18, 58	添うが森	119, 196
常会	82, 86	すず米	26, 52	霧書	73
正月様	157, 160, 161, 188, 190	すすはき	187, 188	壯健	78, 83, 84, 86 106, 107, 178
正月棚	158, 160, 161, 166, 188	すすはきどし	189	葬式	82, 117, 148
しょうぎ	31	すずり石	197	ゾウスイ	162
焼耐	33	ズダ袋	149	ぞうずおけ	31
ジョウヅカイ	82	捨子	134	草履	19, 20, 52
ショウヅともぎ	194	素手どり	61	ソウリヨウ	93
ショウヅ湯	119, 174, 175	庚儀	43, 59, 75	ソウリヨウ切り	159, 180
ショウヤ	81	スマドウフ	160, 187	葬礼着	14
少林山講	90	スマモチ	33, 34	葬列	147, 151
		炭焼き	60		

こたつ	38	催青	53	三本辻	132, 133, 134, 151, 153 156, 158, 168, 180, 181
小太郎潤	197	歳暮	145, 188	サンマタ	38, 187
伍長	81	祭文	214	産見舞	128
こづかい	95	サイロ	57	三やく	135, 136
コックリサン	73	ザガタメ	141	三夜講	89, 107
コデ	95, 120, 124	先獅子	210	サンヤマチ	88
ゴティギブルマイ	122, 144	作業着	16, 21	サンヨヅキ	33
コデドリ	95	サクイ	49	三鷹亡	111, 117, 119
ことじまい	13, 28, 158, 170	作神	101	し	
ことはじめ	13, 28, 170	作番頃	81, 198	寺	70
粉慨	32	サクリ	56	塩釜講	79, 90, 107
五人組	82	酒買い	121, 139	塩釜様	124
コネバチ	61	すけがさ	20	塩釜信仰	101
コバン包	33	酒造り	32	塩釜神社	90, 100, 105
木びき歌	61	酒まんじゅう	28	塩原太助	197
木挽職人	81	笹を引く	148	塩ひき	24
小日向紙	43, 58	笹の葉	153	ジガイ鉄	150
古峯講	86	坐産	120	ジカタ	92
コブシ	74	差し金	208	シキリ	77
戸触れ	81, 83, 137, 162	ササラ振り	211	仕事着	11, 15
胡麻	117	ザックリ	141	仕事始め	157, 161, 163
駒下駄	20	ザヅケ	143	シジ	76
小麦	48	里芋	26, 117	地震	74, 118
ゴム靴	20	里神楽	211, 212	地藏様	114
虚無僧	214	里帰り	138, 139, 144, 175	獅子場	211
米買い座敷	40	里の米	126	獅子舞	210
米ぐらし	22	サナ	48	シジ休み	54
米のめし	27	真田街道	65	四十九日	152, 153, 154, 155
五目飯	28	真田紐	66	私生児	94
子持牧場	59	サバ	95	シタザ	41
子守り	135, 137	サハイ	188	シタノザシキ	40
子守子かぶり	18	サブロク	76	七五三	135, 185
コリトリ	122, 147	ザマ	181	地鎮祭	33
五輪田	44	猿田彦	111	しきりばんてん	15
ゴロゴロ	53	申の日	12, 117	しつけ	68
衣がえ	176	サルムスピ	21	ジッケッコウ	158, 169, 214
コワク	110	さわぎ鳥	146	シトヤ	55
婚姻囲	138	三月節供	171	しなっ皮	50
権現荒れ	83	サンゲ	156	死に鳥	146
権現博打	103	三三九度	142	死装束	149
金剛杖	152	さんじゃく	12, 16	シノミ	34, 134, 183
混作	49	三十三とこあつめ	134, 135	芝居	212
金精様	110	三条鍊	67	師走市	67
コンニャク	39	さんしょうやきもち	26	シビ	125
金比羅様	105	産泰様	101, 124	シビ布團	21
ゴンボッパ餅	26	サンドイモ	48	洪柿権現	103
婚礼	82	サン俵	153	四方たてつけ	39
さ		三年味噌	117	シボリ菓	49
サアキ	50	産婦の食物	126		
		三宝荒神	39, 101, 111		

忌中念仏	154	九十九夜	174	ケヌキメンバ	31
キツネ	119	九十九谷伝説	195	県庁着	14
キツネッポウシ	61	クズクジ	29	ニ	
キツネの嫁入り	199	クズヤ	35, 59	コイコドリ	50
義太夫	207, 212	クズモノ	67	こうかけ	16
キヌガササマ	161	薦売り	66	コウガンジ	181
キヌヌギツイタチ	157, 159 176	口まつり	28	後見人	97, 122, 149, 150
杵	31	区長	81	講集団	79
キハダ	21	クツツキ	121, 138	江州反物	66
キミ	22, 27	口説き	214	江州や	66
鬼門	71	組立式舞台	209	庚申講	86, 87, 107, 184
客座	40, 41	口焼き	170	荒神様	68, 111, 119
客目録	140	くびる	127	講談	214
救済道路	64	クマザサ	173	コウチ	35, 80
胡瓜	117	組ケイアク	91	コウデ	71
キョウカタビラ	149	クミマワリ	139	ごうてきさま	198
行者	115	区有林	43	ごうでっぽう	198
共同水車	32, 51	藏開き	164	香典	122, 148, 149
行人塚	102, 115	ぐりばう	55	弘法様	115, 134
キヨウバシ	116, 158, 168	クルミ	21, 26	弘法伝説	195
清め	153	クルリ棒	36, 198	興舞	211, 212
共有財産	29	黒釜	59	交友会	84, 137
共有山	83, 188	桑	54, 63	コウリヨク	90
共有林	43, 82, 83	食わすの女房	193	コエニワ	149
共和会	85, 137, 141, 178	桑原ぱり	54	氷餅	27, 176
キラツズ	24	クンタン炭	50	五月節句	174
切りあけ祝い	48	クンチナス	119	虚空蔵様	101, 112, 116
キリックラ	215	け		九日夜	159, 185
キリハギ	118, 153	桂庵	54, 62, 98	ゴザ	21
キツネエ	46	ケイト切り	45	小作働き	47
禁忌	182	契約	63, 78, 81, 83, 84, 85 86, 137, 173, 178	小作料	47
金甲桶荷	105, 171	コザシキ	125	コザル	208, 209
金紋	14	ござっき下駄	20	こしあげ	12
キンチャク	95	ゲエロ	71	こしきりじゅばん	15
金融無尽	92	ケエカキ棒	168	蓋下取り	54
く		ケゴ	76	こしひも	16
クイゾメ	132	ケサッ子	126	腰袋	13
クイブチ	97	けしねじ	23	腰巻	15
黒ご	209	ケンベエ	59	五尺ぎもん	127
草刈りじばん	15	下駄	19, 20	コシャリ	53, 76
草競馬	56	ケダイ	52	ご祝儀	139
草ちらし	45	結婚	138	小正月	157, 161, 163
草餅	175	結婚團	121	こじょうはん	23, 25, 35, 46
くされ波岸	173	結婚式	83, 184	コジラシ	45
くされ盆	181	結婚年令	138	ゴゼ	213, 214
草分け	98	けっと	20	ごせいにん	147, 201
グシ	155	結禊炎	70	子育地蔵	115
ぐしもち	27	ケデエ	21		
		毛抜き合せ	11, 24, 31, 58		

おやじかぶり	18	カジカゲエロ	74	蚊帳	21, 57, 184, 186
お留守居様	159, 180, 184	かじご俵	61	斧刈り	12, 19, 24, 34, 59
オンシン米	122, 150	カジゴ焼	43, 60	カヤの箸	178, 186
女一見	122, 144	カシミヤ	13	カヤ場	35, 57, 58, 59, 82, 83, 90
おんなしのお正月	163	カシヤ	123, 147	斧ブキ	11, 12
女の仕事	62	鍛冶屋	43	カヤマブシ	53
女の年取り	162, 166, 189	カシラ	207, 208, 210	斧無尽	79, 90
女のよばい	137	カスおおめ	14, 15	カヤ屋根	35
オンペロ	187	風穴	53	カヤヤマ	34
か		風切り縁	74	かゆかき棒	45, 46, 116 157, 164, 165
蚕	76, 79	風除け	72	カラ白	51
かいこあげ	95	家族呼称	94	カラクリ	208
かいこ祝い	54	家族の私財	95	カラス鳴き	146
蚕博	53, 110, 171	かたあげ	12	カラスモチ	45
カイコビヨウ	54, 80	かたびら	13	カラムシ	13
開星	45	カチ荷	61, 198	カラ湯	69
海大坊	198	家長	93	かりあげ祝い	28
寄虫	47	脚氣	70	カリカケ	47, 52, 110, 159, 183
回転マブシ	53	カツチキ	50, 58	カリコ	35
カイバ桶	168	カド	180	カリシキ	43, 45, 50
改良ネズミガエシ	63	カドツケ	213	カリブン	121, 137, 139, 140
返しくら	215	カド火	181	カリミキ	57
カエリドキ	122, 154	蚊とり薬	69	カルタ	215
カカアデンカ	93	門松	160, 161, 188, 189	家例	98, 177
かかし	177	カナックソ	132	川魚	11, 24, 61
かがみ聞き	164	カナコギ	47	川ピタリ餅	186
かがみ餅	33	カナノババ	132	かんじき	19
カカリゴ	95	かねつけ祝	27, 122, 144	カンゾウ	215
カカリット	93, 95	かねつけぶるまい	122, 144	カンダチ	74
書初め	162	歌舞伎舞台	209	棺つき	151
かぎ竹	39, 40, 41, 68, 117, 170	かぶりもの	18	カンヅクロイ	163
かぎつるし	41	カマタイタチ	72	寒念仏	118
角帯	16	神	39, 47, 101, 110, 160 175, 187, 188, 189	観音様	55, 173
かくし神様	199	カマギヨメ	39, 48, 98, 160, 187	かんばら獅子	214
かくし布	149	カマシメ棒	60	眼病	69
かくしばあさん	199	カマド	153	かんびょう	26
神楽	103, 211	カマド祝い	160, 187	かんばうかぜ	71
掛け舞台	212	カマップタ	179	き	
かげ見舞	123, 155	髪洗い	18	紙園	20, 27, 52, 85 145, 159, 178
カゴ祝い	158	神送り	119, 184	ギキヨ	24
カゴツバタキ	93	神かくし	148	飢餓食	29
カサ	99	神棚	32, 39, 163, 175, 183, 189	木小屋	38
風神様	176	神無月	184	キザミ煙草	49
笠地蔵	192	雷	71	キジリ	40
重ねぎもん	14	雷除け	117	キタケ	74
カサボコ	105, 106, 107, 178	神の鉢	162, 189	木だし	33
笠間福荷	118	神のヨリマシ	160	北向觀音	112, 164
飾り替え	157	神迎え	184		
カジカ	24, 61, 74				

卯の日待ち	158, 169	縁結び	119	オジュウヤ	186
ウブアケ	17, 120, 125	お 行		オショイ飯	89
産着	127			お正月様	161, 165, 189
初生毛	131	大島耕	14	お相伴	140, 141, 142 143, 144, 153
産土様	121, 128	黄嶺	70	オシラ様	110, 158, 165, 166
ウブタテノゴハン	128	オオマクライ	169	オシラマツリ	158, 166
ウブの神様	128	大水	79	お諏訪様	53, 110
ウブヤ	131	大毎日	111, 163, 189	オゼンダテ	128, 132
初産湯	127	大麦	48	おそうせん様	55, 56, 117 175, 189
馬	55, 126, 127	オオメ	14, 15, 21	おたきあげ	157, 161
馬市	66	大山祇命	100	オタナアゲ	123, 155
馬捨て場	56	オッカアサキ	41	お棚さがし	162
馬の神様	55, 116	オッカサンかぶり	18	おち	135
馬の介	52, 56	オカタ	44, 92, 93, 98	オチューゲン	140
馬の糞	156	陳福	44, 48	オッカド	142, 157, 158 161, 164, 167
馬の供養	158	おかさま	52	おっかま	119
馬の爪切り	157	お客様もん	14	お通夜	148
馬のとしとり	55, 157, 163, 189	お客様贈	25	おてのこば	28
ウマノワラグツ	168	おがら	122, 132, 142, 150, 151	お寺の子	134
馬屋	14, 56, 129	オカリヤ	34, 66, 90, 171, 178 183, 184, 187	お寺の田植	46
生まれ替り	156	お願ショバタシ	108	オテラマイリ	154
ウミコ	53	オカンダチ	201	お天狗様	111
ウミヒヅジ	118	オキノツボ	38	オトゲエナシ	47
ウリッパ	29	オキノデエ	14	おとこみそ	29
うましかぶれ	70, 71	オキヨメ	123	お殿様の稻荷様	183
え		おぎよん	14	おなめ	11, 24, 25, 29
エエ	33, 35, 62	おっきりこみ	22, 23	鬼嫁入	192
エエゲエシ	36	オクネ	35, 57	鬼除け	186
エエ仕事	46	オクノデエ	38, 39, 142 143, 154	オノアナ	60
エエダウエ	168	オクビヤッコ	105	帝	16
えぐさ	117	オクマン様	103	オヒガミ様	111, 121, 129 130, 131, 188
枝塔婆	156	オクンチ	159, 183	オヒガミメイリ	27, 128
枝松	188	オコアゲ	53	オヒキズリ	68
越後笠	18	オコジョ	108	オビヤ	130
越後ダボ	62	おこそ	18	お百度	122, 146
越前ガマ	67	オコト	13, 170	お振舞	92, 93
江戸妓	14	オコトじまい	187	お別当様	114
エナ	126	オコトハジメ	158	オボアケ	121, 124, 131
エビス講	38, 138, 158, 169	オコトノマカア	158, 170	おぼぎ	17
恵比須様	111, 159, 161 184, 189	オコトボタ餅	158, 170	オボタテ	128
エビス様の朝祝い	169	おこもり	167	オボの神様	128
エビス様の夜祝い	169	オサキ	30	お盆様	156
エビス大黒	32	オサゴ	128	お松むかえ	188, 189
エビス柱	39	お産の神様	120	オミタマ様	157, 166, 168 188, 190
恵方	71	オシイ	87	お召	14
エンアゲ	59	お七夜	130	オヤキ	26
エンガ	50	おもしぎ	22		
縁の下様	180	オシメ	17, 189		

索引

あ

- あいばらみ 123
- 青草刈り 176
- アオケブ 60
- アオダチ 29
- あかぎれ 70
- 赤腰まき 72
- 吾妻神社 103
- 赤不淨 120, 124
- アキタモチ 45
- 秋葉様 104
- 秋葉神社 101
- 秋振舞 45, 93, 94
- あげすいの 31
- 朝一見 140, 141
- 朝草刈 19, 52, 138, 180
- あさげ 52
- アサツクリ 52
- 麻の葉 16, 127
- 朝湯 161
- あしあらい下駄 20
- 足入れ 122, 140
- 足ナカ 19
- 足の祝 133
- 足元 187
- 小豆粥 27, 34, 88, 90, 160
164, 165, 168, 186
- アズキトギ 199
- 小豆飯 132
- アセマメ 44
- 遊び 215
- 愛宕様 104
- アッケ 33
- 後獅子 210
- あとたずね 122, 144
- アトリ 93
- アナブサギ 48, 58, 183, 185
- 穴掘り 122, 150, 152
- 姉さん女房 138
- あべかわ 172
- アーポーヒーポー 164, 166
- 雨乞 72
- 甘酒 28
- 甘党オゴリ 59
- アメ屋 214

- | | | | | | |
|---------|-------|---------------------|---------|-------|--|
| 操人形芸居 | | 207 | イッケ | | 97, 98 |
| あやんご | | 215 | いっちめし | | 22 |
| アライ湯 | | 42 | いっちょうらい | | 14 |
| アラクグワ | | 44 | 五つ紋 | | 13, 14 |
| 荒くれ | | 45 | 井戸替 | | 159, 177 |
| あらひがん | | 173 | 井戸神様 | | 116 |
| 新盆 | | 180, 181 | いとこ合せ | | 138 |
| アワ | | 11, 21, 23, 29, 44 | 稲荷様 | | 105, 121, 128, 159
171, 172, 184, 188 |
| あわしまさま | | 13, 124 | 稲荷信仰 | | 101 |
| あわせ | | 12 | 稲荷神社 | | 106 |
| アンゴ | | 31 | 稲荷祭 | | 27, 159, 187 |
| 安産祈願 | | 87, 101, 124 | 稻こうじ | | 74 |
| 安産の神 | | 100 | 位牌 | | 97, 122, 149 |
| 行燈坊 | | 13 | いはい歯 | | 132 |
| アンペラ | | 18 | 位牌わけ | | 154 |
| い | | | | | |
| 言い継ぎ | | 82 | 位牌わたし | | 153, 154 |
| イカケヤ | | 66 | いぶし | | 32 |
| イキ杖 | | 123, 152 | いぶし飼 | | 53 |
| 息ぬき竹 | | 123, 152, 153 | いび | | 70 |
| イグサ | | 149 | イモガラ | | 24, 29 |
| いざり機 | | 14, 21 | イモチ病 | | 50 |
| 石かつぎ | | 137 | イヨド | | 58 |
| いじめ | | 135, 166 | 妙采 | | 45, 103, 164 |
| 伊勢神宮 | | 112 | イリヤキ | | 25 |
| 伊勢参り | | 207 | 入れ物返し | | 95 |
| 委託飼育 | | 57 | 囲炉裏 | | 12, 40, 68, 170 |
| いたち | | 62 | イワシの頭 | | 170 |
| イタッコ | | 11, 19 | イワスゲ | | 52 |
| 板屋根 | | 35 | 隠居 | | 97 |
| う | | | | | |
| 板割職人 | | 81 | ウエシロカキ | | 45 |
| 市 | | 66 | ウシコロシ | | 56 |
| 一家稻荷 | | 105 | 氏神 | | 43, 106 |
| 市がさけかった | | 193, 195 | 氏子絶代 | | 162 |
| イチゲン | | 134, 141, 142 | 丑の日 | | 69 |
| 一見客 | | 14 | 丑湯 | | 69, 178 |
| イチゲンザシキ | | 84, 141
143, 144 | うしろしばり | | 19 |
| 一見廻り | | 144 | 臼 | | 31 |
| 一升苗 | | 44, 75 | ウソ | | 146 |
| 一人前 | | 58, 63, 76 | ウソぐつ | | 19, 20 |
| いちのせ | | 54 | ウドン | | 22 |
| 一ばんそうご | | 49 | ウドンゲの花 | | 146 |
| イチマケ | | 98 | 卯の刻 | | 160, 161 |
| 一夜様 | | 132 | 卯の刻哉 | | 157, 161 |
| 一夜餅 | | 171, 187 | 卯の日 | | 161 |

群馬県民俗調査報告書第二十一集

高山村の民俗

昭和五十四年三月二十八日印刷
昭和五十四年三月三十日発行

(非売品)

編集発行

群馬県教育委員会

前橋市大手町一丁目一番一号

電話 〇三四一一一一

印刷所

朝日印刷工業株式会社

前橋市元総社町六七番地
電話 〇三四〇一二二二